

# 穂高町他谷遺跡

～県営中山間総合整備事業

あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書～

2001.3

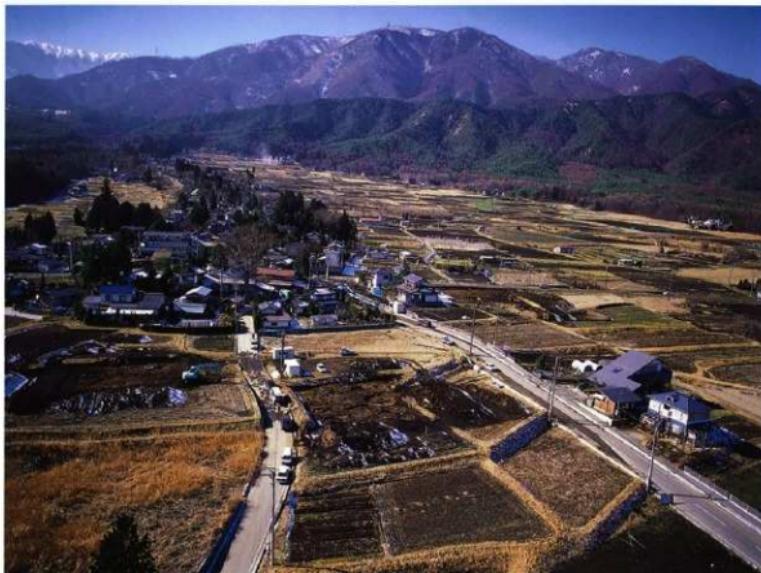
長野県穂高町教育委員会

# 穂高町他谷遺跡

～県営中山間総合整備事業  
あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書～

2001.3

長野県穂高町教育委員会



調査区全景（東より西を望む）



広耳付壺形土器（D地区SB26出土）

# 序

他谷遺跡のある穂高町牧地区は、烏川扇状地の扇頂に位置し、大配石遺構で知られる離山遺跡、新林遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡の宝庫でもあります。また、古代には、朝廷直轄の牧場「猪鹿の牧」が成立し、付近には数多くの古墳も存在しております。さらに、古代の終わりから中世に開かれたといわれる、栗尾山満願寺が浅川山山麓にあります。このように牧地区の歴史は穂高町でも最も古く、町の歴史を語る上では、大変重要な地域です。

今回、県営中山間総合整備事業 あづみ野地区に先立ち、広範囲にわたり牧他谷遺跡の発掘調査を実施いたしました。その結果、離山遺跡にも劣らない配石遺構、縄文時代中期中葉から後期中葉にかけての数多くの住居址、またそれに伴う大量の遺物が出土し、特に中期末の広耳付壺形土器は新聞紙上を飾り、一般の方々はもちろん研究者の間でも大変注目されました。また、鎌倉時代と考えられる大きな掘立柱建物跡の発見、戦国期の建物跡等は、今後穂高町の中世以降の歴史を考える上で、大変貴重な資料になると思われます。

今回の発掘は厳寒の冬に行われたため、調査に携わられた皆様には大変なご苦労をおかけしました。改めて感謝申し上げます。今後は、そんな中で得られた調査結果を最大限に活用し、穂高町の歴史を解明していきたいと思います。

最後に、この調査にあたりご理解ご協力下さいました調査員の先生方をはじめ、地元土地改良区ならびに地元の方々など関係各位に、心より謝意を表して序といたします。

平成13年3月

穂高町教育委員会

教育長 松 尾 明 保

# 例　　言

1. 本書は、県営中山間総合整備事業あづみ野地区に伴い、松本地方事務所と穗高町との委託契約にもとづいて穗高町教育委員会が実施した、穗高町大字牧他谷遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は平成11年2月8日から同年2月26日まで牧他谷遺跡及び寺前・北田遺跡の試掘調査を、平成11年11月8日から12年2月17日まで他谷遺跡発掘調査を行った。また、平成12年9月14日から13年3月26日まで遺物整理作業及び報告書作成を行った。経費については、松本地方事務所からの委託金及び国庫、県費補助金を受けた。
3. 寺前・北田遺跡試掘調査については、今回出土した19枚の渡来銭及び1970年代前半に同場所から出土したとされる2万枚あまりの渡来銭の一部について統計・拓本等を行ったが、紙面の関係上掲載できなかつた。また他谷遺跡調査結果についても、遺構数が多く遺物も極めて多量であったため、その一部についてしかふれることができなかつた。あわせてお許しいただきたい。
4. 本書の編集は事務局が行い、執筆は、以下のとおりである。  
第1章：事務局　第2章 第1節：森 義直　第2節：山下泰永　第3章 第1節：山下泰永  
第4章：島哲男　雜感：田中基義　矢口健陽児　深沢恒則　竹内崇
5. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。  
土器洗浄・接合・復元・注記：青柳美雪、青柳久子、荻原雅子、臼居士朗、北沢礼次郎、北沢治子、重野昭茂、白澤勇、高見沢友子、田口美智子、竹内崇、田中基義、寺島完次、伝田幸、蓮井寅次、深沢貞臣、深沢恒則、矢口健陽児、山下泰永  
土器実測  
石器・土製円盤計測  
土器拓影・断面図  
遺構図整理  
トレース
6. 遺物写真撮影は、キャノンクラブ安曇野支部、金森令和氏、等々力秀夫氏、大滝信之氏にお願いをした。
7. 本書に掲載した図類の縮尺は本文中に図示してある。
8. 本文中の地区・場所名には、次のように略称を用いた。  
例) 牧他谷遺跡B地区上層グリット1A→MTB上G1A
9. 本文中の遺構名には、次の略称を用いた。尚、竪穴住居址・竪穴状遺構・掘立柱建物址は遺跡内において通し番号となっているが、土坑については、地区ごとの番号となっている為、頭に地区記号を記してある。  
竪穴住居址・竪穴状遺構をSB/土坑をSK/掘立柱建物址をST/ピットをP
10. 本文中の縄文時代の編年については、「長野県史—考古資料編一」を参考にしている。
11. 縄文土器実測は今村克氏、縄文の土製品実測は農科町郷土博物館山田真一氏、弥生土器実測は県埋文センター臼居直之氏、古代から中世の遺物実測は桜川中学校教諭寺島俊郎氏に、それぞれお願いした。また、中世の出土遺物については県埋文センター市川隆之氏のご教示を得た。縄論執筆については、大町市教委島田哲男氏にお願いした。記して謝意を表したい。
12. 調査全般にわたり、桐原健氏、樋口昇一氏、山田瑞穂氏、信州大学人文学部教授笹本正治氏、平出博物館長小林康男氏、県埋文センター百瀬長秀氏、河西克造氏、県立歴史館締田弘実氏・近藤尚義氏、県教委原明芳氏・平林彰氏、明科町教委大沢哲氏、松本市教委直井雅尚氏よりご指導をいただいた。記して謝意を表したい。
13. 本調査に関する事務書類及び測量図面類、写真、遺物、実測図などは、穗高町教育委員会が保管している。

# 目 次

序

例 言

目 次

## 第1章 調査経過

　第1節 事業の経緯 ..... 1

　第2節 調査体制 ..... 2

　第3節 調査日誌 ..... 2

## 第2章 遺跡の環境

　第1節 遺跡付近の地形・地質の概観 ..... 5

　第2節 周辺遺跡 ..... 7

## 第3章 調査結果

　第1節 調査の概要 ..... 9

　　1. 調査の位置と調査方法

　　2. 調査結果の概要と主な造構

## 第4章 総括

　　1. 純文時代集落の展開 ..... 54

　　発掘調査参加者総感 ..... 66

# 図 目 次

第1図 他谷遺跡調査地点 ..... 4

第2図 調査地区配置図 ..... 4

第3図 地層断面図 ..... 6

第4図 周辺遺跡 ..... 8

第5図 A地区全体図その1 ..... 14

第6図 A地区全体図その2 ..... 15

第7図 A地区SB47 ..... 16

第8図 A地区SB48 ..... 17

第9図 A地区SB49 ..... 17

第10図 B地区上層全体図 ..... 18

第11図 B地区上層グリット設定図 ..... 19

第12図 B地区下層全体図その1 ..... 20

第13図 B地区下層全体図その2 ..... 21

第14図 B地区下層SB1 ..... 22

第15図 B地区下層SB2 ..... 22

第16図 B地区下層SB3 ..... 23

第17図	B地区下層SB5	23
第18図	B地区下層SB6	24
第19図	B地区下層SB9	24
第20図	B地区下層SB12	25
第21図	B地区下層SB17	25
第22図	B地区下層ST1	26
第23図	B地区下層ST2	26
第24図	C地区全体図	27
第25図	C地区ST3	28
第26図	C地区配石3, SB37	29
第27図	C地区配石4, SB38	29
第28図	D地区全体図	30
第29図	C地区配石1 (SB42), 配石2 (SB43)	31
第30図	D地区SB26	31
第31図	D地区SB28	32
第32図	D地区SB30	33
第33図	D地区SB34	33
第34図	B地区上層グリット出土土器(1)	34
第35図	B地区上層グリット出土土器(2)	35
第36図	B地区上層グリット出土土器(3)	36
第37図	B地区上層グリット出土土器(4)	37
第38図	B地区上層グリット・B地区下層住居址出土土器(5)	38
第39図	B地区下層住居址出土土器(6)	39
第40図	B地区下層・D地区住居址出土土器(7)	40
第41図	B地区下層SK1出土土器(8)	41
第42図	B地区下層住居址出土土器(9)	41
第43図	B地区下層住居址出土土器(10)	42
第44図	B地区下層住居址出土土器(11)	43
第45図	B地区下層住居址出土土器(12)	44
第46図	B地区下層・D地区住居址出土土器(13)	45
第47図	D地区・C地区住居址等, B地区上層グリット出土土器(14)	46
第48図	D地区・C地区住居址等出土土器(15)	47
第49図	出土土偶(1)	48
第50図	出土土偶(2)	49
第51図	出土土製円盤	50
第52図	C地区出土弥生土器	51
第53図	平安・鎌倉・戦国時代遺構出土遺物	52
第54図	A地区SB47床面出土釘	53
第55図	他谷遺跡縄文集落の構成とその変遷(1)	55
第56図	他谷遺跡縄文集落の構成とその変遷(2)	56

## 表 目 次

第1表 遺跡地名表.....	7
第2表 出土石器（主なものを列挙）.....	57
1. 石鎌	
2. 石匙	
3. 石錐	
4. 打製石斧	
5. スクレイパー・横刃石器等	
6. 凹石・敲石・磨石	
7. 砥石	
8. 磨製石斧	
9. 石皿	
10. 石棒・蓑飾品・その他	
第3表 出土土製円盤一覧.....	62
第4表 平安・鎌倉・戦国時代出土遺物観察表.....	65

# 第1章 調査経過

## 第1節 事業の経緯

- 平成10年 4月27日 埋蔵文化財保護協議会を穂高町民会館にて実施。出席者は長野県教育委員会、長野県松本地方事務所、穂高町役場農林課、穂高町教育委員会。
- 5月11日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費交付申請書提出。
- 6月24日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費交付決定通知。
- 6月24日 平成10年度文化財保護事業補助金交付申請書提出。
- 6月29日 平成10年度文化財保護事業補助金交付決定通知。
- 11月13日 施工場所及び施工年度が翌年に延びたため、本年度は試掘調査のみとなる。
- 11月16日 平成10年度中山間総合整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 11月17日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出。
- 12月10日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金変更交付決定通知。
- 12月10日 平成10年度文化財保護事業補助金計画変更承認申請書提出。
- 12月14日 平成10年度文化財保護事業補助金変更交付決定通知。
- 平成11年 3月31日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金の額の確定通知。
- 3月31日 平成10年度文化財保護事業補助金の額の確定通知。
- 平成11年 4月16日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費交付申請書提出。
- 5月24日 埋蔵文化財保護協議会を穂高町民会館にて実施。出席者は長野県教育委員会、長野県松本地方事務所、穂高町役場農林課、穂高町教育委員会。
- 6月8日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費交付決定通知。
- 6月8日 平成11年度文化財保護事業補助金交付申請書提出。
- 6月9日 平成11年度文化財保護事業補助金交付決定通知。
- 11月1日 平成11年度中山間総合整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 12月1日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出。
- 平成12年 2月16日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金変更交付決定通知。
- 2月17日 平成11年度文化財保護事業補助金計画変更承認申請書提出。
- 2月17日 平成11年度文化財保護事業補助金変更交付決定通知。
- 3月31日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金の額の確定通知。
- 3月31日 平成11年度文化財保護事業補助金の額の確定通知。
- 平成12年 4月14日 平成12年度国宝・重要文化財等保存整備費交付申請書提出。(報告書作成)
- 5月31日 平成12年度国宝・重要文化財等保存整備費交付決定通知。(報告書作成)
- 5月31日 平成12年度文化財保護事業補助金交付申請書提出。(報告書作成)
- 6月1日 平成12年度文化財保護事業補助金交付決定通知。(報告書作成)
- 9月27日 平成12年度中山間総合整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- (報告書作成)

## 第2節 調査体制

調査団長	松尾明保（徳高町教育委員会教育長）
調査担当者	山下泰永（生涯学習課社会教育係主任）
調査員	森 義直（地形・地質）
調査協力者	赤田きえ子、飯沼達治、今村 克、臼居士朗、遠藤亮一、片桐 敦、北沢礼次郎、北沢治子、草間秀康、重野昭茂、島田哲男、白澤 勇、高見沢友子、竹内 崇、竹内 充、田中たけ子、田中基義、田中八重子、寺島完次、寺島俊郎、伝田 幸、鳥原正子、中沢雅子、蓮井寅次、藤沢ニ雄、深沢恒則、布山双葉子、古幡達雄、山田庫子、山田真一、矢口健陽児
事務局	平成11年度 胡桃寿明（生涯学習課長）、西條幸生（社会教育係長）、山下泰永 勝野伯一、望月 刚、内山隆弘、矢口 泰、堀金一恵、高山英利
平成12年度	胡桃寿明（生涯学習課長）、西條幸生（社会教育係長）、山下泰永 勝野伯一、内山隆弘、矢口 泰、堀金一恵、高山英利、古畑瑞恵、吉村千月

## 第3節 調査日誌（抄）

### 牧他谷遺跡及び寺前・北田遺跡の試掘調査

（平成11年2月8日から同年2月26日まで実施。他谷遺跡からは、縄文中期から後期にかけての多量の土器・石器が出土する。寺前・北田遺跡からは渡来鏡19枚が出土するが、その場所以外遺構はないことから立会い調査とする。）

#### 他谷遺跡発掘調査

平成11年11月8日（月）～10日（水）・12日（金）・15日（月）～16日（火）調査準備をしながら、A～D地区にトレチをあける。特にB地区の土手の部分は、巨石多し、古墳の可能性もあるため念入りに調査を行う。

11月17日（水）A地区重機による表土剥ぎ開始。検出作業開始。（18～19日引き続き）

11月22日（月）検出作業終了し、ピット、土坑多数。竪穴状遺構あり。掘り始める。

11月24日（水）竪穴状遺構の一つ（SB47）、掘れども掘れども床面にたどりつかない。

11月26日（金）・29日（月）～30日（火）SB47床面検出。地表面から150cm程を測る。土坑・ピット発掘。

11月26日（金）A地区の基準杭設定。（あづみ野開発コンサル）

12月1日（火）～3日（金）・6日（月）～7日（火）掘上がり遺構から測量開始。

12月8日（水）午前中清掃及び写真撮影。午後からB地区重機による表土剥ぎ開始。

12月9日（木）～11日（土）B地区上層検出開始。配石多数。土器多量出土。A地区測量引き続き。

12月10日（木）B地区上層グリット設定。（13～15日引き続き）

12月13日（月）～17日（金）B地区検出及び精査。

12月13日（月）B・C・D地区の基準杭設定。（あづみ野開発コンサル）

12月20日（月）C地区重機による表土剥ぎ開始。C地区B地区と並行して検出開始。

12月20日（月）B地区上層測量開始。C地区西側より配石検出。

12月21日（火）～26日（日）C地区ピット・土坑多数据り始める。大型の建物跡想定。

12月27日（月）午前中A・B地区上層・C地区清掃。午後から空中写真撮影第1回目（～28日）

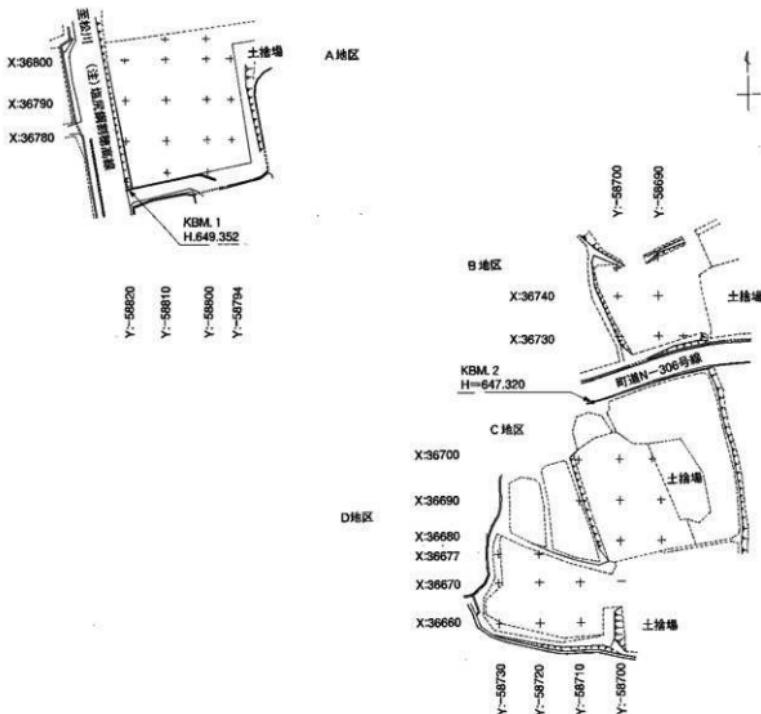
平成12年1月5日（水）～6日（木）B地区上層最終仕上げ。

1月7日（金）～8日（土）B地区下層重機による表土剥ぎ開始。

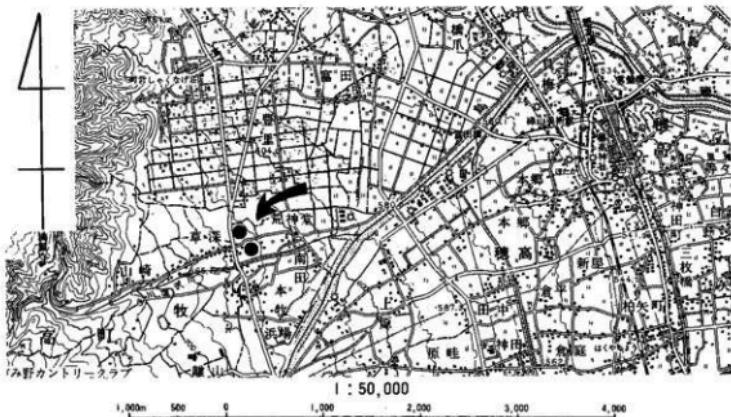
1月10日（月）B地区下層検出。  
1月11日（火）～19日（水）B地区下層検出。検出終了住居から掘り出す。平行してC地区も行う。  
1月20日（木）午前中B地区下層・C地区清掃。午後から空中写真撮影第2回目。  
1月22日（土）～23日（日）B地区下層・C地区掘り上がった箇所から測量。  
1月24日（月）D地区重機による表土剥ぎ開始。検出。広耳付壺形土器出土。  
1月26日（水）～29日（土）B地区下層・C・D地区掘り下げ。平行して測量。  
1月31日（月）～2月5日（土）B地区下層・C・D地区掘り下げ。平行して測量。  
2月7日（月）～9日（水）D地区掘り下げ。B地区下層・C地区最終仕上げ。  
2月10日（水）明日の遺跡説明会準備。  
2月11日（木）午後から遺跡説明会開催。平行してD地区掘り下げ。  
2月12日（土）～13日（日）D地区最終仕上げ。  
2月14日（月）測量機材と発掘機材の一部を残し現場片付け。  
2月15日（火）～17日（木）D地区測量。終了。  
平成12年度遺物整理作業ならびに報告書作成作業。

#### 作業風景





第2図 調査地区配置図 (1:1200)



第1図 他谷遺跡調査地点

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡付近の地形・地質の概観

本遺跡はフォッサマグナ西縁の山麓に位置し、烏川が松本盆地に流出して形成した大扇状地の上に、この川の北1kmの所を西部山地から流下する川窪沢が小さな尾根状の細長い扇状地を形成して載っている。この小扇状地の先端付近で標高645m～650mの周囲よりやや高くなっている所に本縄文遺跡は分布している。

本遺跡の基盤をなす烏川扇状地を形成した烏川は、源を北アルプスの蝶ヶ岳に発し、中古生層を侵食しつつ多くの沢と合流して東流し、須砂渡付近を扇頂とする広大な扇状地を形成している。この烏川扇状地は度重なる隆起により、新旧四面程の段丘面が存在するが、本遺跡付近は最上位の最も古い段丘面の扇端付近に位置し、梓川村によく発達している最上位段丘面の八景山面（上野面）に比定されロームが載っている。ロームの下の土層は、中古生層の硬砂岩・粘板岩・チャートなどの円礫とその砂利層である。

この最古の段丘面上に前述した川窪沢の極めてふるい分けの悪い堆積物が載っている。川窪沢は遺跡の2000m程上流で、満願寺のすぐ東を中古生層と後に貫入した花崗岩との間に生じた断層に沿って南流する北沢と中古生層の山地から東北流する浅川が合流して東流し、遺跡の西約1400mの山崎付近で山地を離れ烏川扇状地上に流出している。この川窪沢はあるときはローム上に堆積物を載せ、またあるときはローム層を侵食して沢が運んできた新しい堆積物を堆積させるなど変化に富んでいる。この川窪沢による堆積物は、中古生層からの堆積岩や北沢から運ばれた花崗岩の亜角礫と、その風化した砂土にロームが混じった極めてふるい分けの悪い砂礫土層となっている。さらにB地区で見られるように、この尾根状の川窪沢扇状地堆積物が、その後雨水や小流などの働きで洗い出されて堆積した暗褐色～黒色土層もみられる。

#### 発掘地点の地形・地質

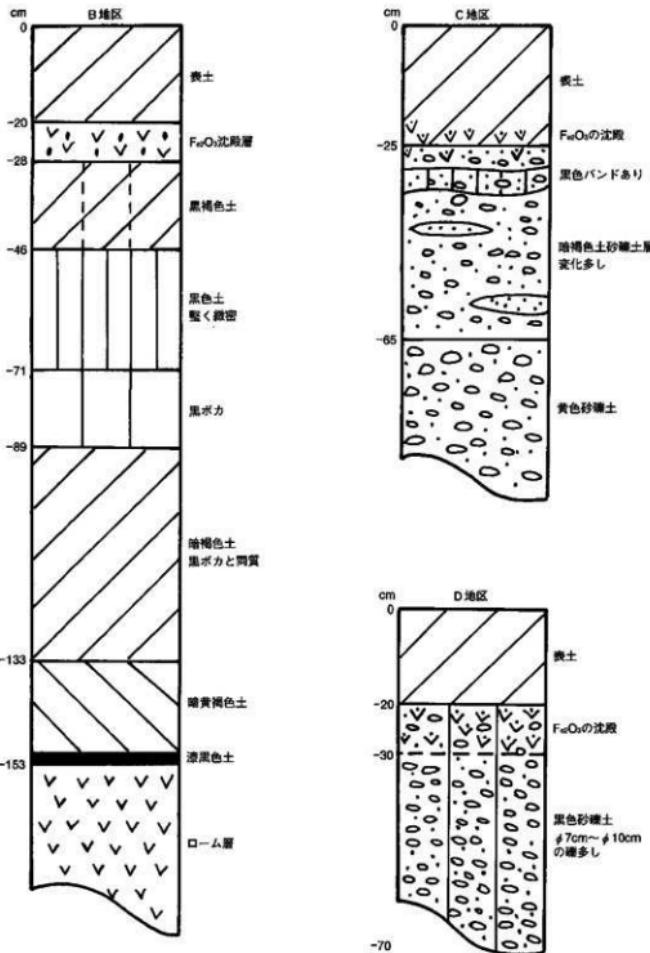
遺跡は前述したことと烏川扇状地のロームが載る最上位段丘面上に堆積した細長い川窪沢扇状地の扇端付近645m～650mにあり、約6.5/1000の東傾斜となっている。この標高650m付近は、烏川左岸に広がる烏川扇状地の最上位段丘面の東端であるとともに、およそ川窪沢扇状地の扇端ともなっている。

B地区は川窪沢による小尾根扇状地の尾根北側にあり東に行くほど深く、古い縄文の住居址はロームに達しており、その上に、尾根状扇状地堆積物から雨水や小流で洗い出された土が柱状に見られるとこく厚く堆積している。

C地区は尾根筋にあることと、開田などで整地されたため浅くなっている。

D地区は尾根筋の南側で少しづつ深くなっているが極めてふるい分けの悪い径7～10cmの亜角礫混じりの砂礫土層が地山となっている。これらの縄文の遺跡を覆っている堆積物はその後の雨水や流水により運ばれた堆積物であり、川窪沢の直撃を受けた形跡はみられない。現川窪沢は流路を南に振り遺跡の南約200mの烏川扇状地上を東流している。

なお、A地区の中世の遺構は、本縄文遺跡の北西約100mのところにあり、烏川扇状地最古の段丘面上のロームが風化した黒ボカとその下のロームが地山となっている。



第3図 地層断面図

## 第2節 周辺遺跡

他谷遺跡周辺の西山山麓には、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世と長きにわたり人々の営みがある。

**縄文時代** 他谷遺跡周辺の縄文時代の遺跡数は多いが、本格的な調査が行われたのは、昭和46年に穂高C.C開発に伴い発掘調査をした離山遺跡、昭和61年に町道321号線改良工事に伴い発掘調査をした新林遺跡だけである。その他は表面採集による資料である。

早期から前期にかけては今のところ、離山遺跡、新林遺跡等から、わずかであるが土器の出土が報告されている程度で、未調査の部分が多く断言はできないが、この時期に該当する遺跡は少ないと思われる。そして、中期に入り、徐々に遺跡数が増し中期後葉にそのピークを迎える。したがって、他谷遺跡周辺にある縄文の遺跡の多くはこの時期に該当する。後期から晚期にかけては、遺跡数もぐっと減るが、離山遺跡からは、大配石遺構が確認され、数多くの後期から晚期にかけての土器が出土している。その他山崎・草深・神谷・新林の各遺跡から、後期に該当する土器の出土が報告されている。

**弥生時代** 上記の離山遺跡の発掘調査の際、若干の土器と環状石斧の出土が報告されている。その他ショウノヒナタ遺跡から弥生後期の土器が出土したとの記録があるが詳細は不明である。

**古墳時代** 穂高町には、現在のところ西山山麓中心に、81基の後期古墳が確認されている。それらの古墳は単独のものもあるが、多くは沢筋あるいは一定地域に分布し、群としてとらえることができる。今回発掘調査を行っている牧地区は、古代「猪鹿の牧」の前身の私牧があったと推定される地域でE古墳群とされ、現在19基の古墳がある。

**奈良・平安時代** 上記の離山遺跡の発掘調査の際、わずかではあるが須恵器・土師器の出土が報告されている。その他牧地区ではこの時期に属する遺物の出土はない。しかし、前述の「猪鹿の牧」がこの時期に勤旨牧となっていることから、関連遺構・遺物が今後発見される可能性がある。また、牧地区浅川山山麓にある真言宗の寺院「栗尾山満願寺」の成立も「猪鹿の牧」と関連しているのではないかと考えられ、古代末と推定されている。

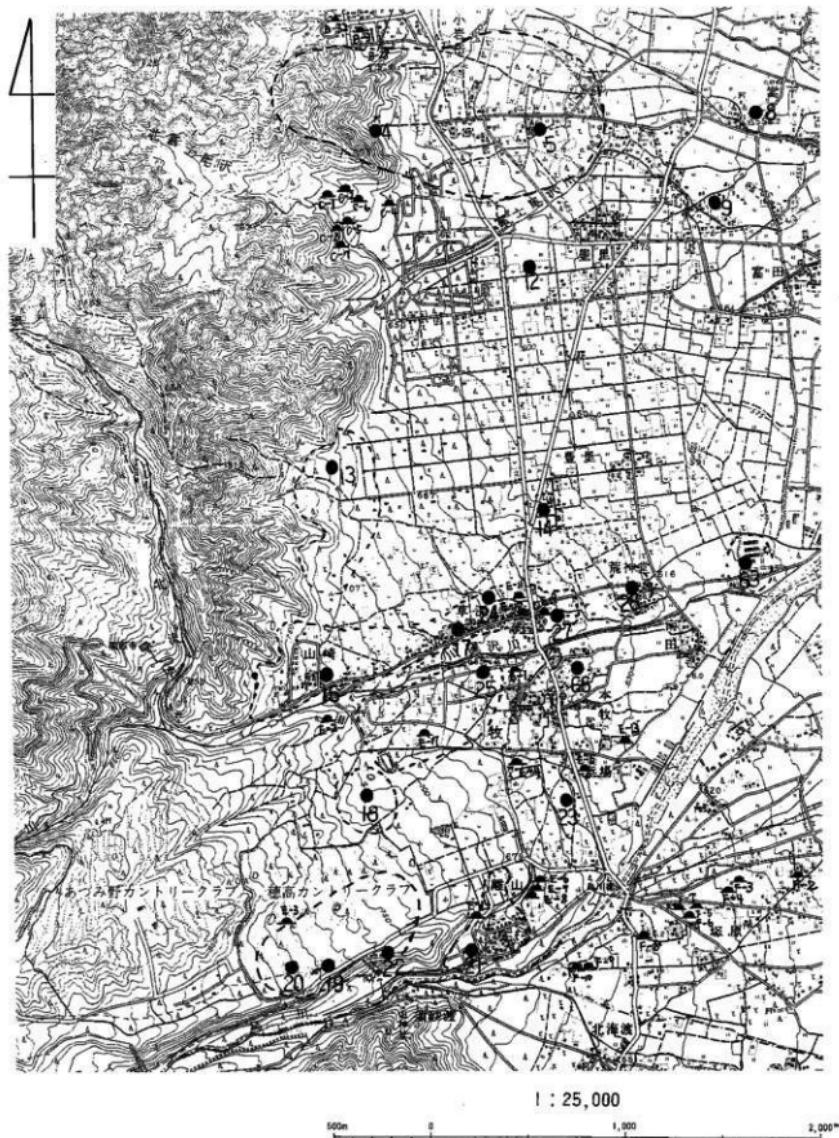
**中世以降** 今回の調査にいたるまでは、牧地区には鎌倉期の遺跡は確認されていなかったが、「猪鹿の牧」・「栗尾山満願寺」があることから、この時期に該当する遺跡の存在も想定はされていた。

戦国時代に入ると他谷遺跡東1キロには空保木城跡が、また北西3キロには小岩城跡がある。また、寺前北田遺跡からは、1970年代前半の水田開拓の折におびただしい数の渡來鏡が出土している。

表1 遺跡地名表（番号は穂高町遺跡台帳による）

番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	歴史
4	青原寺大門				○
5	小岩城下木戸	○			○
8	嵩下神社東	○			○
9	嵩下	○			
12	有明南原	○			
13	寺島畠	○			
14	有明郷上	○			
16	山崎	○		○	
17	草深	○			
18	十三星敷	○			
19	離山	○	○		○
20	大坂	○			

21	堀下	○		
22	ショウノヒナタ	○	○	
23	南原	○		
24	神谷	○		
25	新林	○		
26	荒神堂	○		
27	他谷	○	○	○
63	空保木城跡			○
66	寺前北田			○
B	古墳群（天溝沢沿）			○
C	古墳群（富士尾沢沿）			○
E	古墳群（牧地区）			○
F	古墳群（塚原地区）			○



第4図 周辺遺跡

# 第3章 調査結果

## 第1節 調査の概要

### 1. 調査の位置と調査方法

今回の調査をした地区は、現在の行政区分から言えば草深東部に位置し、現在地元で他谷と呼んでいる場所は今回の調査場所の東にある。したがって本来草深遺跡となるべきはずであるが、遺跡地図では草深遺跡は今回の調査区より西方100~200mの標高665~670mにあり、地形的に他谷遺跡の範疇に含めた方がよいと考え他谷遺跡とした。

まず、今回の基盤整備事業設計図において、切土等があり、埋蔵文化財に影響を与える場所を調査区として次のように決定した。県道塙尻鋪削御高線の東側をA地区とし約1200m<sup>2</sup>を、その南東100mをB地区とし上層約300m<sup>2</sup>・下層約500m<sup>2</sup>を、町道を隔て南側をC地区とし約500m<sup>2</sup>を、さらにC地区南西隣接地をD地区とし約500m<sup>2</sup>を調査範囲とした。なお、B地区は、切土が現地表面より150cmほどあること、遺構がそのレベルまで2面確認されたことにより、上層・下層を調査した。

記録作成及び測量方法は、トラバース測量によって原点を設け、公共座標系により位置を明示した。各遺構、土層図等の実測は、1/20でおこなった。

なお、遺構名は、住居址及び中世の竪穴状遺構（SB）及び、掘立柱建物址（ST）は、全地区的通番号を付けることができたが、土坑（SK）に関しては地区ごとの番号となってしまった。また、ピットについては番号付けることはできなかった。また、B地区上層は、遺構の単位がつかめなかつたため、グリッドを設定しグリッド単位で遺物をとりあげてある。（例、MTB上G1A等）

通しとなっている住居址及び中世の竪穴状遺構（SB）ならびに、掘立柱建物址（ST）の遺構番号の順番は、B地区下層、D地区、C地区、B地区上層、A地区となっている。

### 2. 調査結果の概要と主な遺構

ここでは地区ごとに発見された遺構、遺物を列記し、その概要等についてふれ、主な遺構についてのみ記すことにする。

A地区 竪穴状遺構3基（地下式遺構1...SB47 すり鉢状遺構1...SB49 その他1...SB48）、土坑58基、ピットが多数確認されている。しかし遺構に伴う遺物はほとんどなく、わずかな中世陶磁器と、地下式遺構床面から床構築をした際に使用されたと思われる釘が多数出土しただけであった。以上のことから、これらの遺構は生活の営みにつながる遺構ではなく、その他の目的の遺構と考えられる。なお、今回発見された地下式遺構と類似した遺構は、山城や、館跡などにも見られるところで、地元の人からも以前A地区の西に掘らしき跡があったと言う話を聞いた。本地区の主な遺構年代をわずかに出土している中世陶磁器に求めるとすれば、戦国時代に比定される。また、本地区は北に小岩城、鼠穴城、西山城、東に空保木城、塔原城、南に岩原城等を望むことができる場所にある。

SB47（地下式遺構...第7図）

A地区的南東に位置し、南東隅が欠ける南北に長い長方形を呈す。（南北6.6m、東西5.5m）南東隅に階段状の入口部を設け、それぞれの階段には滑り止めの木材を支えたと思われる枕の跡（小ピット）がある。階段を下りた場所には、床面より一段高い約3.2m<sup>2</sup>の踊り場状のスペースがあり、四隅に底に平石を据えた深さ40cm前後のピットがある。検出面から踊り場状スペースまでは、約75cmを測る。この地下式遺構の床面は、

さらに一段下がった位置（-60cm）にあり、検出面からだと約135cmを測る。床面にはピットは無く、周囲及び中央（東西）に溝が走り、床面縁部に平石が点在する。また、土層堆積が床面周囲溝を境にその内側と外側で全く異なり、外側は明らかに人為的に埋められた形跡が見られたことから、この溝には板塀状の構築物がたたり、外側を土留めしたためではないかと思われた。床面からは南北にほぼ直線的に釘の列が数列確認され、釘の腐蝕で鉄化した木材が出土している。また焼土は確認されなかった。以上の点から床は板敷きであった可能性が考えられる。前述のように床面にはピットは確認されなかつたが、本遺構プランに沿って外側にピットが巡る。これらのピットはこの施設を覆う屋根状構築物を支えるためのものと考えたい。本遺構に直接伴う遺物は釘以外ではなく、覆土から内耳鍛破片、古瀬戸深鉢破片（14世紀末～15世紀前半）、珠洲の指鉢破片（14世紀～15世紀）が出土している。

**B地区上層** 繩文中期末配石遺構（単位不明）、繩文中期末住居址2軒（SB45・46）、繩文後期土器廐棄場が確認されている。本地区は、現在の耕作面から40cmあまりと浅い。東側土手からは多数の大きな石が出土した。これらの石は、配石に使われていた石と考えられ、開田の折に取り除かれたものと思われる。したがって、配石保存状態は非常に悪く単位を見極めることはできなかつた。配石内からは多量の中期末の土器と石器、石棒片、土偶等が出土した。住居址等遺構は黒色土層に掘り込まれているため、プランをつかむことは不可能であった。よって住居址は2軒以上あったと思われるが、石圍炉が確認されたSB45と、本地区南西の花崗岩の平石を7つ敷き並べた遺構を敷石住居址の残骸と判断したSB46の2軒だけとした。繩文後期の土器は、グリット7Aを中心に出土した。その出土状態から土器廐棄場と思われる。出土した土器は、そのほとんどが加曾利B式系の土器で、後期中葉と思われるものである。

**B地区下層** 繩文中期中葉Ⅱ期～中期後葉Ⅲ期の住居址25軒（SB1～25）、繩文中期中葉V期の掘立柱建物址2棟（ST1・2）、繩文中期後半の土坑8基（B下、SK1～8）、ピットが多数確認されている。

#### SB1（第14図）

B地区（下層）北東に位置し、住居址西側及び南西側をSB2・3に、また東側をSB22に切られる。住居址プランは径4.0mの円形を呈し、主軸方向はN-10°-Wを指す。支柱穴は4本である。炉は住居中央にあり掘立柱建物址2棟（ST1・2）、繩文中期後半の土坑8基（B下、SK1～8）、ピットが多数確認されている。

#### SB2（第15図）

B地区（下層）北東に位置し、SB1・8・20を切り、住居址南東側をSB3に切られる。住居址プランは長径5.2m短径4.6mの楕円形を呈し、主軸方向はN-55°-Wを指す。支柱穴は確認されたものは4本であるが、柱間隔から推測すると6本と思われる。炉は住居中央にあり径60cmを測る円形の石围炉である。床は黄色の粘土により貼床となっており、壁面下より内側55cm（平均）に幅15cm深さ10cmほどの溝がめぐり、その溝を境に壁面ではテラス状に一段高くなっている。覆土からは、拳～頭大の石と、横倒しの状態で多数の土器が出土した。繩文時代中期中葉VI期と考えられる。

#### SB3（第16図）

B地区（下層）北東に位置し、SB1・2・4・8、B下SK7を切る。住居址プランは径3.4mの円形を呈し、主軸方向はN-16°-Wを指す。支柱穴は4本である。炉は住居中央にあり径68cmを測るやや辺の張る方形の石围炉である。床は黄色の粘土により貼床となっており平坦である。土器でまとまつたものは、炉の北側床面及び南西隅際から出土した。繩文時代中期後葉II期と考えられる。

### SB 5 (第17図)

B地区（下層）南東に位置し、SB13・14を切る。住居東側1/5は調査地区外となる。住居址プランは推定径4.8mの円形を呈し、主軸方向はN-127°-Wを指す。基本的に支柱穴は外側にめぐる4本と考えられ、内側の4本は旧支柱穴であろうか。炉は住居中央やや北東奥にあり径100cm深さ33cmを測る方形のしっかりとした石囲炉である。また、入口側炉辺は上部が平らな割り石を数個用いて小さなテーブル状に構築してある。床は黄色の粘土により貼床となっているが、南西側ははっきりとしなかった。出土遺物は比較的少ない方であった。縄文時代中期後葉II期の終わりからIII期と考えられる。

### SB 6 (第18図)

B地区（下層）南側中央に位置し、SB10・11を切り、住居址東側をSB14・23に、西側をSK1・2・8に切られる。住居址プランは平均径5.6mの不正円形を呈し、主軸方向はN-37°-Wを指す。支柱穴は他の遺構に切られているためはっきりとはしないが7本前後と思われる。炉は住居中央やや北西奥にあり長径116cm短径64cmの各辺のやや張った長方形の石囲炉である。また、西炉辺南半分は石囲が乱れ炭化物と焼土が幅48cm厚さ5cmで堆積していた。覆土は炭化物を多く含む黒褐色土で、床は黄色の粘土により貼床となっている。土器の出土は比較的少なかった。縄文時代中期後葉I期と考えられる。

### SB 9 (第19図)

B地区（下層）北西やや中央よりに位置し、SB 5を切り、住居址南東隅をSB17に切られる。住居西側1/5は調査地区外となる。住居址プランは南北径推定4.7mの円形を呈し、主軸方向はN-20°-Wを指す。確認されたピットは3本で、調査区外にもう1本あると考えられることから支柱穴は4本と思われる。炉は石を抜かれてしまってはいるが、住居中央北奥にある長径140cm短径100cmの焼土が検出された穴と考えられる。床は黄色の粘土により貼床となっており、ほぼ平坦であった。入口部には直径25cmの蓋石をした埋甕が底部を抜け逆位で埋設され、その東側床面には、大型の甕がつぶれた状態で出土した。覆土からは、拳～頭大の石と多量の土器片が出土した。縄文時代中期後葉II期の終わりからIII期と考えられる。

### SB12 (第20図)

B地区（下層）中央やや南西に位置し、SB10を切り、住居址南西側をST 2に切られる。住居址プランは長径6.6m短径6.0mの楕円形を呈し、主軸方向はN-6°-Wを指す。ピットはいくつかあるが支柱穴となるものは5本と考えられる。炉は住居中央やや北にあり長径88cm短径60cmの楕円形の石囲炉である。床は黄色の粘土により貼床となっておりほぼ平坦である。住居東側から北にかけて、南西側には溝がめぐる。入口部と考えられる付近には50cm前後の石が數個配されその下部は深さ50cmの土坑となっており、小型の磨製石斧・浅鉢の破片が出土した。また、土坑東側には比較的大きな砥石が割られて出土し、床面上からも立石と考えられる石（安山岩製 変形すると80cm）が割られた状態で出土している。土器は比較的少なかった。縄文時代中期後葉I期と考えられる。

### ST 1 (第22図)

B地区（下層）南西に位置し、SB16を切り、北西側は調査区外となる。南北は3間で柱間は北から1.3・1.7・1.3mを測る。東西は調査区外となるため2間+？で柱間は東から1.3・1.5mを測る。ピットの掘り込みは、検出面からP 4は20cmと浅いが、その他は40cm前後で、P 1は50cmと深く底から焼町式土器が出土している。主軸はN-45°-Wを示す。縄文時代中期中葉V期と考えられる。

C地区 縄文中期後葉IV期配石遺構4単位（C地区配石1～4）、縄文中期中葉～中期後葉IV期住居址7軒（SB37・38・40～44）、縄文中期後葉土坑16基（C.SK3～12・14～17）、縄文中期末単独埋甕5基（配石関連の可能性あり）、弥生中期前半土坑1基（C.SK13）、平安時代後半住居址1軒（SB39）、鎌倉時代前半掘立

柱建物址 2 株 (ST 3・4)、中世? 据立柱建物址 2 株 (ST 5・6)、鎌倉時代前半土坑 2 基 (C.SK 1~2)、ピットが多数確認されている。なお、純文中期末配石遺構のうち、配石 3・4 は、上部が大小多数の石と立石（一部は石棒）・丸石等を伴う配石となっている。しかし、それらを取り除くと平石が部分的に敷かれる敷石住居となる。配石 1・2 についても、鎌倉時代前半据立柱建物址・土坑構築の際に壊されているため配石 3・4 ほど明瞭ではないが同様のものと思われる。したがって配石 1 の下層を SB42、配石 2 の下層を SB43、配石 3・4 の下層を SB37・38 とした。しかし、敷石住居内出土土器と上部の配石出土土器の時期差はほとんどないことから、覆土に石を伴った廐墓的な遺構の可能性もある。また、これら 4 つの配石が同時に存在したのか、それとも若干の時期差があり構築されたのかが今後の問題である。

#### 配石 4 SB38 (第27図)

C 地区西側中央南に位置する。上部配石 4 は径 3.2m のほぼ円形内に拳~頭大の石が散らばり、その中には打ち削られた綠泥片岩製の石棒、小型の丸石等が見られた。また、配石 4 の南東脇には頭部を欠いた安山岩製の石棒が立ち、そのすぐ東側に正位で埋甕が 2 基据えられ、西側及び北西側にもそれぞれ 1 基ずつ正位で埋甕が据えられていた。

配石 4 下層の SB38 は入口部分に 3 枚の平石を敷いた住居址で、その一番入口寄りの石の下には正位で埋甕が据えられていた。炉は方形の石闕炉で、住居址中央やや北寄りの位置にあり、長径 55cm、短径 50cm を測る。炉に使用されている花崗岩は、火を受けてかなりもろくなっていた。また、炉内から安山岩製の無頭石棒上部が出土し、石闕炉南東隅の石と接合することから、住居廐絶時に半切し、炉内に埋設したと思われる。本住居址につながるピットは確認できなかった。本住居址の主軸方向はほぼ真北を指し、プランは、遺構自体が黒色土層に掘り込まれているため、はっきりしないが、埋甕と炉から推察すると南北 3 m 強になり上部配石 4 の石の範囲と重なる。

#### 配石 1 SB42 (第29図)

C 地区西側中央北に位置する。他の配石に比べると最も大型の石を使用し遺構を構築している。ただ前述のとおり、鎌倉時代前半の据立柱建物址 (ST 3) 構築の際幾つかの石が抜き取られており、全景がつかめないのが残念である。周辺に点在する大型の石と現存する石から推察し、本遺構を組み立ててみる。

長径 70cm 前後の平石を、ほぼ N-30°-W 方向に横並べに 2.8m ほど配列し、その周りにやや小さめの平石を配し、それを取り囲むように長さ 60~80cm の立石が南端に 1 本、東側に 2 本以上、西側に 1 本以上据えられていたのではないかと思われる。南東隅には丸石がある。また、立石に使用されたと思われる石はことごとく割られており、配石 4 等の石棒出土状況も合わせ考えてみると、鎌倉時代前半の据立柱建物址 (ST 3) 構築の際に壊されたのではなく、この遺構の役割が終了した時点で壊された可能性の方が強いと思われる。本配石南隅からは、蛇紋岩製の玉斧、土製スプーン等が出土している。

#### C. SK13 (弥生中期前半土坑 ····· 第52図 土器)

C 地区南東、SB39 東側に位置する。土坑プランは直径 60cm のほぼ円形を呈し、最大径 31cm を測る。弥生中期前半の壺型土器を正位の状態で埋設し、その壺型土器内部にさらに小型の壺型土器が正位の状態で入っていた。外側の壺型土器内にからは、上記小型壺型土器以外遺物は確認されなかった。また、小型壺型土器内部からは骨片が 1 片確認されたが、ごく小さいもので骨の種類の識別はできなかった。本土坑は、弥生時代中期前半の再葬墓と思われる。弥生時代の遺構は本址以外には今回は確認できなかったが、C 地区北西検出面より同時期と思われる、口縁部及び肩部に押圧突帯がめぐり胴部に条痕文を施した壺型土器片が出土しているため、付近にこの時期の遺構が存在しているものと思われる。

#### SB39 (平安時代後半住居址)

C 地区南東に位置する。プランは南北 4.5m、東西 3.8m の隅丸長方形を呈し、南西隅やや北寄りに石組粘土

カマドを構築している。壁はやや斜めに立ち上がり、検出面から床までは平均30cmほどである。ピットは確認されなかった。遺物は比較的少なく、カマド北側床直上及び北壁中央床直上から出土している。出土した遺物には、土師器壺・壺・甕、縄釉陶器碗底部がある。土師器壺には墨書のあるものが1点あったが、小片のため判読はできなかった。また、土師器甕は輪轤成形によるもので口縁端部が面取りしたものであることから、北信地方に多い甕と思われる。縄釉陶器碗は還元焰焼成である。平安時代の遺構は本址以外には確認できなかった。

#### ST 3（鎌倉時代前半掘立柱建物址・・・・第25図）

基本的には3間×2間の建物址と考えるが、西側には他の柱間とは間隔が狭い柱列がさらに外側に並ぶ。庇状のものと推測される。また、南東隅にも入口部と考える庇状の張出がつく。主軸はN-14°-Wを示す。梁間4.2m（庇まで含めると5.6m）、桁行は東側が8.2m（入口庇まで含めると10.2m）、西側が8.8m（庇部分9.2m）を測る。桁行柱間はほぼ2.7m、梁間柱間はほぼ2.1m、梁の西柱～庇柱間はほぼ1.2mである。尚、本址内にある土坑2つ（C.SK 1・2）は、この掘立柱建物址に付随する施設と考える。また、ST 4もほぼ同じ主軸方向を示していることから、本址に付隨する施設の可能性が強い。掘立柱建物址のピットからの出土遺物は無かったが、SK 1からは山茶碗系のこね鉢、カワラケ皿、中国龍泉窯系の青磁碗（花画文）、砂質粘板岩製の硯が、またSK 2からは、手捏のカワラケ小皿が出土している。これら遺物から本址の年代を推定すると13世紀中ごろとなる。

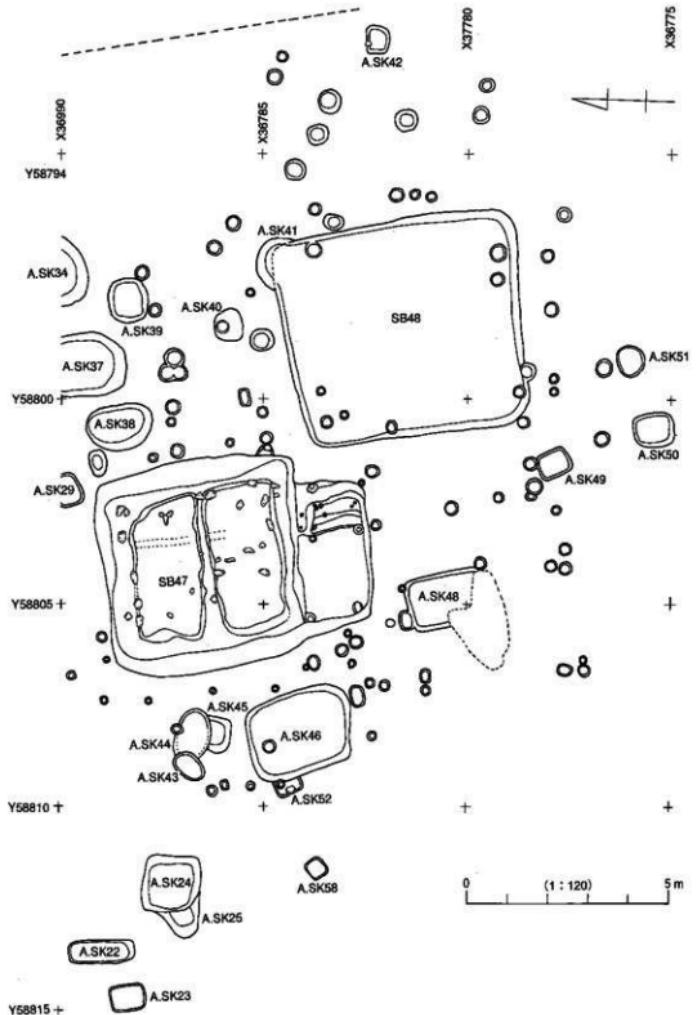
**D地区 繩文中期中葉Ⅱ期～中期後葉Ⅳ期の住居址11軒（SB26～36）、繩文中期後半の土坑30基（D、SK 1～30）、掘立柱建物址1棟（ST 7）、ピットが多数確認されている。尚、SB26の概要については、本紙、「発掘調査参加者雑感」に掲載されている、矢口健陽氏の「広耳付壺形土器について」を参照していただきたい。**

#### SB28（第31図）

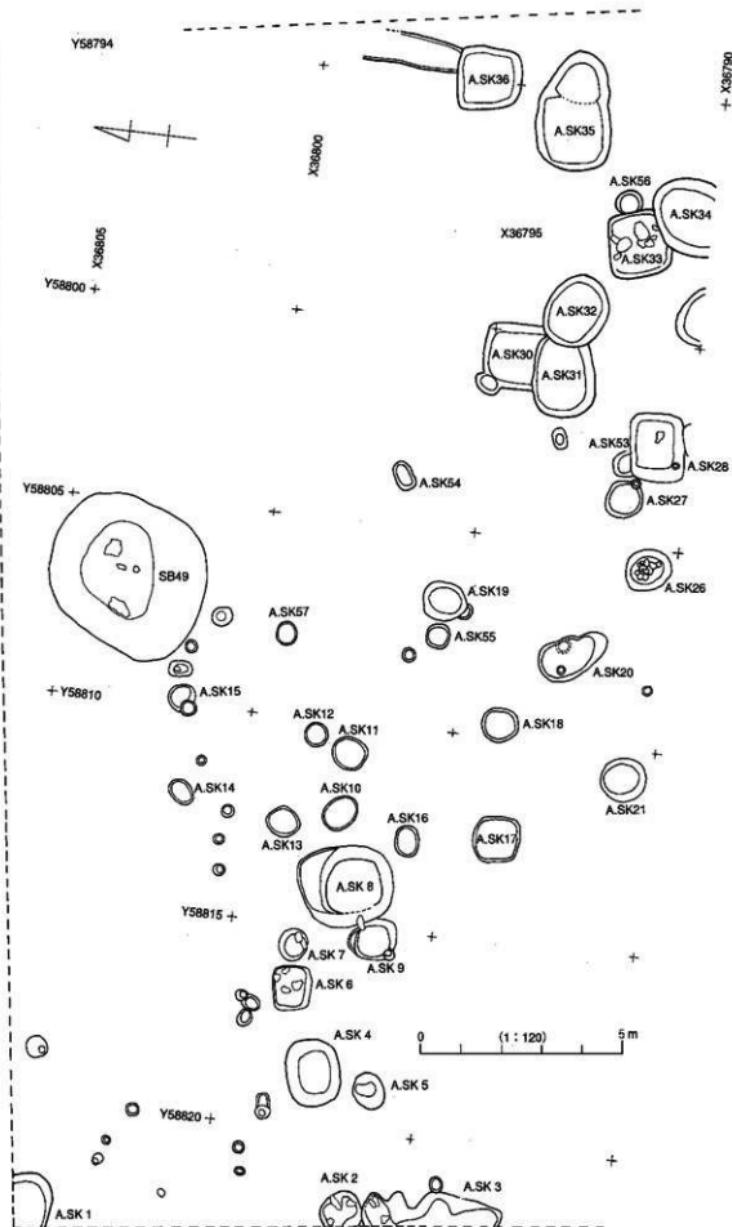
D地区中央やや南に位置する。住居址プランは径4.7mのほぼ円形を呈す。ピットは15検出されたが支柱穴となるものは7本と考えられる。炉の場所は住居中央にある長径104cm短径76cmの楕円形に焼土が検出された箇所と思われる。形態は地床炉もしくは石囲炉（石は抜かれている）であったと推定される。床は黄色の粘土により貼床となっておりほぼ平坦である。住居西側から南東にかけて、北側は途切れ途切れに溝がめぐる。覆土中層から下層にかけては、拳～頭大の石と共にびただしい量の土器がつぶれて重なるように出土した。繩文時代中期中葉Ⅱ期と考えられる。

#### SB34（第33図）

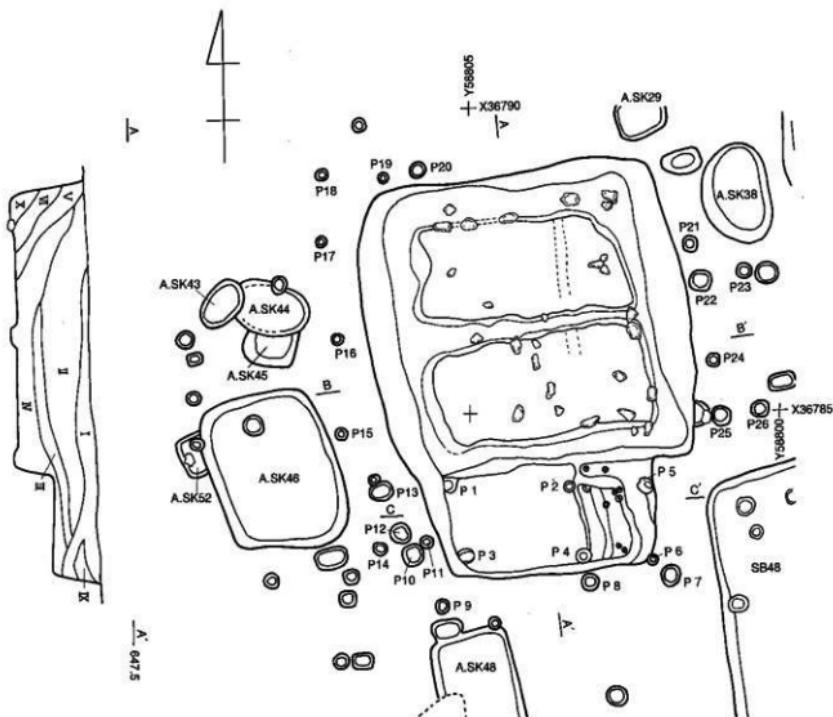
D地区北東に位置し、SB22・35・36を切り、住居址北東隅をD.SK27に切られる。住居址プランは長径6.8m短径6.0mの楕円形を呈し、主軸方向はN-45°-Wを指す。当初本住居址は2軒として考えていたが、出土土器に時間差が無いことから、建替え（増築）したものと判断した。ピットはいくつかあるが支柱穴となるものはP 1～P 8の計8本と考えられ、P 9～P 12は旧支柱穴と推察される。炉は焼土が顯著な箇所が無かったためさだかではないが、住居中央やや北西奥にある旧支柱穴P 11上部で数個の石が並ぶ部分と思われ、形態は石囲炉と推定される。その南東側の長径130cm短径64cmの土坑状の穴は旧炉跡と思われる。床は黄色の粘土により貼床となっておりほぼ平坦である。南東の住居址入口部を除き壁際には溝がめぐる。また、その内側を旧住居の溝がめぐる。遺物は他の住居に比べ比較的少なかったが、入口部北東床面より8cmほど高い位置から土偶が出土している。その詳細については本紙、「発掘調査参加者雑感」に掲載されている、田中基義氏の「出土した土偶について」を参照していただきたい。繩文時代中期後葉Ⅱ期と考えられる。



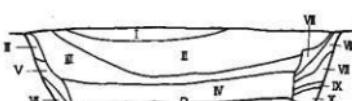
第5図 A地区全体図その1（南側）



第6図 A地区全体図その2（北側）



- I 黒色土
- II 砂礫少量・ロームブロック混入黒色土
- III 砂礫・ロームブロック混入黒色土
- IV 砂礫・ロームブロック少量混入黒色土
- V ロームブロック混入砂礫層
- VI 黒色ブロック混入砂礫層
- VII ロームブロック少量混入黒色土
- VIII 黒色ブロック少量混入ローム層
- IX ローム
- X ローム粒多量混入黒色土



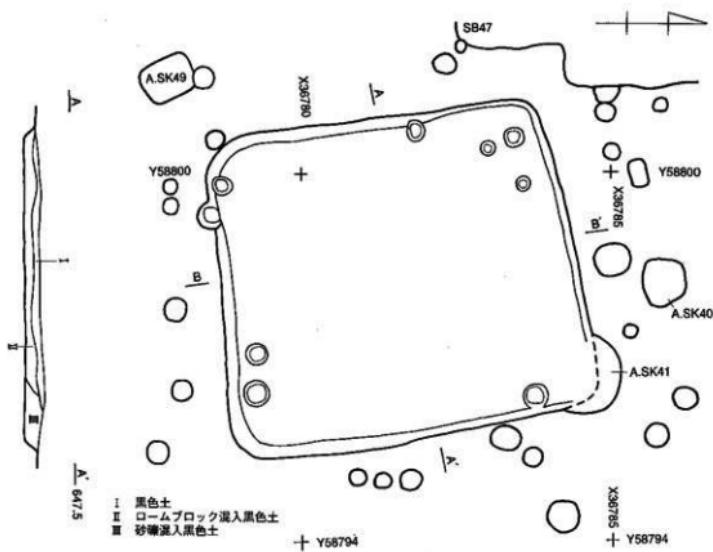
B' 647.5

0 (1 : 80) 2m

C' 647.5

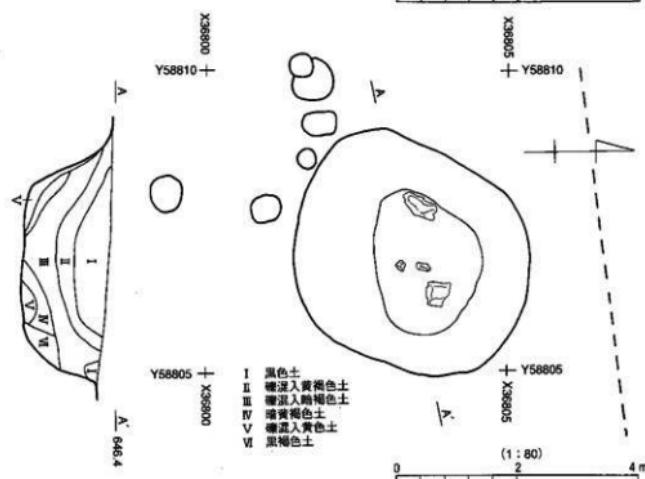


第7図 A地区SB47

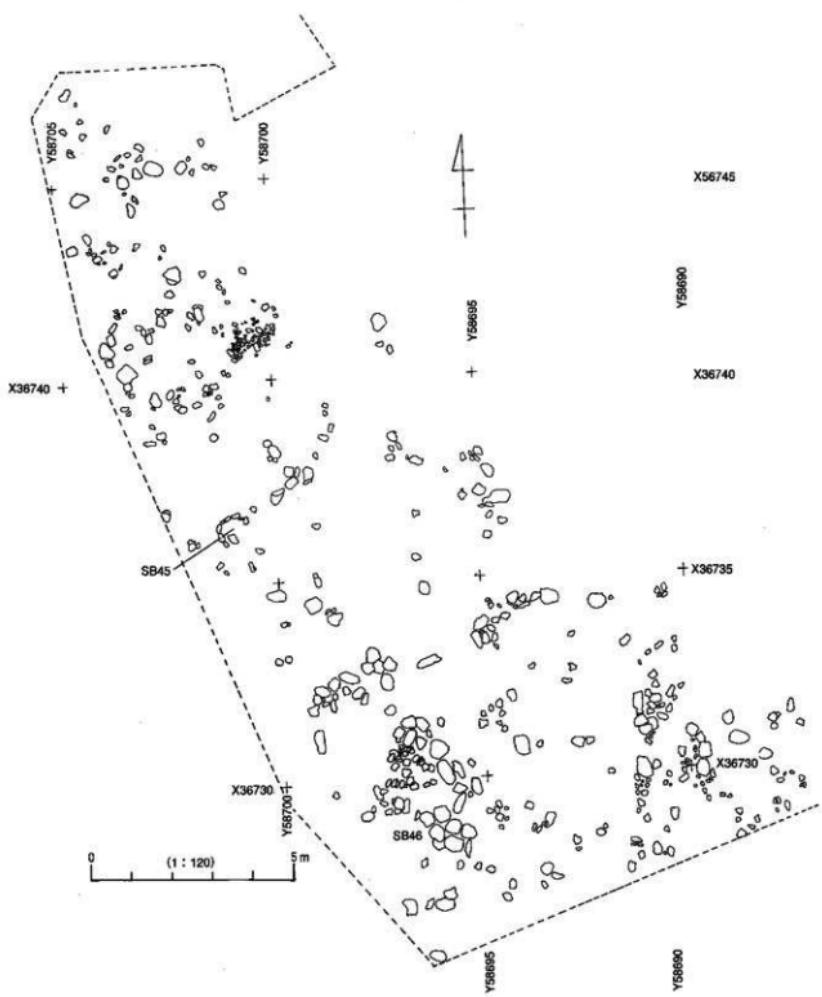


第8図 A地区SB48

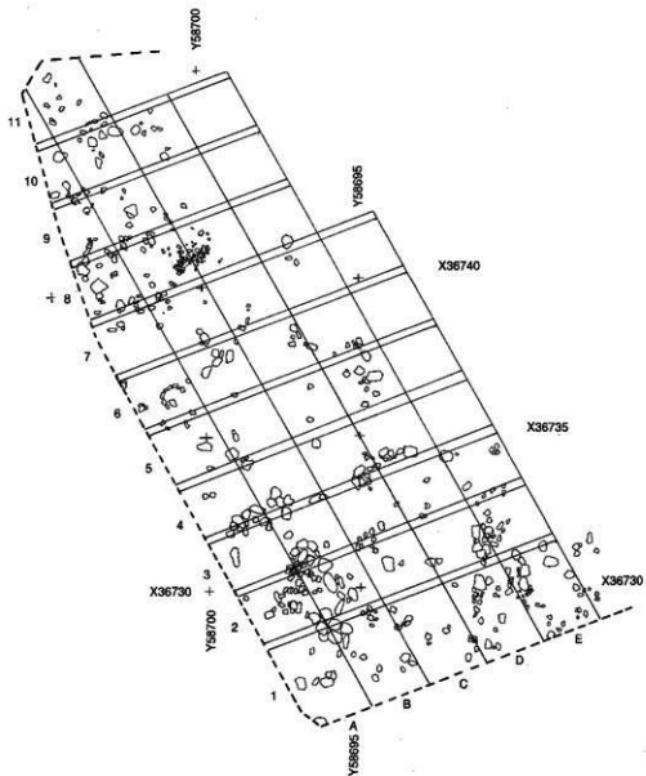
(1:80)  
0 2 4 m



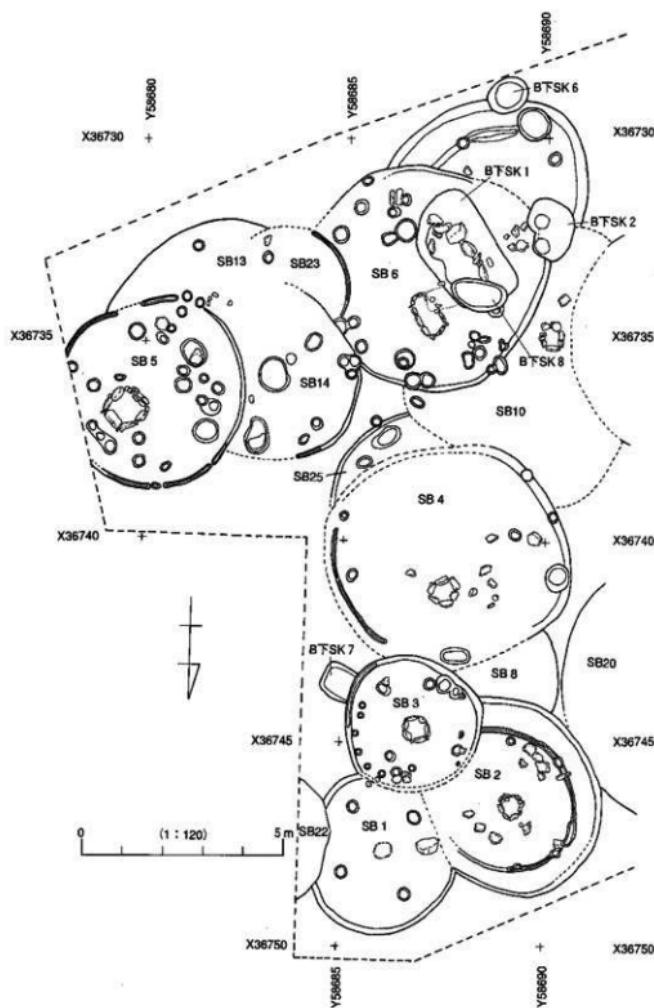
第9図 A地区SB49



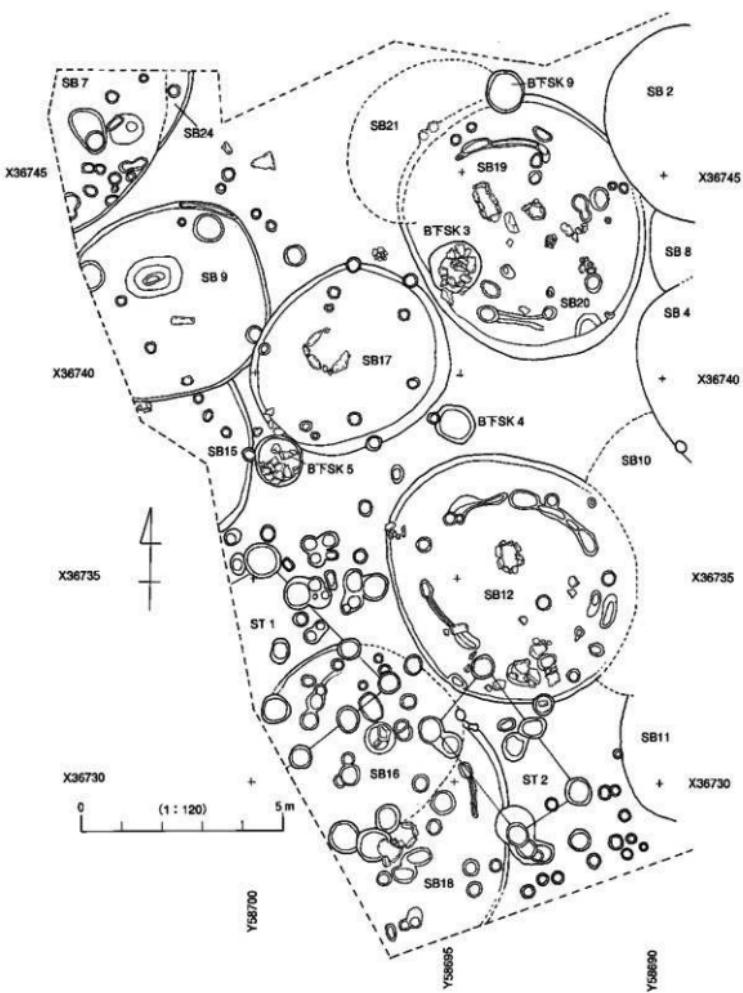
第10图 B地区上层全体图



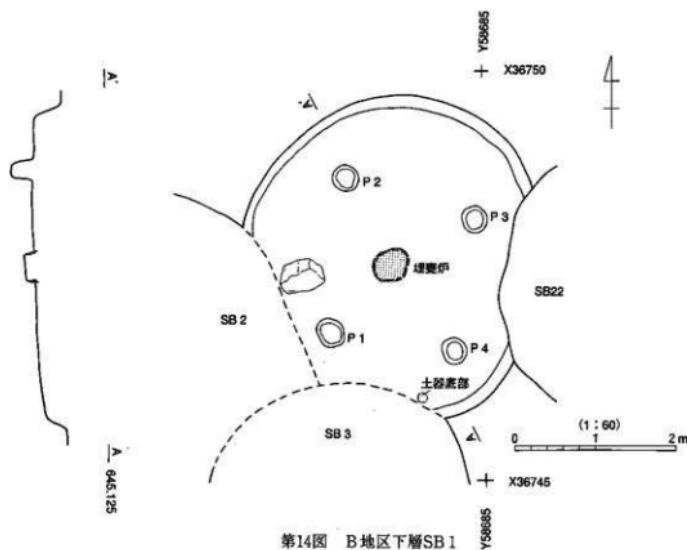
第11図 B地区上層グリット設定図



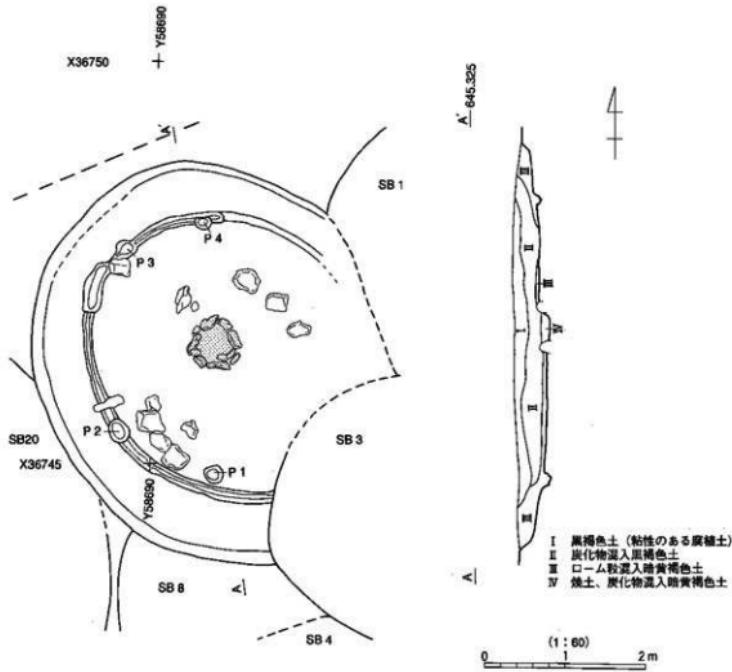
第12図 B地区下層全体図その1（東側）



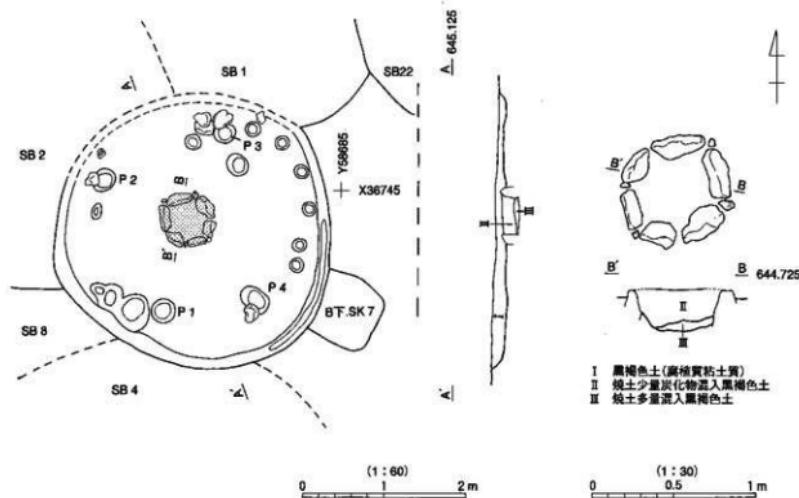
第13図 B地区下層全体図その2（西側）



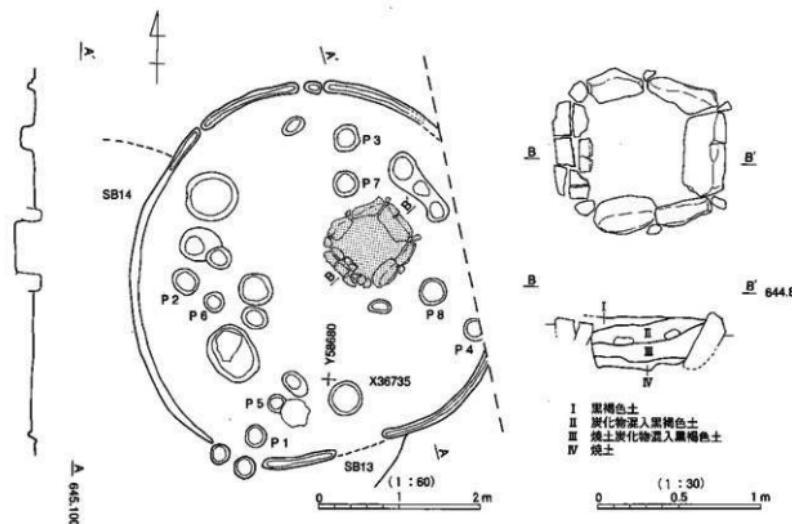
第14図 B地区下層SB1



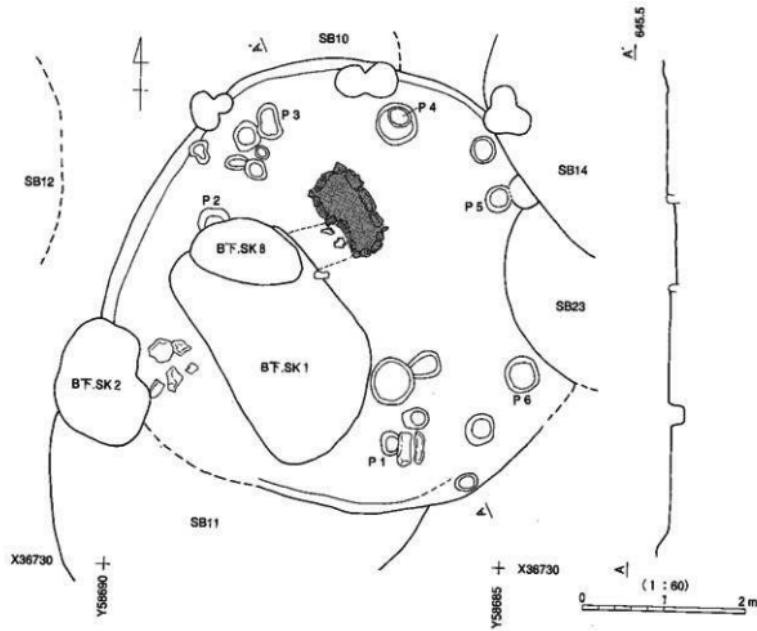
第15図 B地区下層SB2



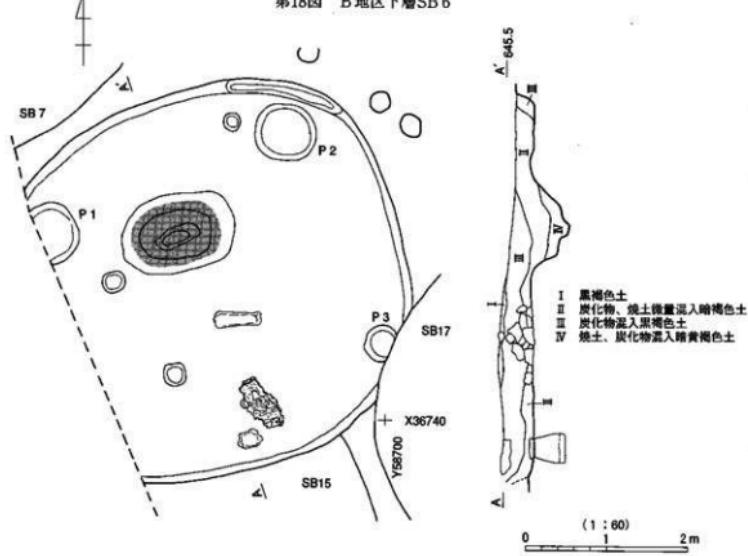
第16図 B地区下層SB3



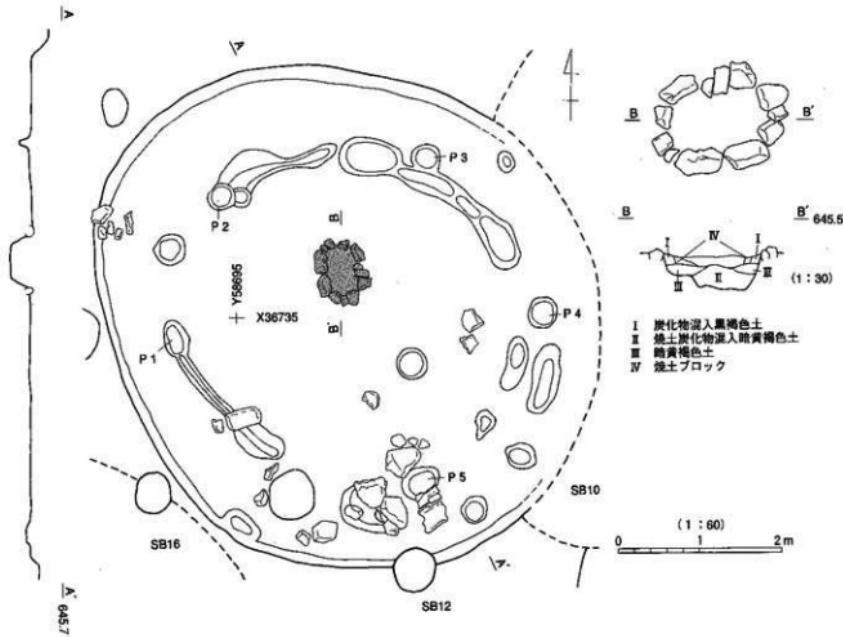
第17図 B地区下層SB5



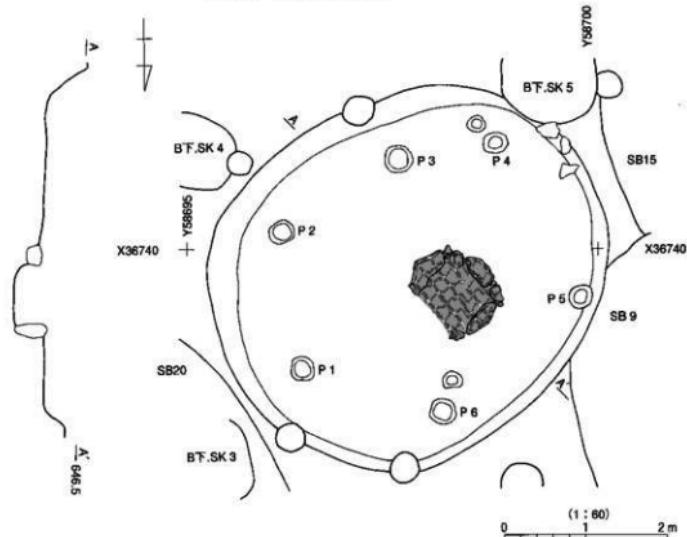
第18図 B地区下層SB 6



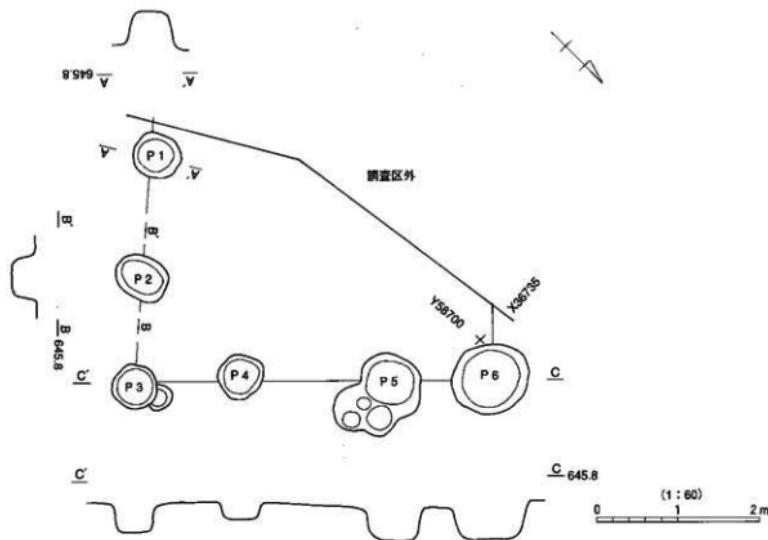
第19図 B地区下層SB 9



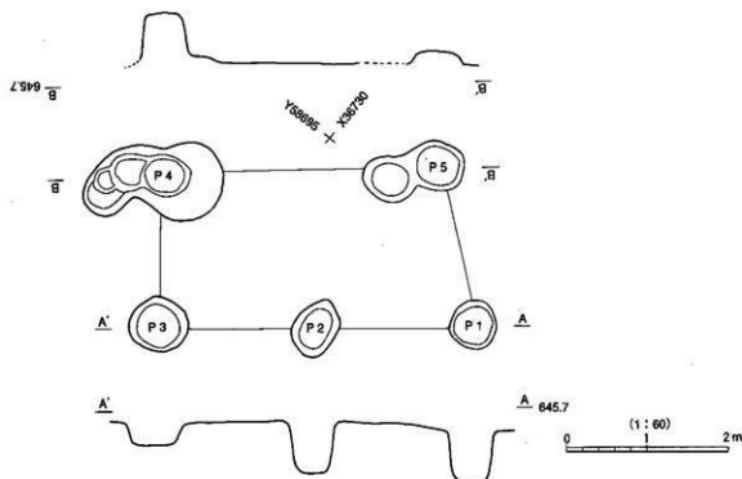
第20図 B地区下層SB12



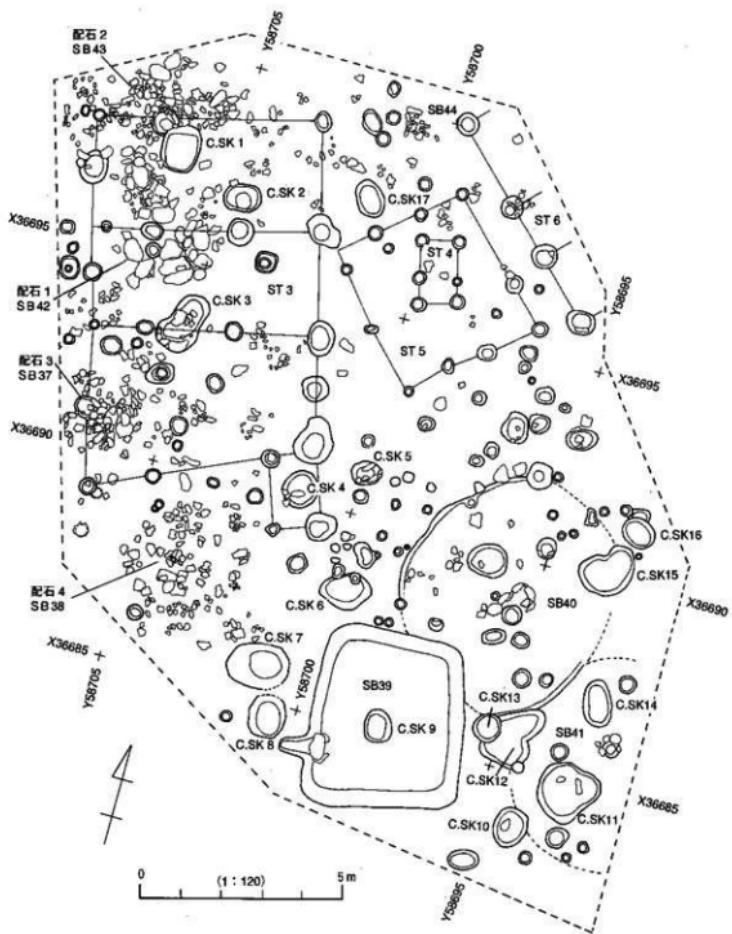
第21図 B地区下層SB17



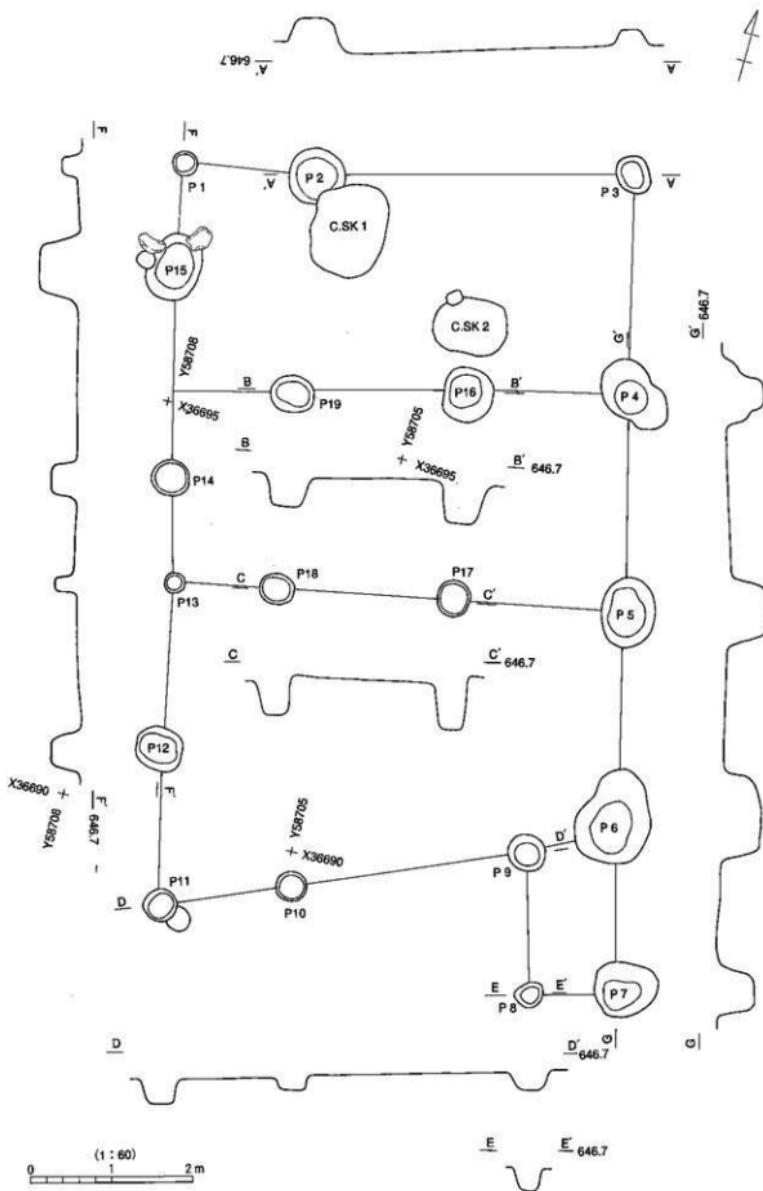
第22図 B地区下層ST 1



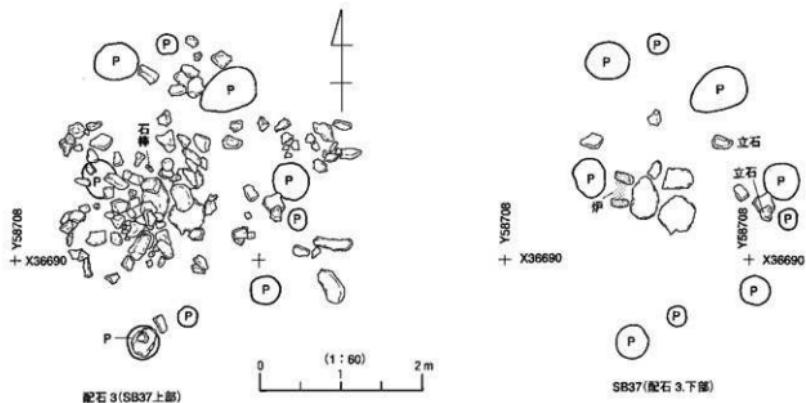
第23図 B地区下層ST 2



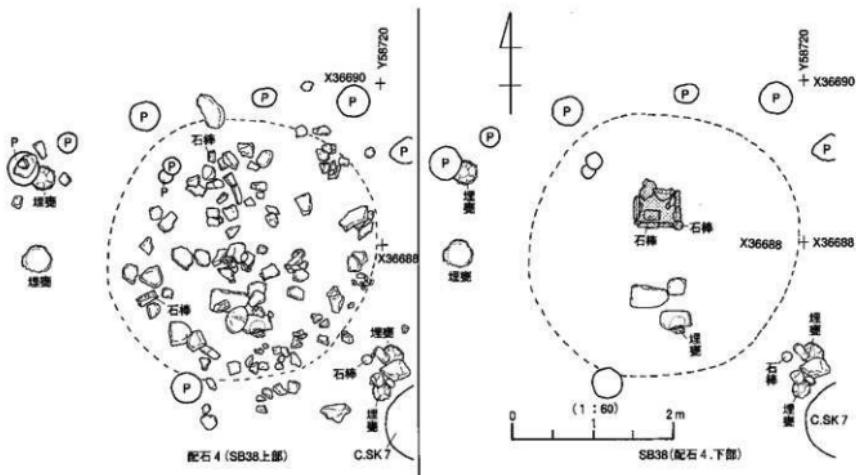
第24図 C地区全体図



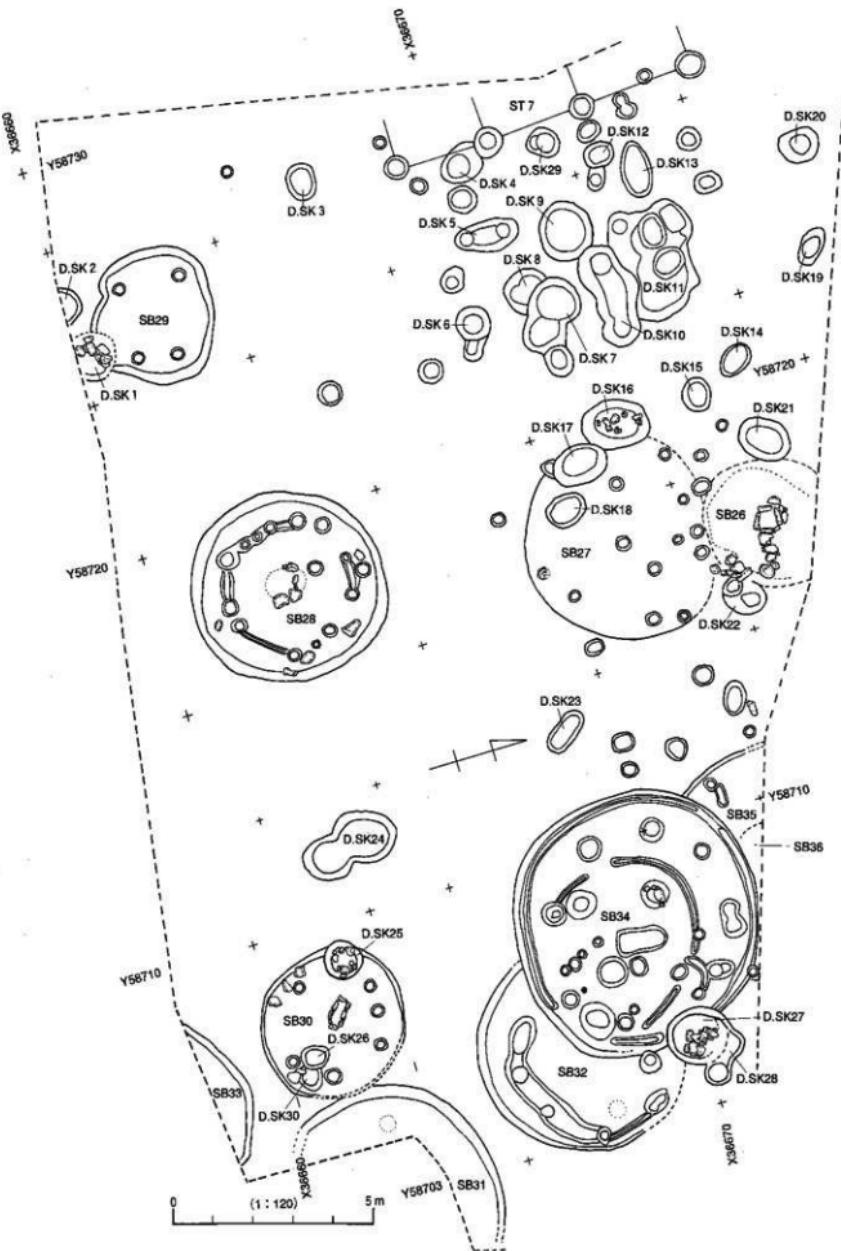
第25図 C地区ST 3



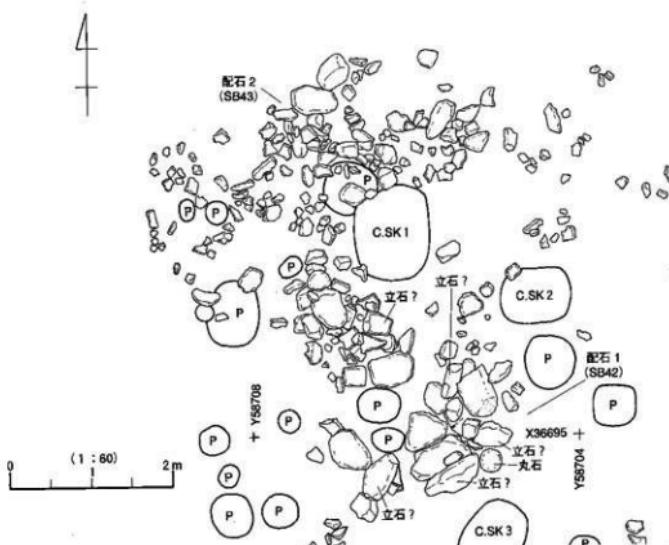
第26図 C地区配石3,SB37



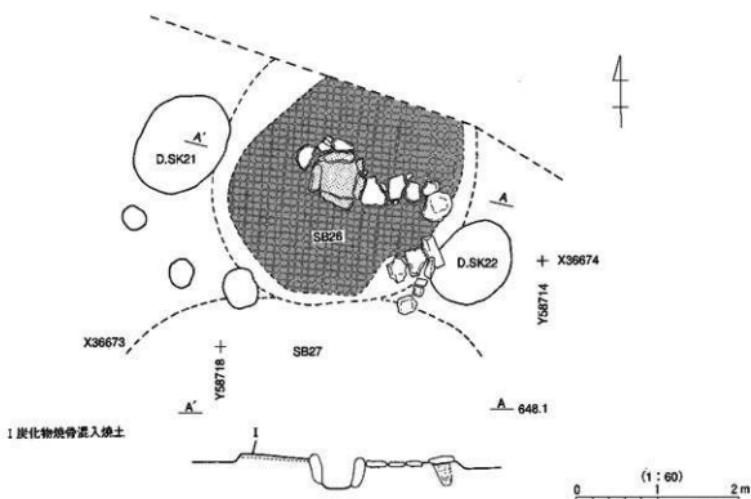
第27図 C地区配石4,SB38



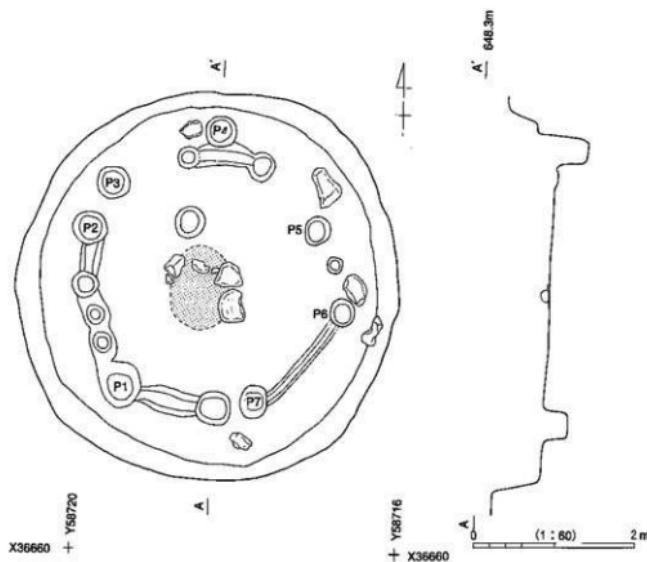
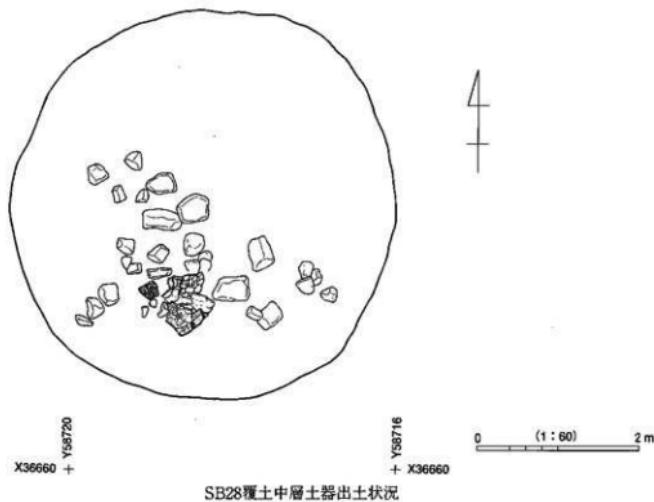
第28図 D地区全体図



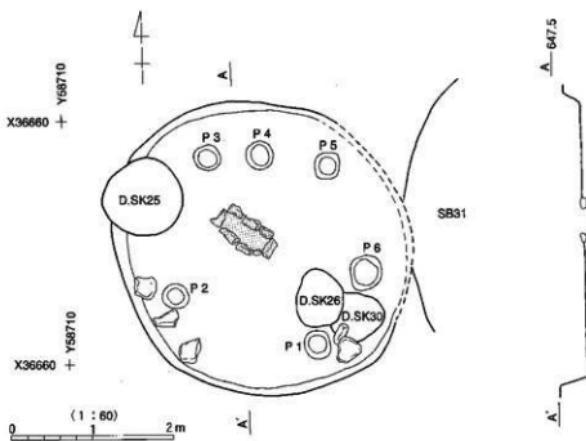
第29図 C地区配石1 (SB42), 配石2 (SB43)



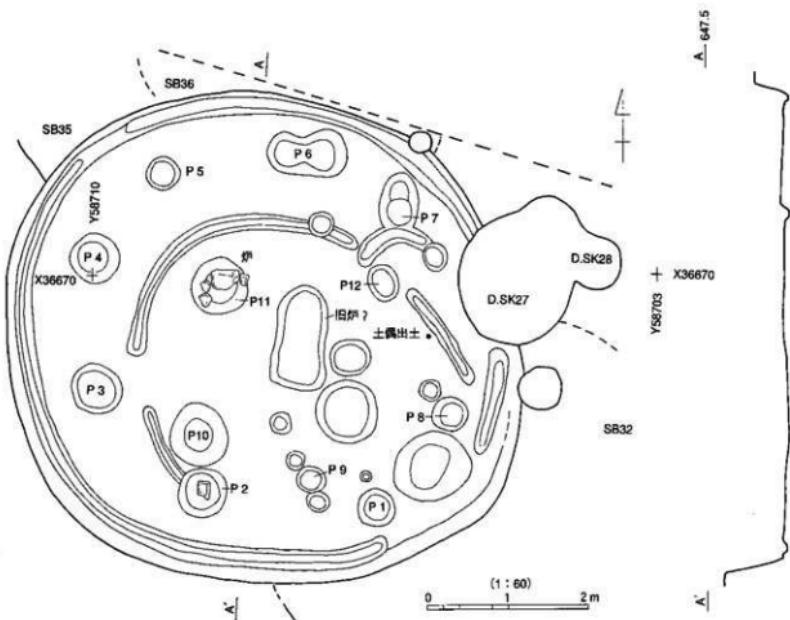
第30図 D地区SB26



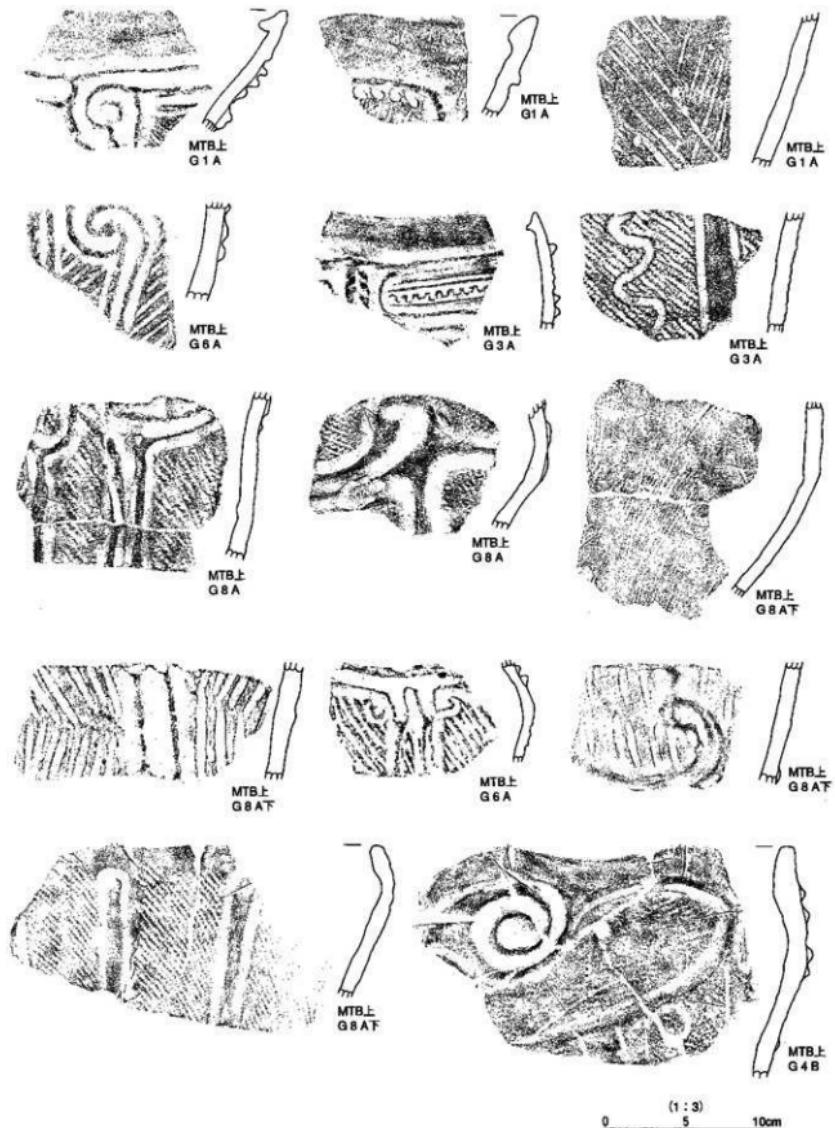
第31図 D地区SB28



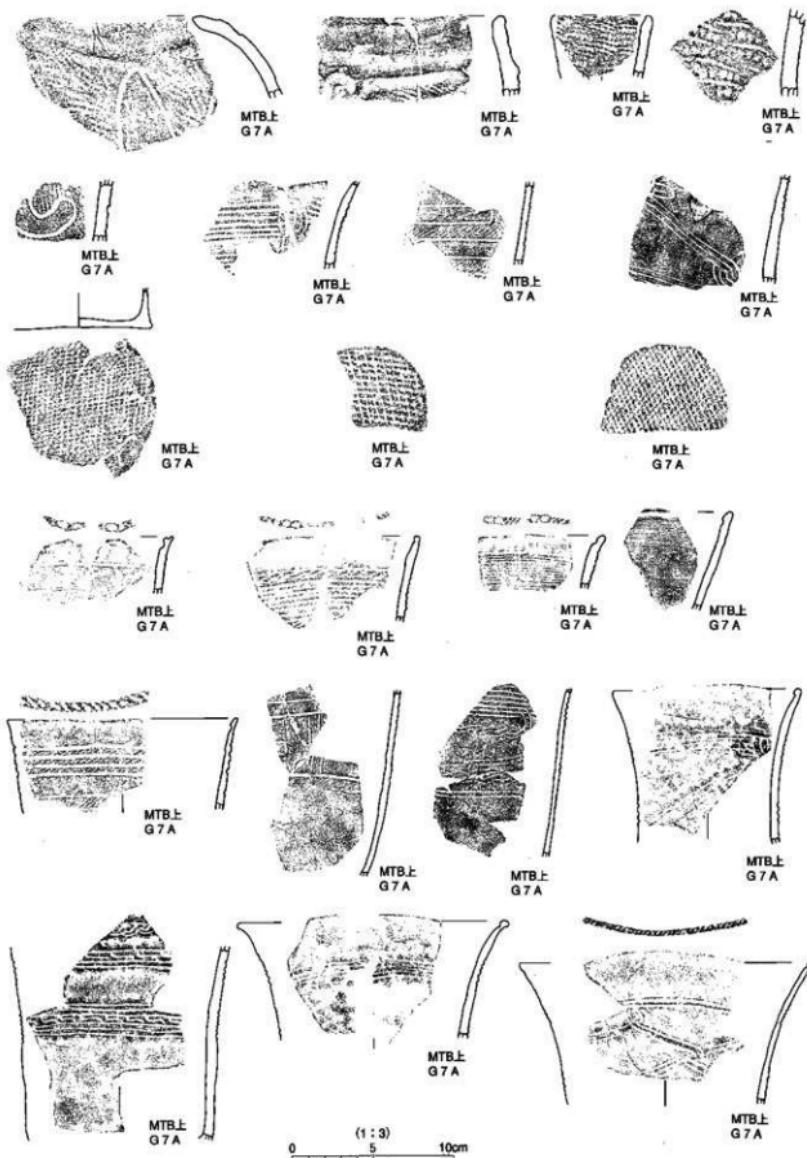
第32図 D地区SB30



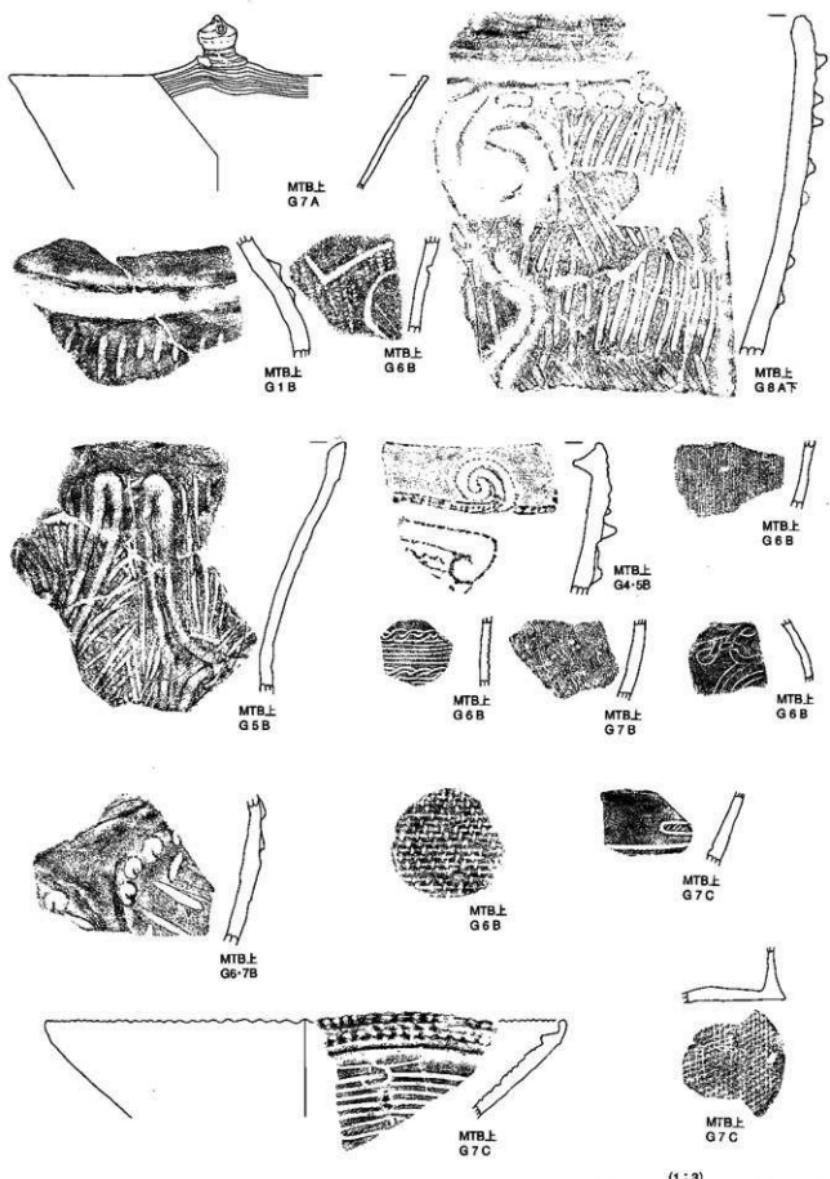
第33図 D地区SB34



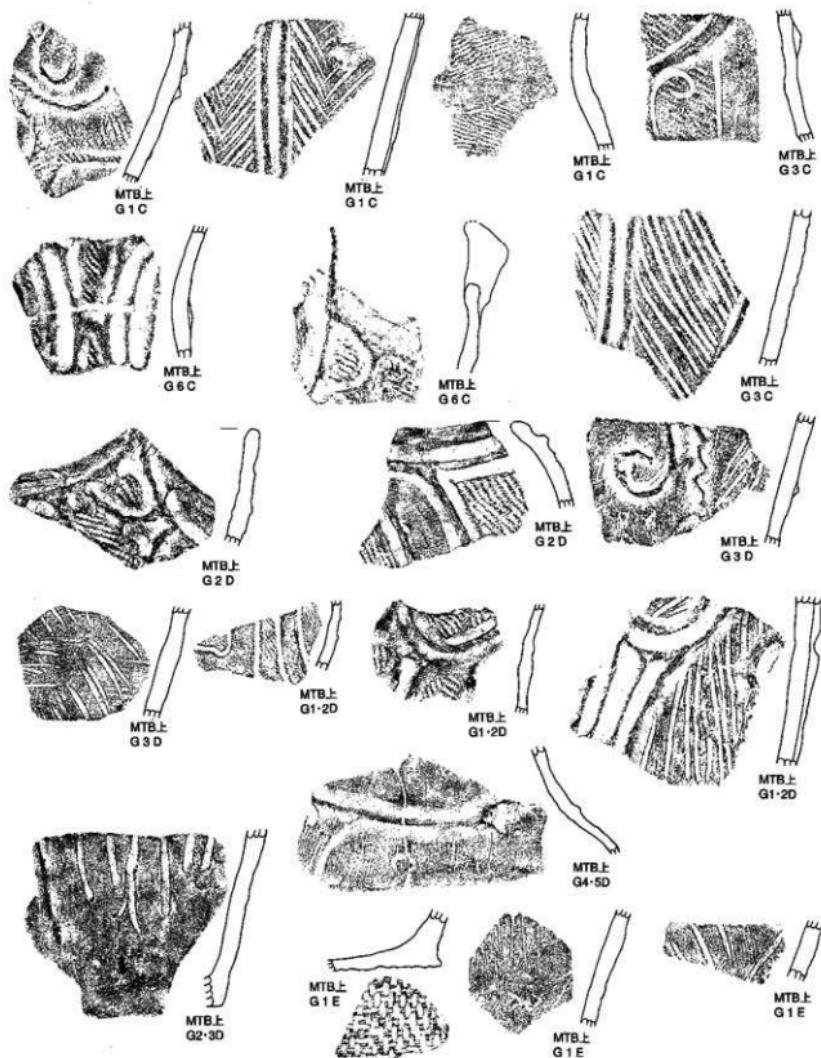
第34図 B地区上層グリット出土土器（1）



第35図 B地区上層グリット出土土器（2）

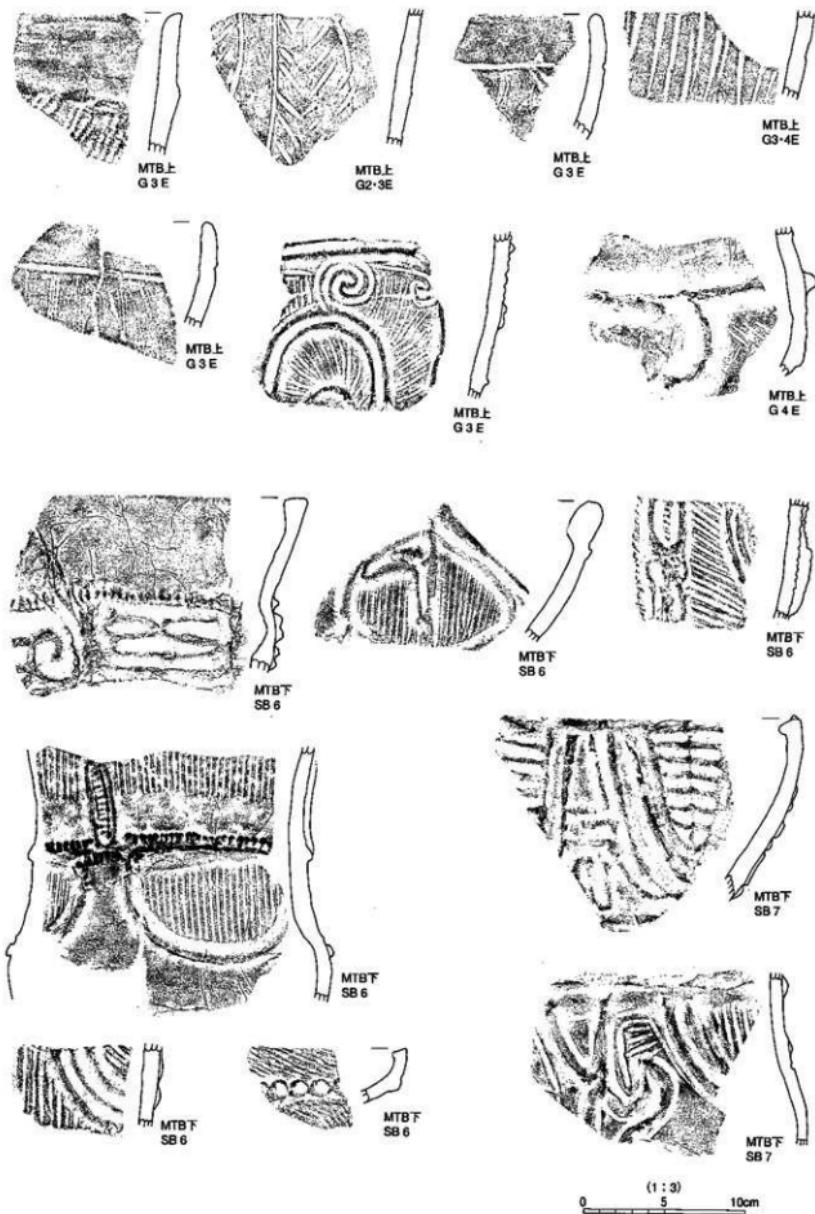


第36図 B地区上層グリット出土土器（3）

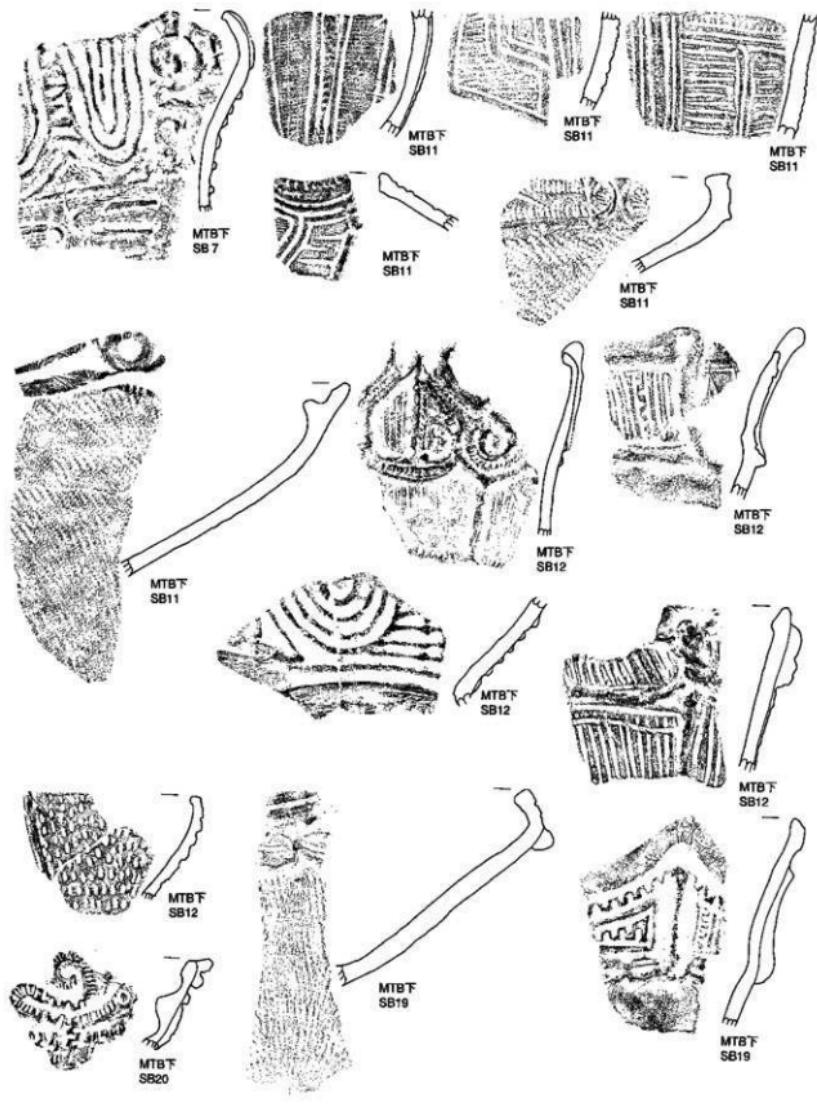


(1 : 3)  
0 5 10cm

第37図 B地区上層グリット出土土器 (4)

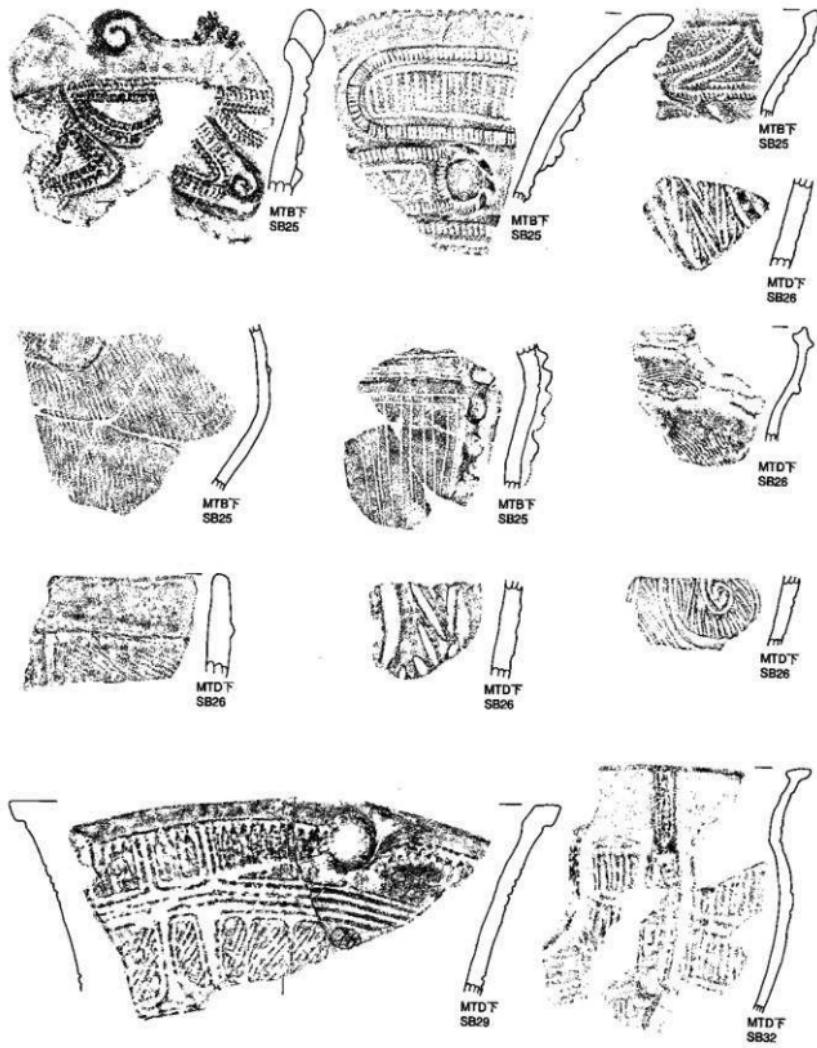


第38図 B地区上層グリット・B地区下層住居址出土土器（5）



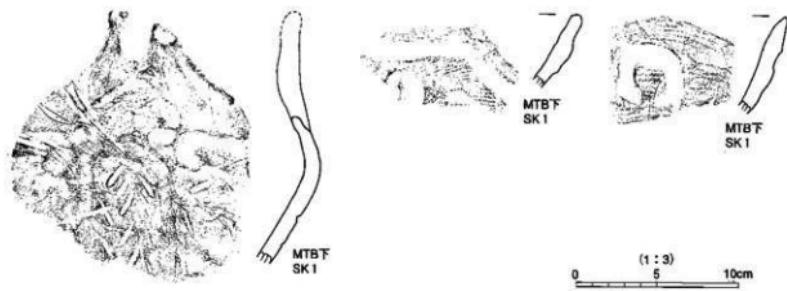
(1 : 3)  
0 5 10cm

第39図 B地区下層住居址出土土器（6）

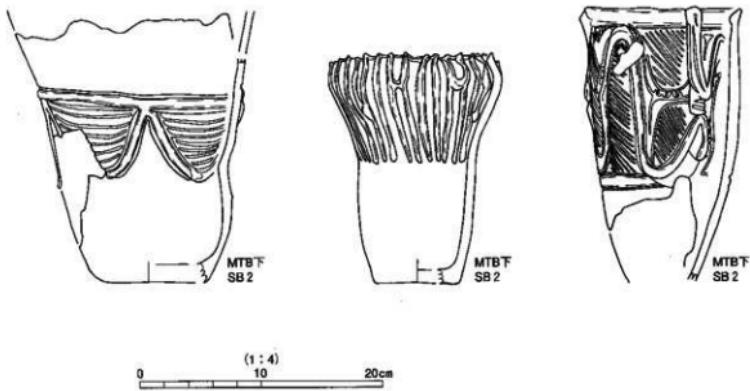
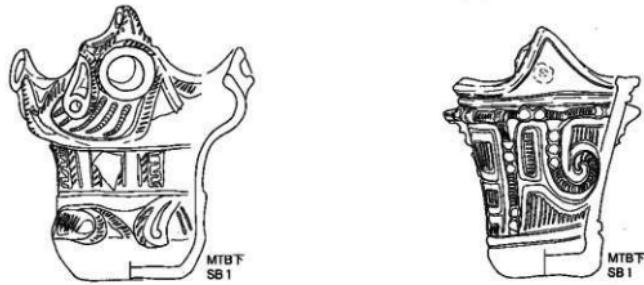


(1 : 3)  
0 5 10cm

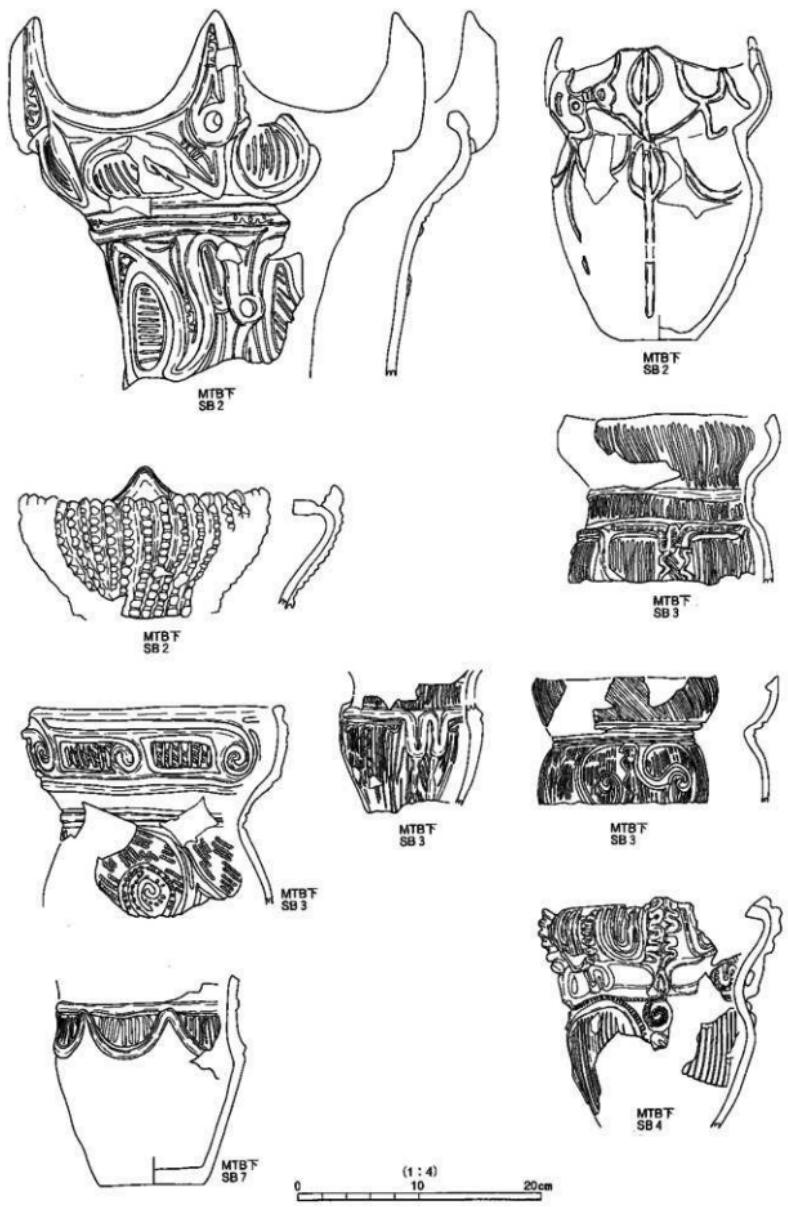
第40図 B地区下層・D地区住居址出土土器(7)



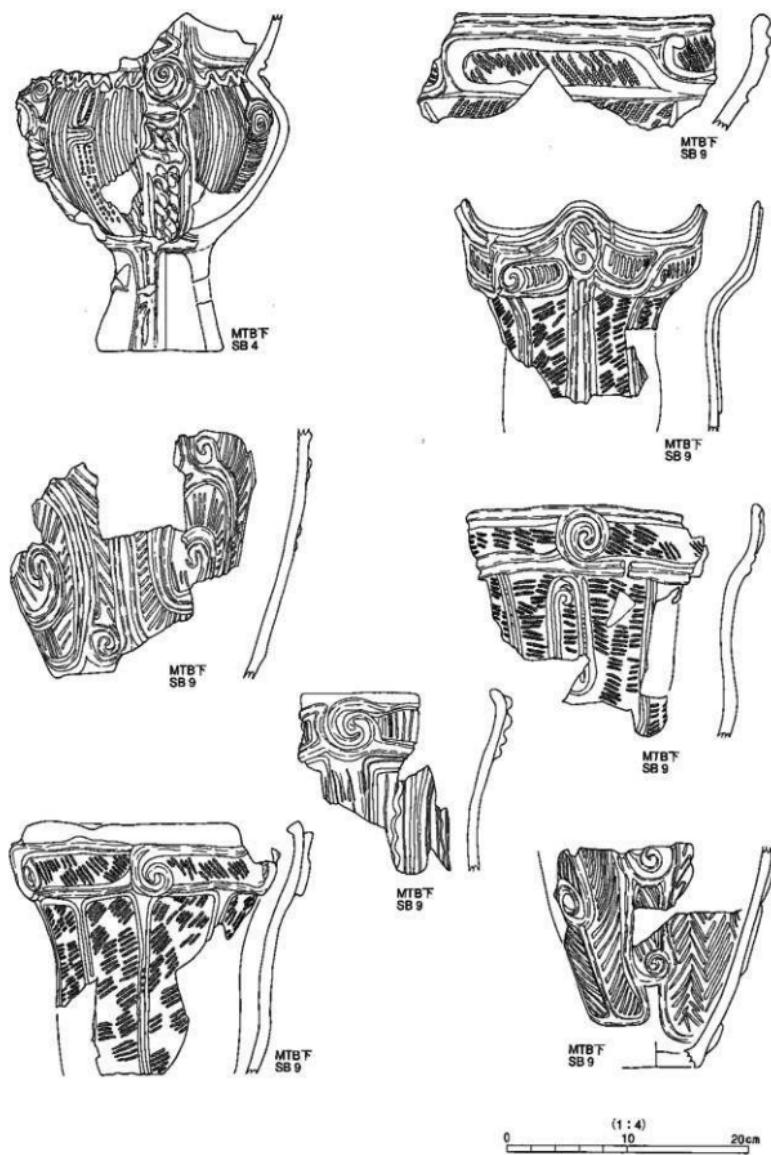
第41图 B地区下层SK 1出土土器 (8)



第42图 B地区下层住居址出土土器 (9)



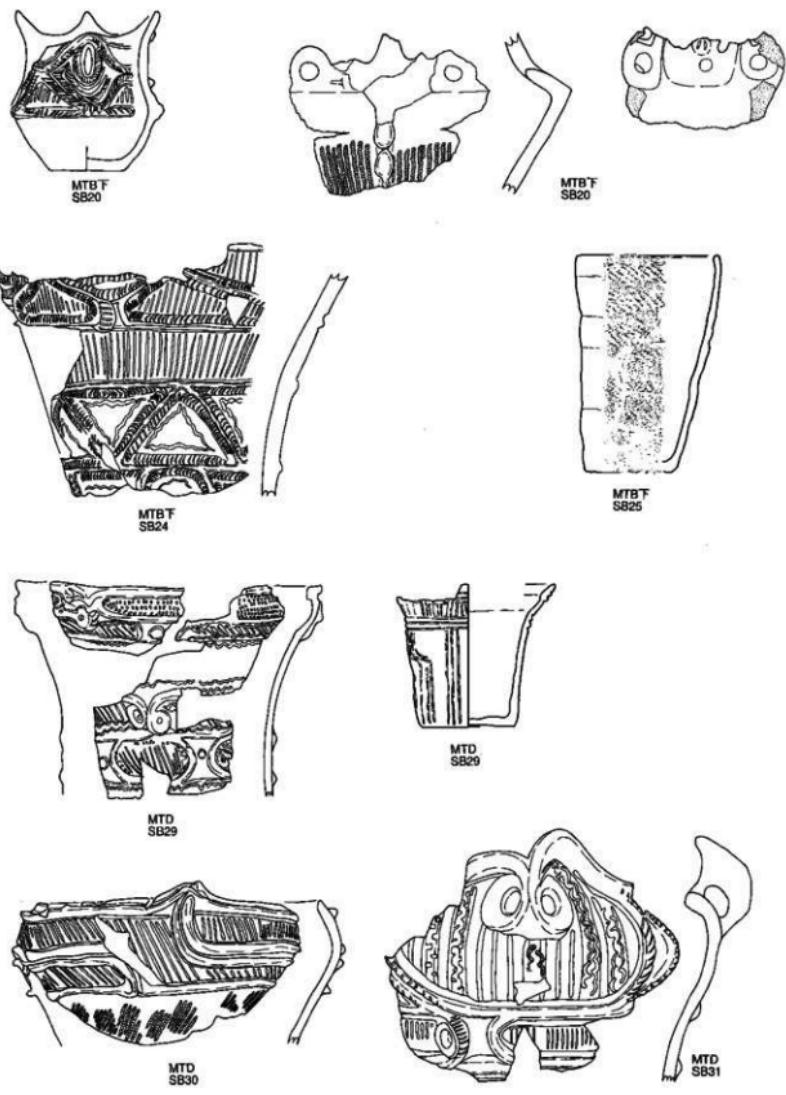
第43図 B地区下層住居址出土土器 (10)



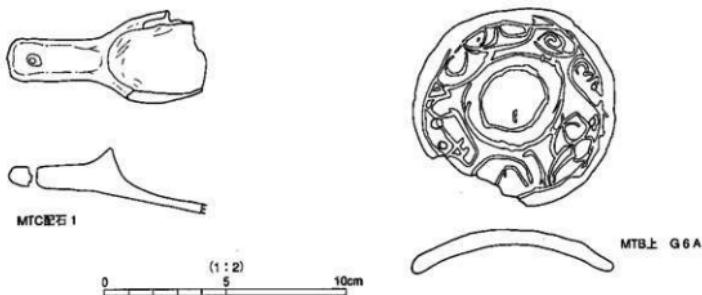
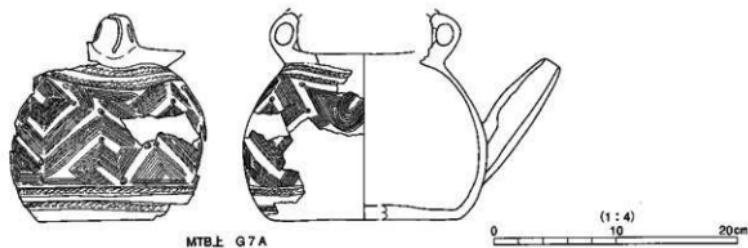
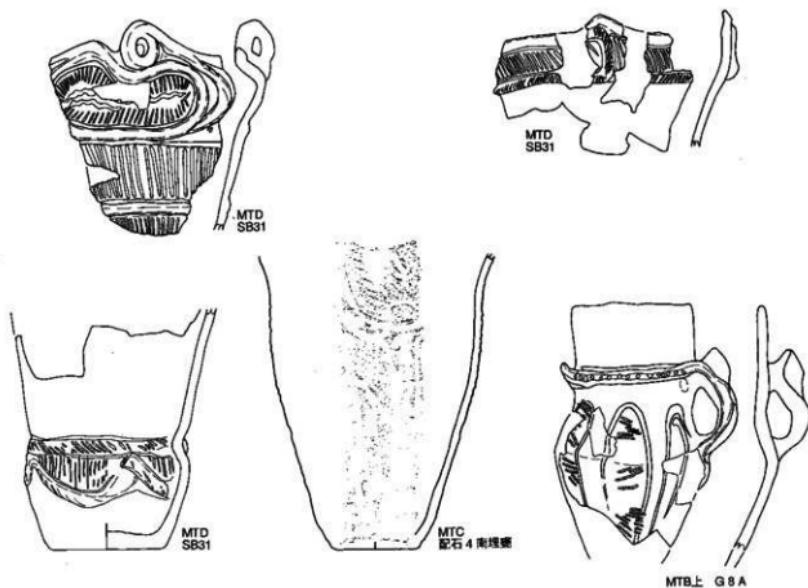
第44図 B地区下層住居址出土土器 (11)



第45図 B地区下層住居址出土土器 (12)



第46図 B地区下層・D地区住居址出土土器 (13)



第47図 D地区・C地区住居址等、B地区上層グリット出土土器 (14)



第48図 D地区・C地区住居址等出土土器 (15)



3. MTB上G 6 B



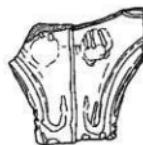
1. MTB上G 8 A



7. MTB上G 8 17



2. MTB上G 4 B



4. MTB上G 3 D



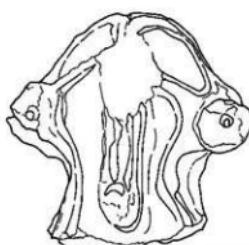
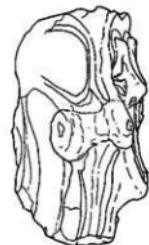
9. MTDSB30



5. MTB上G 3 E



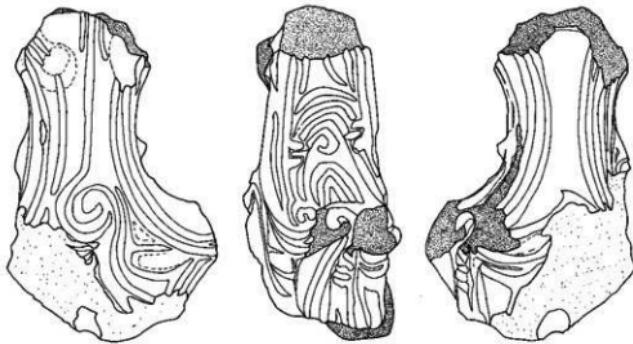
6. MTB上G 1 B



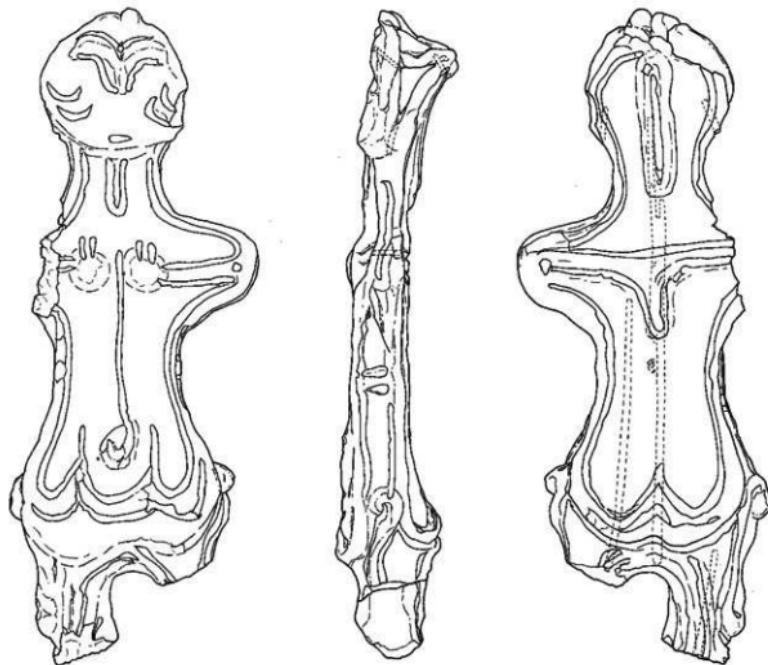
10. MTD検出

0 (1 : 2) 5 cm

第49図 出土土偶 (1)



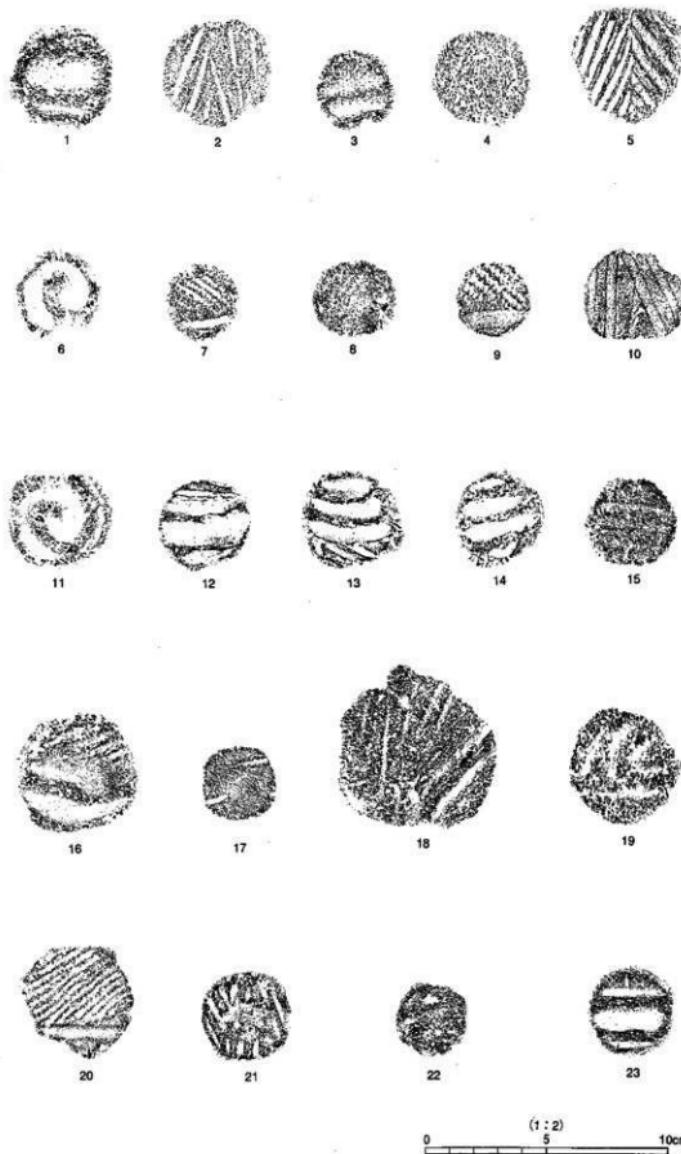
8. MTBFSB19



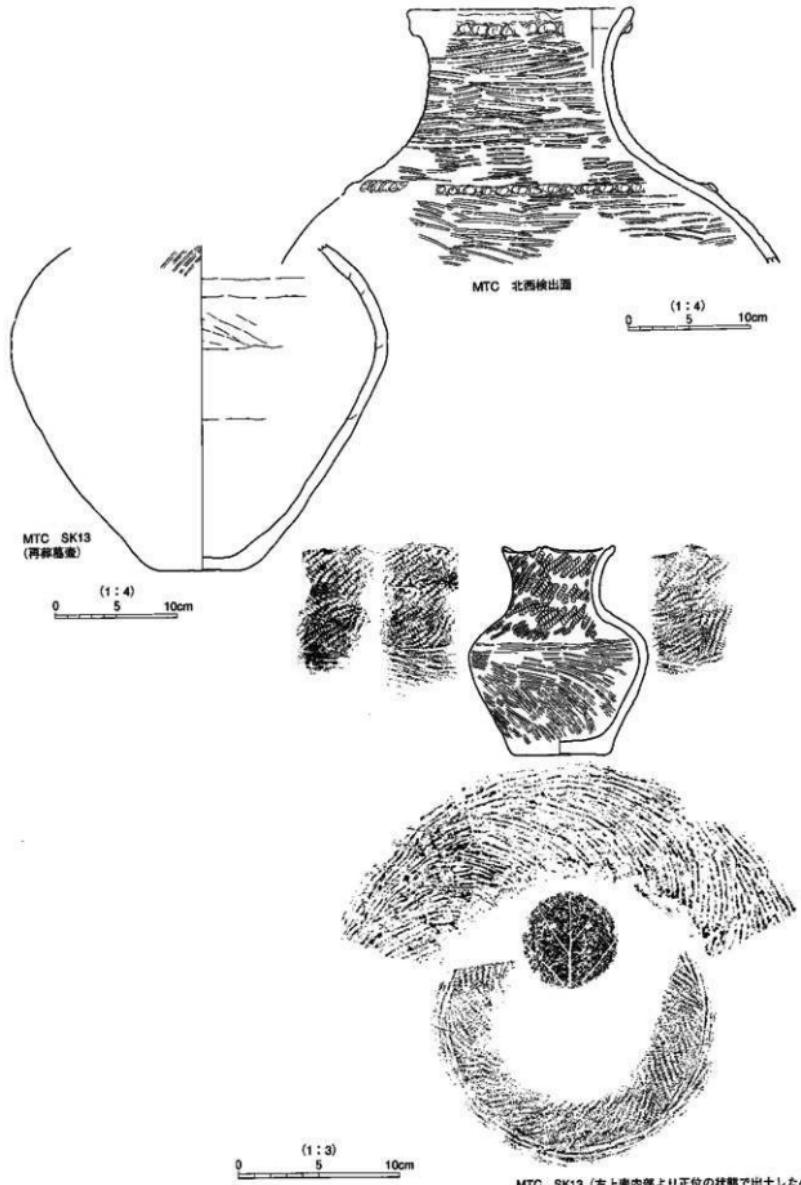
11. MTDSB34

(1 : 2)  
0 5 10cm

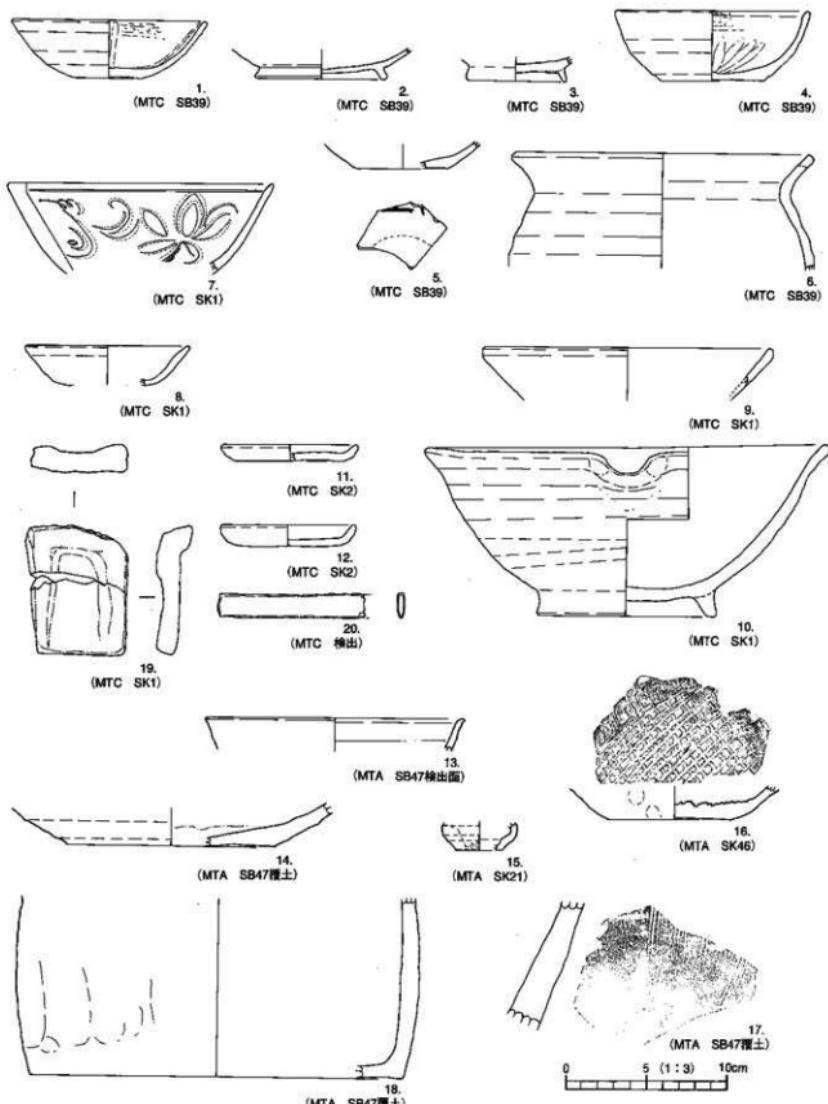
第50図 出土土偶（2）



第51図 出土土製円盤



第52図 C地区出土弥生土器



第53図 平安・鎌倉・戦国時代遺構出土遺物



第54図 A地区SB47床面出土釘

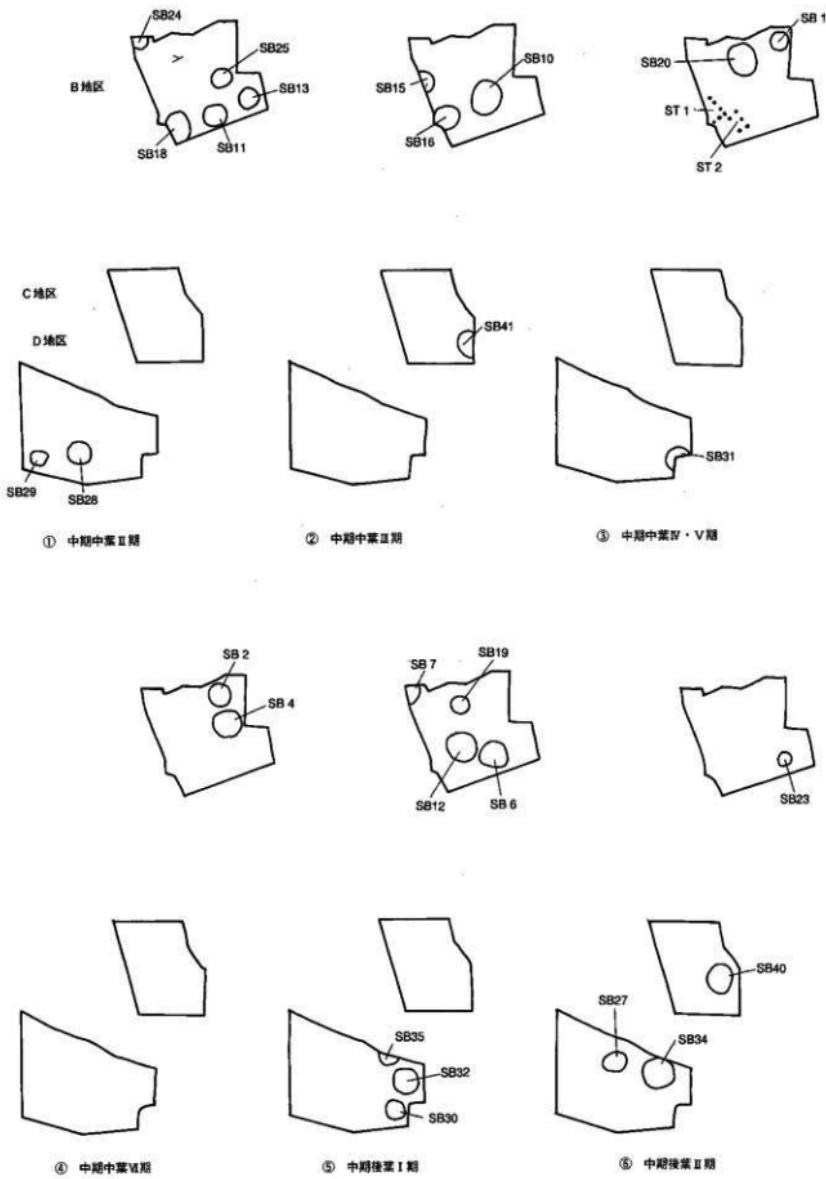
## 第4章 総 括

### 1. 縄文時代集落の変遷

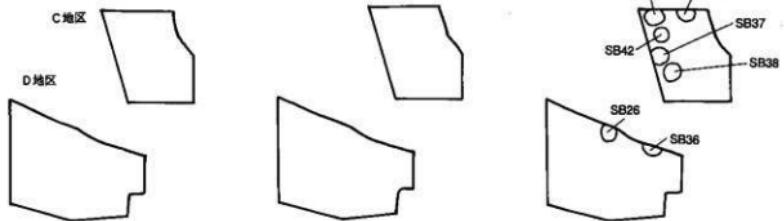
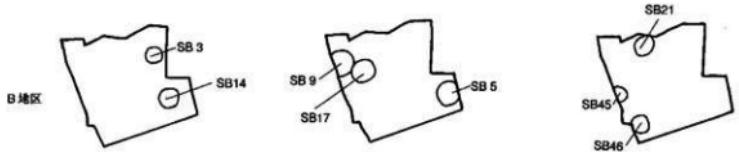
他谷遺跡において発見された縄文時代の遺構は、中期と後期のものである。該当する地区は、A地区を除くB・C・D地区と限られた地区であり、調査区がちょうど地形に沿って弧状に設定されたため、この集落（特に中期）がB～D地区のある台地上に、環状または馬蹄形に展開していくだろうことが想定された。また今回調査された縄文時代の住居址は45軒あることから、おそらく100軒以上の中～後期の集落であったと推定される。そして縄文時代中期においては台地上一面には住居域と配石群が展開し、後期（加曾利B式期）においてはB地区を中心に中期に比べると比較的狭い範囲に住居址（一部配石群も含む？）が展開していたものと考えられる。

住居址の主体を占める縄文時代中期の出土土器から住居址の時期は次のように分けられるものと考えられる。（ただし、開田時の削平や擾乱、住居址の重複の多さ、また嚴冬期の調査という過酷な条件、一部調査の不備等もあり、推定の域を脱しないものもある。時期は長野県史での区分。）

- ①中期中業Ⅱ期（新道式期）SB11, 13, 18, 24, 25, 28, 29（7軒）。住居址はB・D地区に展開する。住居址の炉は埋壺炉か地床炉である。SB13には異質な新巻類型の土器が認めだつ。
- ②中期中業Ⅲ期（藤内Ⅰ式期）SB10, 15, 16, 41（4軒）。住居址はB・C地区に展開する。しかし、この時期の住居址と確実に決定できる資料は少なく、重複関係のみで決定しているので不確実な面もある。土器の量もあまり多くない。特にSB10の石圓炉は、形状がどちらかといえば中期後半の⑥の形であり、その時期の住居跡である可能性もある。住居址の炉は小型の石圓炉である。
- ③中期中業Ⅳ・V期（藤内Ⅱ～井戸尻Ⅰ式期）SB1, 20, 31（3軒）。ST1, 2（2棟）。住居址はB・D地区に展開する。また建物址の時期決定は、住居址との重複関係と、柱穴内より焼町土器の土器が出土していることから決定をした。住居址の炉は埋壺炉か石圓炉である。
- ④中期中業VI期（井戸尻Ⅲ式期）SB2, 4（2軒）。B地区のみに展開する。SB2, 4は近接していることから、同時期ではあるが同時に存在したとは思えない。住居址の炉は石圓炉である。
- ⑤中期後業I期（曾利Ⅰ式期／唐草文系土器Ⅰ段階）SB6, 7, 12, 19, 30, 32, 35（7軒）。住居址はB・D地区に展開する。住居址の炉は長方形石圓炉が多いのが特徴的である。これは、北陸（新潟方面）の影響であろうか。SB12については、この中でも石圓炉の形が方形に近くなってきており、次のSB40と近似していることから新しい様相とも考えられる。
- ⑥中期後業Ⅱ期（曾利Ⅱ式期／唐草文系土器Ⅱ段階）SB23, 27, 34, 40（4軒）。住居址はB・C・D地区に展開する。住居址の炉はやや長方形の石圓炉である。
- ⑦中期後業Ⅲ期（曾利Ⅲ式期／唐草文系土器Ⅲ段階）SB3, 14, (2軒)。住居址はB地区のみに展開する。次時期の住居址等の重複関係等から分けた。住居址の炉は方形の石圓炉で掘り込みが浅く⑥に近い。
- ⑧中期後業Ⅳ期（曾利Ⅳ式期／唐草文系土器Ⅳ段階）SB5, 9, 17（3軒）。住居址はB地区のみに展開する。前時期の住居址の重複関係から分けたが、土器の様相等はほぼ同じである。住居址の炉の形態は方形で大きな石を立てて使用する深い石圓炉となる。尚、SB9, 17は一部接しており建替えの可能性がある。
- ⑨中期後業Ⅴ期（曾利Ⅴ式期／唐草文系土器Ⅴ段階）SB21, 26, 36, 37, 38, 42, 43, 44, 45, 46（10軒）。住居址はB・C・D地区に展開する。部分的な敷石の見られる住居址が多くなる。住居址の炉は前時期と同じ形態である。SB38は石棒が炉の脇にある特徴的な住居である。またSB42, 43, 46は、石の配置から住居址としたが、住居址ではなく別の遺構の可能性もある。



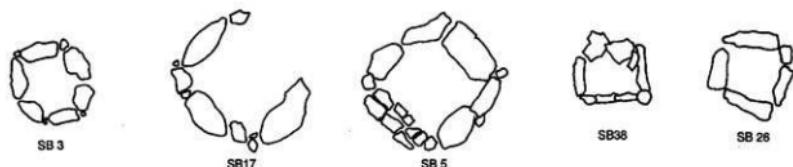
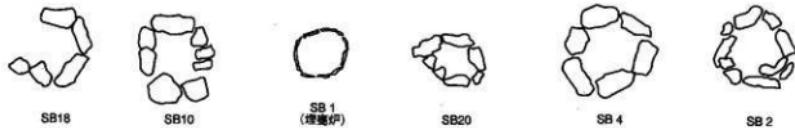
第55図 他谷遺跡縄文集落の構成とその変遷（1）



⑦ 中期後葉Ⅱ期(新)

⑧ 中期後葉Ⅲ期

⑨ 中期後葉Ⅳ期



第56図 他谷遺跡縄文集落の構成とその変遷（2）

第2表 出土石器（主なものを列挙）

## 1 石 鋸（22点出土中 22点計測）

番	写真番号	注記	分類	長さ <sup>ア</sup>	幅 <sup>ビ</sup>	厚さ <sup>シ</sup>	重さ <sup>エ</sup>	石質	欠損状況	備考
1	1	MTB 下 SB5	凹基有茎	1.46	1.03	0.32	0.23	黒曜石	ほぼ完形	
2	2	MTB 下 SB6	平茎?無茎	2.75	1.48	0.34	1.27	赤色チャート	完形	
3	3	MTB 下 SB19	凹基無茎	2.95	1.66	0.50	1.72	チャート	完形	
4	4	MTB 下 SB19	凹基無茎	2.60	1.59	0.48	1.75	チャート	先端欠	
5	5	MTB 上 G1-2A	凹基無茎	1.89	1.42	0.26	0.57	チャート	完形	
6	6	MTB 上 G5A	凹基有茎	1.63	1.29	0.42	0.69	黒曜石	先端欠	
7	7	MTB 上 G6A	凹基無茎	3.05	1.54	0.40	1.38	チャート	完形	
8	8	MTB 上 G8A	凹基無茎	2.19	1.54	0.57	1.22	黒曜石	片脚端欠	
9	9	MTB 上 G8A	凹基無茎	2.23	2.04	0.26	0.63	チャート	完形	
10	10	MTB 上 G6B	凹基無茎	2.47	1.46	0.40	1.36	千枚岩	片脚端欠	
11	11	MTB 上 G1-2C	凹基無茎	2.60	1.36	0.20	0.60	黒曜石	完形	
12	12	MTB 上 G2D	凹基無茎	2.18	1.56	0.35	1.14	赤色チャート	先端欠	円脚?
13	13	MTB 上 G1E	凹基無茎	2.86	1.50	0.38	1.41	黒曜石	ほぼ完形	
14	14	MTB 上 G3E	平茎?無茎	1.54	1.20	0.27	0.43	千枚岩	ほぼ完形	
15	15	MTB 上 G6E	凹基無茎	2.96	2.25	0.38	1.37	チャート	ほぼ完形	
16	16	MTB 上配石下①	凹基有茎	2.01	1.33	0.29	0.43	黒曜石	ほぼ完形	
17	17	MTB 上検出		2.43	1.88	0.42	1.15	黒曜石	下半1/2欠	
18	18	MTDSB29	凹基無茎	2.30	1.64	0.35	0.78	黒曜石	完形	
19	19	MTC SB37 配石3	凹基無茎	1.85	1.07	0.28	0.42	黒曜石	片脚欠	
20	20	MTC SB37 配石3	凹基無茎	3.37	2.54	4.06	2.45	粘板岩	完形	
21	21	MTC 東検出	凹基無茎	2.54	1.74	0.43	1.15	黒曜石	完形	
22	22	MTA SB47 地下式 堅穴状遺構覆土	凹基無茎					黒曜石	完形	飛行機?

## 2 石 鋸（10点出土中 10点計測）

番	写真番号	注記	分類	長さ <sup>ア</sup>	幅 <sup>ビ</sup>	厚さ <sup>シ</sup>	重さ <sup>エ</sup>	石質	欠損状況	備考
1	1	MTB 下 SB5	横形円刃	5.79	3.83	1.08	19.06	千枚岩	刃部欠	
2	2	MTB 下 SB6	横形円刃	3.26	4.45	0.93	11.73	赤色チャート	未製品	
3	3	MTB 下 SB13	横形円刃	5.18	5.99	0.94	29.34	硬砂岩	ほぼ完形	
4	4	MTB 下 SB13	横形円刃	5.66	7.99	1.22	45.98	砂岩	ほぼ完形	
5	5	MTB 下 SB13	横形円刃	5.17	7.19	1.02	34.33	硬砂岩	刃部端欠	
6	6	MTB 下 SB19	横形円刃	4.71	6.94	0.72	25.86	砂岩	ほぼ完形	
7	7	MTB 下 SB19	横形円刃	5.50	8.58	0.95	30.89	凝灰岩	ほぼ完形	
8	8	MTB 下 SB19	横形直刃	3.63	5.08	0.68	7.80	千枚岩	ほぼ完形	
9	9	MTB 上 G6C	横形円刃	3.68	4.07	0.70	11.03	石英	ほぼ完形	
10	10	MTD SB28	縦形	7.54	5.02	1.15	42.71	チャート質粘板岩	刃部端欠	

## 3 石 鋸（3点出土中 3点計測）

番	写真番号	注記	分類	長さ <sup>ア</sup>	幅 <sup>ビ</sup>	厚さ <sup>シ</sup>	重さ <sup>エ</sup>	石質	欠損状況	備考
1	1	MTB 下 SB19		3.04	1.94	1.03	4.42	チャート	つまみ部欠	
2	2	MTB 上 G6F		2.21	0.75	0.31	0.74	チャート	つまみ部欠	
3	3	MTC SB40		3.19	(2.08)	0.42	1.43	チャート	先端およびつまみ部欠	

## 4 打製石斧（303点出土中 79点計測）

番	写真番号	注記	分類	長さ <sup>ア</sup>	幅 <sup>ビ</sup>	厚さ <sup>シ</sup>	重さ <sup>エ</sup>	石質	欠損状況	備考
1		MTB 下 SB2	短冊	12.80	3.58	1.23	78.91	千枚岩	ほぼ完形	
2		MTB 下 SB2	盤	10.17	5.47	2.22	136.05	千枚岩	1/3下部欠	
3		MTB 下 SB2	盤	10.17	5.29	1.87	98.66	粘板岩	ほぼ完形	

4		MTB F SB4	搬	13.90	6.67	1.66	185.75	千枚岩	ほぼ完形
5		MTB F SB5	短冊	17.50	4.84	2.51	251.24	粘板岩	ほぼ完形
6		MTB F SB5	搬	13.50	7.45	1.34	184.27	砂質凝灰岩	上部端欠
7		MTB F SB6	搬	12.00	6.60	1.32	127.93	雑粒砂岩	上部端欠
8		MTB F SB6	短冊	11.01	4.75	1.50	105.00	凝灰岩	ほぼ完形
9		MTB F SB9	搬	9.36	4.36	1.34	62.78	粘板岩	先端使用痕有 ほぼ完形
10		MTB F SB9	搬	11.40	5.29	1.40	97.19	千枚岩	ほぼ完形
11		MTB F SB9	短冊	13.80	5.44	1.63	156.30	粘板岩	ほぼ完形
12		MTB F SB9	搬	9.76	5.67	1.34	79.79	硬砂岩	下部わずか欠
13		MTB F SB9	搬	11.00	4.74	1.66	137.94	粘板岩	下部わずか欠
14		MTB F SB11	短冊	12.05	5.16	2.50	208.46	変成岩	下部わずか欠
15		MTB F SB12	搬	15.85	6.32	1.75	228.17	粘板岩	下部わずか欠
16		MTB F SB13	短冊	8.63	4.42	1.19	69.04	千枚岩	ほぼ完形
17		MTB F SB16	搬	16.67	5.81	2.52	247.93	粘板岩	ほぼ完形
18		MTB F SB16	短冊	12.62	4.50	1.75	137.56	粘板岩	ほぼ完形
19		MTB F SB11	短冊	10.84	4.80	1.92	129.11	砂質粘板岩	ほぼ完形
20		MTB F SB11	搬?	14.38	7.97	1.36	229.99	千枚岩	下部わずか欠
21		MTB F SB19	搬	10.88	5.25	1.57	129.56	粘板岩	使用痕有 完形
22		MTD SB26	搬	16.40	5.15	1.98	163.29	粘板岩	上下わずか欠
23		MTD SB26	短冊	9.64	4.84	1.21	72.70	粘板岩	上下わずか欠
24		MTD SB28	搬	11.70	5.27	1.28	106.57	粘板岩	ほぼ完形
25		MTD SB29	搬	11.00	4.92	1.62	107.66	千枚岩	使用痕有 先端欠
26		MTD SB33	搬	10.70	4.97	10.05	63.81	千枚岩	上下部わずか欠
27		MTD SB34	短冊	13.10	4.84	1.25	108.51	粘板岩	ほぼ完形
28		MTD SB34	搬	11.20	5.70	1.58	97.26	粘板岩	下部欠
29		MTD SB34	搬	10.18	5.01	1.53	96.39	粘板岩	使用痕有
30	1	MTD SB35	短冊	13.20	4.72	0.78	73.54	凝灰岩	先端わずか欠
31	2	MTC SB42	短冊	11.05	4.82	1.09	79.81	千枚岩	下部欠
32	3	MTC SB42 <sup>(配石①)</sup>	短冊	16.42	4.65	1.86	214.05	粘板岩	先部剥離
33	4	MTC SB42	搬	13.54	5.26	1.61	128.98	千枚岩	先端使用痕有
34	5	MTC SB42	搬	15.35	5.36	1.18	113.19	千枚岩	ほぼ完形
35	6	MTC SB43 <sup>(配石②)</sup>	搬	12.05	4.50	1.37	101.43	千枚岩	使用痕有
36		MTC SB43 <sup>(配石②)</sup>	搬	10.82	4.35	1.77	99.63	粘板岩	使用痕有 下部欠
37		MTC SB43 <sup>(配石②)</sup>	搬	9.30	5.25	1.24	88.82	千枚岩	使用痕有 下部欠
38		MTC SB37 <sup>(配石③)</sup>	搬	10.75	4.34	2.11	112.71	千枚岩	使用痕有 ほぼ完形
39		MTC SB38 <sup>(配石④)</sup>	搬	11.60	4.79	1.30	96.18	千枚岩	使用痕有 ほぼ完形
40		MTC SB38 <sup>(配石④)</sup>	搬	10.74	6.00	2.02	172.73	千枚岩	使用痕有 下部欠
41		MTC SB38 <sup>(配石④)</sup>	搬	10.20	4.26	1.40	86.85	千枚岩	使用痕有 下部欠
42	13	MTB 上 配石下	搬	14.05	5.01	1.33	102.20	千枚岩	ほぼ完形
43	14	MTB 上 配石下	搬	13.45	5.87	1.48	99.43	千枚岩	上下部端欠
44	15	MTB 上 配石下	搬	11.01	5.00	1.14	86.75	千枚岩	使用痕有 下部端欠
45		MTB 上 配石下	搬	21.10	6.84	1.24	276.16	変成岩	側縫わずか欠
46		MTB 上 配石下	搬	13.95	5.08	1.43	103.48	砂岩	ほぼ完形
47		MTB 上 G1A	搬	11.75	5.15	1.37	115.19	砂質粘板岩	ほぼ完形
48		MTB 上 G1A	短冊	8.65	4.13	1.20	68.72	千枚岩	上下部わずか欠
49		MTB 上 G6A	短冊	6.23	3.79	1.11	64.90	千枚岩	使用痕有 上端わずか欠

50	MTB 上 G8A	縦	10.65	4.93	1.67	100.43	粘板岩	ほぼ完形
51	MTB 上 G8A	短冊	9.50	4.31	1.23	77.21	千枚岩	ほぼ完形
52	MTB 上 G1B	縦	15.40	6.25	2.32	268.91	千枚岩	使用痕有 ほぼ完形
53	MTB 上 G5B	縦	11.20	4.95	1.36	119.45	泥質板岩	使用痕有 ほぼ完形
54	MTB 上 G8B	短冊	14.45	5.16	2.38	257.27	粘板岩	使用痕有 ほぼ光形
55	MTB 上 G8B	縦	10.38	5.05	1.63	112.38	砂質粘板岩	使用痕有 下部剥離
56	MTB 上 G8B	短冊	11.34	4.69	1.69	127.13	粘板岩	使用痕有 ほぼ完形
57	MTB 上 G2C	縦	10.55	5.04	1.72	104.94	粘板岩	ほぼ完形
58	MTB 上 G4C	縦	12.80	5.33	1.82	130.38	粘板岩	ほぼ完形
59	MTB 上 G5C	短冊	12.18	4.03	1.29	88.00	粘板岩	使用痕有 下部端欠
60	MTB 上 G1D	縦	12.45	5.35	1.19	96.40	砂質粘板岩	使用痕有 上部一部剥離
61	MTB 上 G3D	縦	12.20	4.95	1.75	136.77	砂質粘板岩	使用痕有 ほぼ完形
62	MTB 上 G3D	縦	8.74	4.60	0.97	51.34	千枚岩	使用痕有 ほぼ完形
63	MTB 上 G3D	短冊	9.64	4.80	1.56	114.95	粘板岩	使用痕有 ほぼ完形
64	MTB 上 G1E	縦	12.55	5.72	2.17	234.24	砂質粘板岩	使用痕有 先端わずか欠
65 7	MTB 上 G1F	縦	11.30	4.48	1.10	67.40	粘板岩	使用痕有 ほぼ光形
66 8	MTB 上 G3E	短冊	14.00	5.01	1.75	184.78	粘板岩	使用痕有 ほぼ完形
67 9	MTB 上 G4E	縦	11.90	4.83	1.70	126.71	粘板岩	使用痕有 ほぼ完形
68 10	MTB 上 G4E	縦	11.45	5.64	1.62	139.24	凝灰岩	ほぼ完形
69 11	MTB 上 G7B	短冊	12.00	3.70	1.82	95.99	硬砂岩	使用痕有 ほぼ完形 被熱
70 12	MTB 上 G7B	縦	10.30	4.33	1.75	96.79	硬砂岩	使用痕有 ほぼ完形 被熱
71	MTB 上 G9B	縦	13.30	4.29	1.81	111.20	粘板岩	使用痕有 ほぼ完形
72	MTB 上 G1F	縦	11.25	5.80	1.64	153.46	変成岩	使用痕有 ほぼ完形
73	MTB 上 G1F	縦	12.50	5.82	1.68	146.80	粘板岩	使用痕有 倒線わずか欠
74	MTB 下 SB15	縦	19.05	10.78	1.91	383.86	千枚岩	下端わずか欠
75	MTD 土坑-8	縦	9.52	4.14	1.10	59.18	千枚岩	上部端欠
76	MTD 上坑-8	縦	15.05	6.45	2.94	297.36	粘板岩	使用痕有 下部わずか欠
77	MTD 土坑-8	分鉗	10.50	4.66	0.69	35.66	粘板岩	上下部端欠
78	MTD 土坑	縦	12.65	4.87	1.65	141.95	粘板岩	ほぼ完形
79	MTB 上 G1C	縦	24.50	9.90	2.22	721.10	圧力変成岩	未製品?

5 スクレイパー、横刃石器等 (927点出土中 41点計測)

番	写真番号	注記	長さ <sup>+</sup>	幅 <sup>±</sup>	厚さ <sup>±</sup>	重さ <sup>±</sup>	石 質	欠損状況 備考
1		MTB 下 SB2	16.70	9.66	1.68	316.20	千枚岩	ほぼ完形
2		MTB 下 SB2	6.81	9.79	1.47	90.12	千枚岩	完形 横刃
3 14		MTB 下 SB2	10.60	4.13	1.16	52.51	千枚岩	完形
4 15		MTB 下 SB2	10.50	3.79	1.43	53.36	千枚岩	完形
5 16		MTB 下 SB2	6.47	3.37	0.92	18.14	千枚岩	ほぼ完形
6 17		MTB 下 SB2	6.45	10.50	1.38	100.01	砂質粘板岩	ほぼ完形 横刃
7		MTB 下 SB2	9.67	5.65	1.40	82.57	砂岩	ほぼ完形
8		MTB 下 SB2	6.41	5.73	1.79	73.44	粘板岩	ほぼ完形
9		MTB 下 SB2	3.42	5.24	0.77	14.04	砂質粘板岩	ほぼ完形 横刃
10		MTB 下 SB2	2.22	3.18	0.70	4.71	墨曜石	ほぼ完形 横刃
11 8		MTB 下 SB3	3.22	9.65	0.86	27.64	千枚岩	ほぼ光形 横刃
12 9		MTB 下 SB3	3.52	3.04	0.67	9.12	珪化板岩	ほぼ完形 横刃
13 10		MTB 下 SB3	5.74	3.28	0.59	12.17	珪化板岩	ほぼ完形 横刃
14 11		MTB 下 SB4	5.76	6.77	1.47	69.08	チャート	ほぼ完形
15 12		MTB 下 SB4	3.30	4.84	0.77	14.16	素色チャート	ほぼ完形 横刃
16 13		MTB 下 SB6	4.55	9.17	0.74	35.15	珪化板岩	ほぼ完形 横刃
17		MTB 下 SB6	3.11	5.93	0.74	11.97	珪化板岩	ほぼ完形 横刃

18		MTB 下 SB6	7.45	9.84	1.45	101.94	細粒砂岩	ほぼ完形 横刃
19		MTB 下 SB6	7.61	4.36	1.58	45.54	珪化凝灰岩	ほぼ完形
20	5	MTB 下 SB7	2.82	7.37	0.60	9.71	珪化凝灰岩	ほぼ完形 横刃
21	4	MTB 下 SB7	5.15	2.77	0.64	1.13	珪化凝灰岩	ほぼ完形
22	3	MTB 下 SB8	7.79	5.00	1.57	49.78	珪化凝灰岩	ほぼ完形
23		MTB 下 SB9	6.34	12.45	1.57	146.67	圧力変成岩	ほぼ完形 横刃
24		MTB 下 SB11	6.86	3.75	1.55	31.50	ホルンフェルス	ほぼ完形
25		MTB 下 SB11	9.27	10.40	1.26	157.00	千枚岩	ほぼ完形 横刃
26		MTB 下 SB11	9.99	11.12	1.56	173.94	千枚岩	ほぼ完形
27		MTB 下 SB11	4.04	6.93	1.05	32.17	千枚岩	ほぼ完形
28		MTB 下 SB12	5.18	6.80	0.85	39.97	千枚岩	ほぼ完形
29		MTB 下 SB12	4.74	4.10	1.47	26.95	千枚岩	ほぼ完形
30		MTB 下 SB17	12.40	5.34	1.48	86.40	千枚岩	ほぼ完形
31		MTB 下 SB17	4.91	10.87	1.05	62.68	千枚岩	ほぼ完形 横刃
32		MTB 下 SB17	7.33	11.85	2.35	178.60	凝灰岩	ほぼ完形
33		MTB 下 SB19	5.41	2.90	0.80	11.42	珪質泥岩	ほぼ完形
34		MTB 上 配石下	8.87	6.68	0.66	61.75	珪質泥岩	側縫わずか欠
35		MTB 上 G7A	4.42	7.05	1.79	46.41	チャート	ほぼ完形 横刃
36	1	MTB 上 G9A	5.43	12.00	1.68	103.48	砂質千枚岩	ほぼ完形
37	2	MTB 上 G9A	4.21	9.35	0.83	33.66	砂質千枚岩	縫部わずか欠
38	6	MTB 上 G10A	6.36	9.68	1.26	71.35	砂質千枚岩	ほぼ完形 横刃
39	7	MTB 上 G7C	11.20	6.66	1.16	74.18	千枚岩	ほぼ完形
40		MTB 上換出	4.34	3.50	0.83	14.06	黒曜石	ほぼ完形
41		MTD SB32	8.50	4.00	0.73	42.86	千枚岩	刃部端欠

6 回石 磐石 塵石 (88点出土中 41点計測)

番	写真番号	注記	長さ <sup>ミ</sup>	幅 <sup>ミ</sup>	厚さ <sup>ミ</sup>	重さ <sup>kg</sup>	石質	面部	欠損状況	備考
1		MTB 下 SB2	10.50	7.62	3.12	321.40	砂岩	2+4	磨石兼刃部有?	
2		MTB 下 SB3	8.34	6.05	3.91	295.29	花崗岩	1	磨石兼	
3		MTB 下 SB4	8.81	8.77	5.13	427.19	安山岩	1?	1/3欠	
4		MTB 下 SB4	10.01	8.98	5.57	703.81	花崗岩		完形 磨石	
5		MTB 下 SB4	10.02	8.08	5.94	779.49	溶結凝灰岩		光形 磨石	
6		MTB 下 SB4	11.04	9.09	5.09	720.93	凝灰岩		完形 磨石	
7		MTB 下 SB5	11.00	9.74	5.16	769.57	砂岩		完形 磨石	
8		MTB 下 SB5	10.08	7.73	5.07	720.94	花崗斑岩	1	磨石兼	
9		MTB 下 SB5	9.87	8.26	4.03	420.05	安山岩	2	磨石兼	
10		MTB 下 SB6	13.70	11.25	6.35	1464.99	花崗斑岩		完形 磨石	
11		MTB 下 SB6	5.97	5.18	3.45	152.17	砂岩		完形 磨石	
12		MTB 下 SB7	8.22	7.64	5.37	498.13	砂岩	2+1	完形	
13		MTB 下 SB8	10.80	9.16	4.50	674.47	砂渺岩		完形 磨石	
14		MTB 下 SB9	8.55	7.93	5.07	432.00	安山岩		完形 磨石	
15		MTB 下 SB12	9.22	7.07	4.07	370.74	溶結凝灰岩	2+2	磨石兼	
16		MTB 下 SB12	10.38	9.40	5.11	634.48	安山岩		完形 磨石	
17		MTB 下 SB12	17.20	17.00	5.13	2247.36	安山岩		完形 磨石	
18	10	MTB 下 SB15	9.78	8.18	5.66	637.81	安山岩	1+1	完形 磨石兼	
19	11	MTB 下 SB17	9.70	8.51	4.83	508.72	安山岩	1+1	完形 磨石兼	
20		MTB 下 SB17	8.96	7.76	5.27	548.54	砂岩	1+2	完形 磨石兼	
21		MTB 下 SB17	11.40	9.25	5.18	829.71	花崗斑岩	1	完形 磨石兼	
22		MTD SB26	10.14	9.08	5.78	717.68	細粒花崗岩		磨石一部欠 被熱	

23		MTD SB28	10.50	7.77	4.05	515.40	花崗岩	2+2	完形
24		MTD SB31	10.70	9.60	5.14	860.39	細粒花崗岩	2	完形
25		MTC SB43 (配石2)	9.27	8.58	4.76	575.16	花崗岩	2?+	完形
26		MTD SB43	7.24	6.42	4.43	309.37	花崗岩		完形 磨石
27	2	MTD SB43	7.20	5.93	3.53	188.10	密結軽火岩	1	磨石兼用
28		MTD SB41	12.95	10.40	5.50	1083.41	砂岩		
29	8	MTB 上 G1A	9.03	8.47	4.41	492.41	花崗岩	1	
30	9	MTB 上 G6A	9.19	8.25	5.23	633.29	細粒花崗岩		磨石
31	7	MTB 上 G1B	11.30	7.33	4.35	503.77	砂岩	2	磨石兼用被熱
32	6	MTB 上 G10A	10.15	8.71	4.18	524.49	砂岩	2+2	一部欠磨石兼用
33		MTB 上 G1C	9.94	7.19	4.68	516.69	安山岩	2+2	磨石兼用被熱
34		MTB 上 G1C	10.45	8.22	6.35	827.07	砂岩		磨石
35	12	MTB 上 G6C	11.80	8.43	5.22	619.15	花崗岩	1+1	
36	13	MTB 上 G6C	9.03	7.87	4.51	460.45	細粒花崗岩	1+1	周囲面打痕多致
37		MTC SB43 (配石2)	13.15	11.10	7.60	1571.37	石英質粗粒 砂岩		丸石可能性有
38	1	MTB 上 G1C	8.96	7.89	5.85	563.68	安山岩	1+1	完形
39	3	MTB 上 G1C	10.03	8.87	4.24	485.51	安山岩	1+2	一部欠1/5
40	5	MTB 上 G1C	9.52	7.20	3.97	376.54	安山岩	2+2	完形
41	4	MTD 土坑	7.86	6.88	3.55	255.68	細粒花崗岩	1+1	周囲面打痕多致

#### 7 砂石 (22点出上中8点計測)

番	写真番号	注記	長さ <sup>+</sup>	幅 <sup>+</sup>	厚さ <sup>±</sup>	重さ <sup>±</sup>	石 質	欠損状況	備考
1		MTB 下 SB3	3.28	5.74	1.50	32.97	砂岩	残存わずか前面二面	
2		MTB 下 SB6	3.22	8.90	1.15	38.71	砂岩		
3		MTB 下 SB8	16.75	9.75	3.55	420.79	砂岩	前面背面1/4欠	
4	1	MTB 下 SB12	15.18	16.50	2.18	827.67	砂岩	片面磨面2/3欠	
5		MTB 下 SB28	7.62	6.95	1.33	87.95	砂岩	片面磨面1/2欠	
6		MTB 上 配石下	9.20	8.75	3.08	370.18	砂岩	両面磨面1/3欠	
7		MTB 下 SB19	11.40	8.36	4.66	562.95	粗砂岩	5/6欠	
8		MTD SB32	16.50	15.70	5.75	1430.03	粗粒砂岩	3/4欠両面直	

#### 8 磨製石斧 (18点出土中18点計測)

番	写真番号	注記	長さ <sup>+</sup>	幅 <sup>+</sup>	厚さ <sup>±</sup>	重さ <sup>±</sup>	石 質	欠損状況	備考
1	10	MTB 下 SB2	8.62	4.03	1.05	68.88	非質砂岩	ほぼ完形	
2	3	MTB 下 SB15	11.23	5.55	2.51	233.74	蛇紋岩質 変成岩	頭部欠	
3	1	MTB 下 SB18	5.27	2.92	0.98	30.76	蛇紋岩質	下部1/4欠(装飾品)	
4	12	MTD SB31	7.97	4.09	1.49	87.86	蛇紋岩質	ほぼ完形	
5	13	MTB 上 配石下	4.71	4.31	1.28	36.87	蛇紋岩質	下部2/3欠	
6	14	MTB 下 SB18	16.92	6.70	2.33	539.48	蛇紋岩質	中央剥離先端つぶれ	
7	9	MTB 下 SB3	8.70	5.02	2.13	177.12	蛇紋岩質	上部1/2欠	
8	7	MTB 下 SB4	9.30	5.57	2.63	258.20	蛇紋岩質	上部1/2欠	
9	11	MTC 檜山	8.44	5.24	2.55	186.72	蛇紋岩質	上部1/2欠	
10	6	MTB 下 SB5	9.17	4.10	2.00	108.15	蛇紋岩質	器面荒刺立日立つ	
11	8	MTB 下 SB3	9.06	5.92	2.07	202.78	珪岩	下部1/3欠	
12	2	MTB 下 SB17	6.30	2.56	0.98	27.94	蛇紋岩質	下部1/6欠(装飾品)	
13	4	MTB 下 SB12	4.96	1.81	0.69	10.76	蛇紋岩質	ほぼ完形	
14	5	MTB 下 SB6	3.67	2.10	0.98	11.19	蛇紋岩質	上部1/2欠(装飾品)	
15	17	MTC 配石1	4.62	2.05	0.94	16.58	緑色凝灰岩	ほぼ完形 (装飾品)	

16	16	MTB 下 SB2	12.80	5.74	2.29	275.31	砂岩	未製品
17	15	MTB 下 SB11	10.68	4.90	2.06	161.04	蛇紋岩質	未製品
18		MTD 土坑	15.15	6.21	2.94	392.25	蛇紋岩質	未製品

9 石皿 (1点出土中1点計測) 注、砾石中で大型のものは石皿として使用した可能性もある)

番	写真番号	注記	長さ <sup>mm</sup>	幅 <sup>mm</sup>	厚さ <sup>mm</sup>	重さ <sup>kg</sup>	石質	欠損状況 備考
1	1	MTD SB28	25.50	11.10	5.21	2191.51	安山岩	3/5欠

10 石棒 装飾品 その他 (19点出土中19点計測) 注、石棒には立石は含めていない)

番	写真番号	注記	分類	長さ <sup>mm</sup>	幅 <sup>mm</sup>	厚さ <sup>mm</sup>	重さ <sup>kg</sup>	石質	欠損状況 備考
1	1	MTB 下 SB4	石棒?	7.55	5.32	3.53	274.56	細粒砂岩	
2	2	MTC 配石 4	小丸石?	3.98	3.88	3.46	94.47	硬質石英質砂岩	完形 磨石の可能性有
3	3	MTB 上 配石下	小丸石?	6.10	5.57	5.08	236.81	花崗岩	完形 磨石の可能性有
4	4	MTB 上 G4E	石棒 有頭	3.33	3.67	2.73	44.47	砂岩	頭部のみ残存 1/4欠 被熱
5		MTC 配石 4	石棒 無頭	22.10	11.00	10.55	4500.00	安山岩	上半欠
6		MTC 配石 4	石棒	26.16	12.20	8.00	6000.00	点紋綠泥片岩	上・下欠 1/2欠
7	5	MTB 上 G4A	石棒	7.15	3.36	2.68	124.14	綠泥片岩	上下欠
8	6	MTC 配石 3	石棒 有頭	15.20	頭7.76 6.03		574.75	綠泥片岩	頭部先端くぼみ 残1/3 刺離
9		MTC 配石 1	玉斧	8.48	4.02	0.44	28.05	蛇紋岩質	ほぼ完形 孔1
10		MTB 下 SB6	臼玉	2.16	2.02	0.58	4.34	滑石	完形 穿孔1
11		MTB 下 SB6	小丸石?	2.20	1.53	0.97	4.31	砂岩	完形 被熱
12		MTB 上 G5A	小丸石?	3.43	3.00	3.08	39.63	細粒砂岩	光形 ベンガ
13		MTB 上 G3C	小丸石?	4.79	4.54	4.07	110.33	砂岩	光形
14		MTC 檜山面	十字彫石器?	2.22	2.78	0.50	1.63	黒曜石	ほぼ完形
15		MTC 檜山面	十字彫石器?	4.96	4.72	1.05	15.55	赤色チャート	ほぼ完形
16		MTC 配石 4	小丸石?	4.69	4.68	4.01	144.66	硬質石英質砂岩	完形
17		MTC 配石 2	石棒	7.82	9.15	8.22	772.69	安山岩	上下欠
18		MTC 配石 1	丸石	26.55	27.05	21.80	21500.00	硬質石英質粗粒砂岩	完形 僕くぼみ有
19		MTC SB38	石棒 無頭	44.45	16.90	17.58	22000.00	安山岩	下部欠

第3表 山土土製円盤一覧

(107点出土中 107点計測)

番	写真図版	注記	長径(mm)	厚さ(mm)	部位	欠損状況	備考
1	1	MTB 上 G1B NO.35	36.5	10.2	側面		
2		MTB 上 G1B NO.35	31.3	.7.5	側面		
3		MTB 上 G1C	47.7	9.7	側面		
4		MTB 上 G1C NO.36	40.7	9.9	側面5割欠		
5		MTB 上 G1C	40.4	7.4	側面		
6		MTB 上 G1C	32.4	7.1	側面		
7		MTB 上 G1C	26.8	8.9	側面3割欠		
8		MTB 上 G1D	16.2	12.0	側面1割欠		
9		MTB 上 G1D	37.8	6.5	側面5割欠		
10		MTB 上 G1D	28.4	14.7	側面?		
11		MTB 上 G1E	32.5	8.7	側面? 7割欠		
12	2	MTB 上 G1・2A	46.5	9.5	側面		

13	MTB 上 G1・2B	42.7	7.5	?	
14	MTB 上 G1・2D	39.4	9.1	側面3割欠	
15	MTB 上 G1・2D	36.4	7.3	側面4割欠	
16	MTB 上 G1・2D	31.6	10.3	側面1割欠	
17	MTB 上 G1・2D	36.2	10.6	側面5割欠	
18	MTB 上 G1・2D	41.4	9.1	側面5割欠	
19	MTB 上 G1・2D	34.4	9.7	側面7割欠	
20	MTB 上 G2B	30.5	11.4	側面模様あり	
21	MTB 上 G2C	37.0	10.3	側面	
22	MTB 上 G2C	31.7	9.8	側面2割欠	
23	MTB 上 G2D	115.5	20.7	底	
24	MTB 上 G2D	69.4	14.8	側面4割欠	
25	MTB 上 G2D	55.0	10.2	側面6割欠	
26	MTB 上 G2D	56.8	10.0	側面1割欠	
27	MTB 上 G2D	39.8	10.4	側面2割欠	
28	MTB 上 G2D	34.7	12.8	側面3割欠	
29	MTB 上 G2D	40.2	8.9	側面	
30	MTB 上 G2E	34.4	11.4	側面4割欠	
31	3 MTB 上 G2・3E	31.6	7.7	側面	
32	MTB 上 G2・3E	31.8	12.8	側面3割欠	
33	MTB 上 G2・3E	30.9	10.6	側面3割欠	
34	MTB 上 G2・3E	32.7	6.1	側面2割欠	
35	MTB 上 G3A	27.8	7.6	側面	
36	MTB 上 G3A	26.5	7.6	側面	
37	MTB 上 G3B	35.8	9.8	側面	
38	MTB 上 G3B	32.6	8.5	側面	
39	MTB 上 G3B	30.8	9.7	側面	
40	MTB 上 G3D	32.1	9.4	側面	
41	MTB 上 G3D	29.7	9.2	側面	
42	MTB 上 G3D	28.7	10.7	側面	
43	4 MTB 上 G3E	41.1	9.6	側面	
44	MTB 上 G3E	44.3	11.6	側面4割欠	
45	MTB 上 G3E	27.6	11.1	側面	
46	5 MTB 上 G4A	48.9	8.5	側面	
47	MTB 上 G4A	33.4	6.9	側面	
48	6 MTB 上 G4A	34.1	9.4	側面	
49	7 MTB 上 G4A	29.5	6.7	側面	
50	MTB 上 G4A	25.0	9.5	側面	
51	8 MTB 上 G4CNO.42	30.8	10.6	側面	
52	MTB 上 G4D	37.1	7.1	側面	
53	MTB 上 G4D	37.8	8.8	側面	
54	MTB 上 G4D	28.3	8.6	側面	
55	MTB 上 G4E	30.0	8.5	側面2割欠	
56	MTB 上 G4E	30.9	8.5	側面3割欠	
57	9 MTB 上 G4・5C	32.7	7.0	側面	
58	MTB 上 G5A	31.5	9.5	側面3割欠	
59	MTB 上 G5A	29.0	7.9	側面2割欠	
60	MTB 上 G5B	55.2	9.4	側面2割欠	
61	10 MTB 上 G5D	41.5	7.1	側面	
62	MTB 上 G5D	37.5	10.2	側面	

63		MTB 上 G5D	30.2	11.9	側面	
64		MTB 上 G5D	22.3	10.0	側面5割欠	
65		MTB 上 G5・6B	38.6	10.7	側面1割欠	
66		MTB 上 G6A	49.7	11.6	? 6割欠	
67		MTB 上 G6A	48.3	18.7	? 6割欠	
68		MTB 上 G6A	27.0	10.4	? 4割欠	
69		MTB 上 G6A	24.6	9.2	? 5割欠	
70	11	MTB 上 G6D	38.8	12.0	側面1割欠	
71		MTB 上 G6D	26.5	10.8	側面	
72		MTB 上 G7A	37.4	9.4	側面2割欠	
73		MTB 上 G7A	36.3	8.2	側面6割欠	
74		MTB 上 G7A	33.8	9.2	側面3割欠	
75		MTB 上 G7A	26.3	9.7	側面	
76	12	MTB 上 G8A	37.5	10.8	側面	
77		MTB 上 G8A	31.9	8.6	側面4割欠	
78		MTB 上 G8A	27.0	9.8	側面3割欠	
79		MTB 上 G8A	15.5	6.0	側面	
80		MTB 上 G8B NO.4	35.0	9.1	側面2割欠	
81		MTB 上 G8B	29.8	8.8	側面	
82		MTB 上 G8B	28.3	6.5	側面	
83	13	MTB 上 G8・9A	41.0	9.8	側面2割欠	
84		MTB 上 G8・9A	35.5	9.9	側面	
85		MTB 上 G9B	29.9	8.5	側面2割欠	
86		MTB 上 G9B	29.7	7.5	側面5割欠	
87	14	MTB 上 G NO.43	33.4	12.5	側面	
88		MTB 上 G NO.45	39.7	9.0	側面2割欠	
89		MTB 上 G 配石下	47.6	8.4	側面	
90	15	MTB 上 G 配石下	36.0	11.4	側面1割欠	
91		MTB 上 G 配石下	39.6	9.5	側面	
92		MTB 上 G 配石下	35.2	15.6	?	
93	16	MTC 配石3	50.2	11.3	側面	
94		MTC 配石1	35.4	7.3	側面	
95	17	MTC 東集石	32.2	10.7	側面	
96		MTC 東集石	36.3	9.2	側面	
97		MTC 配石2	32.0	10.0	側面	
98		MTC SB39 覆土	43.0	13.5	側面3割欠	
99	18	MTD 土坑	66.5	9.0	側面	
100		MTD 土坑	51.3	8.5	側面	
101	19	MTD 土坑	47.8	9.6	側面	
102	20	MTD 土坑	43.3	9.0	側面	
103	21	MTB FSB19	35.7	8.1	側面	
104	22	MTB FSB19	30.4	16.4	側面	
105	23	MTB FSB18	34.7	12.5	側面	
106		MTB 下 SB2	29.0	10.5	側面	
107		MTDSB26	21.8	7.0		

第4表 平安・鎌倉・戦国時代の遺構出土遺物

## 1. 土器 陶器 磁器観察表

図 番号.	検出地点	種 別	器種	寸法 (センチ)			色 虹		成形・調整の特徴	備 考	
				器高	口径	底高	内面	外面			
1	MTCBS39	土師器	壺	3.5	12.5	4.2	青褐色 口縁墨	黄褐色	輪轍成形 内面暗文 底部糸切後ナデ壓消	1/3 残	
2	MTCBS39	縄袖 陶器	碗				8.1	暗灰白 淡緑色釉	輪轍成形 展部へラ削り 付高台ヨコナデ 底部へラ削り	底部 1/2 残	
3	MTCBS39	土師器	碗				6.2	黑色	褐色	輪轍成形 内面暗文 付高台ヨコナデ 底部 回転糸切	底部のみ完
4	MTCBS39	土師器	壺	4.3	11.9	6.3	淡黒色	黄褐色	輪轍成形 内面暗文 底前回転糸切	3/5 残	
5	MTCBS39	土師器	壺				5.6	褐色	黄褐色	輪轍成形 底部回転糸 切	墨書き(不明) 底部 1/5 残
6	MTCBS39	土師器	壺			17.8	暗褐色	暗褐色	輪轍成形 口縁面取り		
7	MTC SK1	青磁	碗			16.1	断面 暗灰褐色 暗緑灰色釉		輪轍成形 展部へラ削り 花文	中国龍系窯 系 12C 後半	
8	MTC SK1	カワラ ケ	皿	2.4	10.1	5.2	淡黒色 黄褐色	黑色	輪轍?ナデ	体跡 1/5 残 底部なし	
9	MTC SK1	山茶碗	こね 鉢?			17.4	灰白色		輪轍成形	口縁 1/10 残 東海系	
10	MTC SK1	山茶碗	こね 鉢 片口	10.3	24.2	10.8	灰白色		輪轍成形 体部下半へ ラ削り 付高台ヨコナ デ 底部へラ削り	完形 東海 系 13C 中～ 後半	
11	MTC SK2	カワラ ケ	小皿	1.0	8.2	6.5	淡黒色 褐色	茶灰色	手捏 ナデ	1/5 残 13C ～14C 前半	
12	MTC SK2	カワラ ケ	小皿	1.3	8.2	5.4	淡茶灰色		手捏 ナデ	2/5 残 13C ～14C 前半	
13	MTASB47 検出面	白磁	V類		15.8		灰色		輪轍成形	口縁 1/12 残 11C 後半～ 12C 前半	
14	MTASB47 覆土	古窓戸	深鉢			12.8	淡茶灰色 わずか に茶色輪残る		輪轍成形 体部下半～ 底部へラ削り	底部 1/5 残 14C 末～ 15C 前半	
15	MTASK21	古窓戸	水滴			2.8	淡茶灰色 わずか に茶色輪残る		輪轍成形 体部下半へ ラ削り	体 部 下 半 1/4 残 14C 後半	
16	MTASK46	古窓戸	おろ し皿			7.0	淡茶灰色 わずか に茶色輪残る		輪轍成形 底部回転糸 切	底 部 1/2 14C ～ 15C 前半	
17	MTASB47 覆土	珠洲	擂鉢				暗灰色	内面おろし目		残存わずか 14C～15C	
18	MTASB47 覆土	土師質	内耳			23.0	暗茶色	黒褐色	外側ナデ		

## 2. その他遺物観察表

図 番号.	検出地点	分 類	材 質	寸法 (センチ)			欠損状況	備 考
				長さ	幅	厚さ		
19	MTC SK1	鏡	砂質粘板岩	(7.9)	(6.2)	(1.8)	4/5 存在(裏面及び周 回剥離)	
20	MTC 検出	小柄の 柄	鐵地銅張製	(9.0)	(1.5)	(0.5)	柄の部分のみ	

# 発掘調査参加者雑感

## 出土した土偶について

田中基義

今回他谷遺跡で出土した土偶は合計11点である。出土した遺構の内訳は、配石（集石）遺構から6点、住居址から5点であり、すべて縄文時代中期後業に属するものである。

同時に出土した石器や土器と比較すると非常に数が少ない感があるが、縄文時代中期において松本平の他遺跡でも出土土偶点数はこの程度のものである。松本市立考古学博物館展示解説カードNo29の「松本市内出土土偶点数一覧表」によると14の縄文中期の遺跡から出土した土偶点数は123点で、調査面積にも左右されるが1遺跡平均では、 $123/14 \approx 9$ 点となる。小林麻男氏の「長野県中期の土偶」（1996土偶シンポジウム4発表要旨）の中には、311遺跡、1517点、1遺跡4.8点と記述されている。宮下健司氏の「長野県の土偶」（1992「国立歴史民俗博物館研究報告」）によれば、平成2年の段階で長野県下出土の土偶は1203点、（全国第1位）内中期土偶は904点、このうち諏訪、松本平、上伊那が50%強を占めている。だが実際の出土状況のわかっているものは195点、内破損状態のもの188点、完形7点と非常に少ない。（側原健氏「棚畠土偶の周辺」1995『王朝の考古学』より）

出土点数が少ないということは、製作された絶対数も少なく、出土状況（出土場所、意図的な破損され方）等から生活用具である土器類とはまったく違った見方がされなければならない。土偶は縄文人の精神世界の中で生み出された第2の道具の代表である。

### 1. 出土土偶の概要

1) 配石（集石）遺構から出土の6点中、2は小型板状土偶の胸部でいわゆる「ばんざい型」ある。頭部との芯材接続孔がどちらもあり、2は左手の接続孔も見られる。3は板小の土偶で脚部、左手は欠損している。頭部については欠損しているのか上部にある模様がそれを現しているのか不明である。芯材接続孔はない。5、6は小型の有脚尻張立像土偶と思われ、ともに胸部である。なお、6には、脚部芯材接続孔がある。1は有脚尻張立像土偶の左足である。芯材接続孔はない。

2) 住居址出土の5点の部位的内訳は、7（SB17）、9（SB30）が右足のみ、8（SB19）が胸部、10（MTD検出）が頭部、11（SB34）が右手左脚右足欠損以外ほぼ完形である。配石（集石）遺構から出土の土偶に比べると若干年代的に遡るが大型のものである。土偶の最終的な廃棄の場所と土偶の大小とに意図的なものがあるのであろうか。次に住居址内出土の主な8・10・11の3点について概略を述べる。

8（SB19）は胸部のみであるが、有脚尻張立像と思われる。現存重量520gを量り完形品であればかなり大きいことが想像できる。胸部脇及び背面の沈線に若干ベンガラの朱が残る。芯材接続孔はない。縄文中期後業Ⅰ期に属する土偶である。

10（MTD検出）は頭部である。発掘時期が蘇寒で、表土が10cm厚の凍土に覆われ人力による作業が困難であったため、バックホーで表土除去作業をし、その際に出土している。したがって、この土偶を保有していた住居址はあきらかではないが、D地区（MTD）において同時期の住居址はSB27・34がある。土偶の形態は有脚立像と考えられ、顔の大きさは額の先から頭頂まで8cm。耳部には鼓形耳飾りが左右に付けられているため10cmを測る。頭髪は頭の両側にアーチ状に、また部分的に欠損しているが頭頂から後頭部かけても表現されている。また、頭髪を表現する両側のアーチ状沈線模様には、若干ベンガラの朱が観察できる。目は剣先文様を用いて表現されている。表情は若干異なるが同じ剣先文様を用いて目を描いているものとしては、三郷村東小倉（表面採集）、大町市大崎遺跡からの出土例がある。なお、胸部との芯材接続孔がある。縄

文中期後葉Ⅱ期に属する土偶である。

11 (SB34) は、土偶の形態は有脚尻張立像と考えられるが、腕部先端及び頭部側面両側に、額、頭頂頭髪部に穿孔が見られることから聚から吊られていたものと考えたい。出土状況も住居址入口右側で床面より若干高い地層より出土している。この土偶は現存部で27cmあることから、完形であれば、30cmを超えるものと思われる。文様については実測図を参照していただくこととして、ここでは形態上の特徴を中心に記述したい。

まず現段階でベンガラの朱が確認できる箇所は、首部前沈線、顔沈線の一部、胴部側面沈線、頭頂からさがる頭髪部溝、腕部先端穿孔周囲等である。芯材接続孔は、右足先と右脚を接続する部分に1本、左足と胴下半と上半を合わせ接続する部分に1本、胴下半と胴上半を接続する部分に1本、胴上半と頭部を接続する部分に1本確認された。この土偶の特徴でもある頭部の作りは、円形の板状粘土を2枚V字に接合し、前面頭頂から後後に粘土紐を編みながらアーチ状に渡し頭髪を表現している。近隣の遺跡で、この土偶と同じように2枚の板状粘土をV字に接合したものと、それと類似している頭部中央を凹ませた土偶を列記すると、三郷町東小倉、波田町葦原・麻神の各遺跡、松本市大村塚田・山影・坪ノ内・牛の川の各遺跡など、塙尻市中島遺跡などと、比較的多くの出土例がある。また、それらの土偶頭部には穿孔が数箇所見られるものが多い傾向にある。このことは、前述したとおり吊るすことを目的としていると考えられ、この時期、吊るす土偶と、地面に据える土偶の2形態の土偶が存在したのではないだろうか。本土偶は、縄文中期後葉Ⅱ期に属する。

以上他谷遺跡出土の土偶について、意見を述べてきましたが、石器や土器と異なり全身の形態がわかる資料が少なく、また勉強不足も重なって申し訳なく思います。今回は1996土偶シンポジウム4の資料を中心に観察を行った為、詳細部分についてはあいまいな箇所もあります。今後は実物を観察する機会を得られればと感じております。また、共伴する唐草文系土器の文化圏と土偶の形態の比較も行えば興味深いのではないかとも思います。最後に執筆にあたり桐原健先生、樋口昇一先生、平出博物小林康男館長にご指導いただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

## 広耳付壺形土器について

矢口健陽児

今回の他谷遺跡発掘調査で最も目を引く遺物のひとつが、D地区26号住居址 (MTDSB26) 出土の広耳付壺形土器である。

住居の形態 敷石住居、住居の大きさ推定2.8m、主軸方向N-76°-W、他の住居址に比べ小型である。

入口から中央やや奥にある炉に向か、また炉の周囲のうち北西部に直径約28cmの花崗岩、粘板岩が敷いてある部分敷石の住居である。敷石自体は全く火を受けていないが石を敷いていない床は焼土をもって厚さ2cmのほぼ均一な状態でたたき締めて構築してある。この焼土は、他で焼かれ持ち込まれたもので動物の骨片が多数焼土の中に含まれ、日本鹿の骨が確認されている。敷石の下からは焼土は検出されていないので石を敷く代替として焼土を敷き固めたものと類推できる。

埋甕 入口の先端に敷いてある石の下には正位の形で埋甕が据えてあり、敷石のひとつ直径28cmは埋甕の蓋を兼ねている。埋甕は口縁部に欠損は見られるが底部は存在する。内容物は土のみで骨等の検出はなかった。埋甕から本住居址は縄文中期後葉Ⅳ期に属する。

炉 花崗岩を主とし集められ一辺の内寸法約40cmの正方形をしており、炉自体はかなり火を受け長期にわたり使用されていたと考えられる。また炉の中には廃絶後季の大火を受けた花崗岩の割り石が投げ入れられてあった。

**出土位置** 敷石住居の中央やや奥にある炉の南西側奥床面直上から出土している。

**出土状況** 発掘作業は嚴冬期という条件の中で表土は養生したにもかかわらず約10cm厚の霜柱状の凍土で覆われおり人力による作業は困難であった。したがって重機による表土除去作業進捗の中で発見された。器は横倒で広耳部分を両横にしたほぼ水平位の状態で発見された。

**形態** 高さ20.3 幅広部分14.5 前後奥行き最大部8.7 くびれ部分奥行き5.8 (下から11cmの位置)

口縁部内径 長径5.0 短径4.5 (単位センチ)

円筒状壺形器形の左右両側の胴体部分に口縁直下から下端に至り広耳(ひだ状)が付いている。広耳部分にはそれぞれに6個の不定形の丸孔が穿かれ、胴体部分表・背面には隆起文と刺突文が施文されている。また、胴体部分隆起に沿ってまた、広耳の外縁部と丸孔の周囲の刺突文は連続した形で描かれている。広耳部分上端(口縁部より1cm下)に錐状隆起が口縁に沿ってめぐりその上下に、刺突文がめぐる。胴体下部の広耳の付け根部分には上下を区分する隆起がめぐり、これより下部には縦位の隆起により8分割され、さらにそれぞれの区画内は不規則で粗雑な沈線で描かれている。(この部分の施文が唯一この時期を特徴つけている)口縁部下の錐状隆起と広耳部分上端の接点には、左右ともに直径7~8mmの欠損がある。やや中空の欠損状態から見ると角状の突起が付くものと思われる。なお、器表面と背面の隆起及び刺突文の文様には、若干の違いがある。また、器上面から見て口縁の内輪はやや構円形で中間の内輪(くびれ部分)とは正比例ではなく若干捻りが見られる。それに合わせたように外部の広耳の造りにも左右ともに捻りが加えられている。本土器は内部・外部ともに火を受けた形跡はなく炭化物の付着も見られなかった。また内部は、覆土と同質の土が入っており覆土にも混入していた日本鹿の焼骨が一片含まれていた。その他は特徴づける遺物は発見されなかった。

**まとめ** ①広耳付壺形の器形は、本遺跡出土の他の土器との共通点あるいは類推できるものがなく特別なものと考える。②胴部の隆起及び刺突文様は、唐草文の変形か、あるいは玉に対する精神性を具現化したものなのか、アフォルメされた人体表現文様か、または焰、煙、香りをイメージしたものか。③時代は本土器の方がかなり下るが、口縁部を取り巻く37個の刺突文は貫通した孔ではないが、有孔錐付の系譜に類推できぬいか。④上面から見て口縁部及び広耳部の捻りは、意図的なものなのか成形過程における歪みなのか、意図的に成形されたものとすれば、上面からの視点を意識して作られているのであろうか。⑤本住居址は、炉自体は長期にわたっての使用が考えられるが、日常生活に結びつく土器の発見があまりない。

以上のことから、特異な器形、煮炊きに供し得ない、火を受けていない等、個人所有でなく村の共有物としての意味合いの強い非日常的な土器と考えられる。また、用途を貯蔵に求めるにすれば祭祀用の何かを入れるものなのか、呪術的な祀りへの供獻を想像させられる器である。

## 配石遺構について

深沢恒則

今回、他谷遺跡発掘作業に従事する機会を得た。その中でB・C地区から発見された配石遺構について、私なりに感じたことを書いてみたいと思う。

この配石は縄文中期末を中心とした祭祀遺構と見られる。一部B地区には縄文後期の土器廃棄場があったが、配石遺構と直接つながるものではないと思われる。当初B地区を調査し始めた際、環状に石がめぐるのではとも予想したが、実際は、長径50~60cmの石が7~8個集石した場所が最低3箇所、敷石住居の一部のごとく石の平面を上にして敷いた場所(敷かれている石は火を受けてかなり風化している)、立石が倒れたのではと思われるもの等様々で、配列には連なってこなかった。また、配石の単位もよくわからなかった。このB地区上面は、現在の耕作面から40cm程度で、調査区東側土手からは、配石に使われていたと推察され

る石が無数出土していることから、開田の際にかなり破壊されてしまったためと考える。

C地区はB地区の南側に位置し、B地区との間には道路等があり調査できない部分が20数mある。そして、B地区より約10m西寄りにあたる。このC地区を調査し始めるとき大きな石が積まれ、あたかも川原の様な集石が出現した（MTC配石1）。そして、その中に丸い石（硬質石英質粗粒砂岩）が一際人目を引いた。直径は約28cmを測り、長径73cm、55cmの大きな敷石の脇にある。また、その周囲には長径60~80cmの長い石が5~6個横たわっていた。その内2個は途中から折られ2つに分かれていた。これらの長い石は当時、敷石を取り囲むように立っていたと考えられる。またこの配石からは、土製スプーン、靴ベラ状の蛇紋岩質の垂飾りが出土している。

上記の配石から南へ5m離れたところには長さ30cmの立石がある。それからさらに南へ1mの所にも直径13mの自然石の丸石があった。私はその立石と丸石が何か意味のあるものではないかと考えた。（MTC配石4）また、その地点から南へ2.4m離れたところに頭部の欠損した石棒が立ったままの状態で出土した。その後、前述の敷石の位置から3.5m南の場所から3枚の敷石が検出された（MTC配石3下のSB37）。さらにそこから南へ4mの場所からも敷石が3枚検出され（MTC配石4下のSB38）、その下からは埋甕も出土した。またSB37敷石近くからは長径7cmの小判型の石が、SB38敷石近くからは直径3cmの磨かれた丸石が出土した。さらにSB38上面の配石4からは伊那地方の産と考えられる綠泥片岩製の石棒が裂けた形で発見された。

この三箇所の敷石は南に向かうに従い小規模になり、立石も配石3は小型に、配石4は立石の替わりに石棒を立てる形態となる。これらのはば4m間隔を持って配列された敷石は明らかに人為的なものと思われる。そこで配石1の敷石から約4m北の地点を調べてみた。するとそこにも敷石に使用されたと思われる平石が2つ確認でき、付近には割られているが復元すると約1mを測るの細長い石もあった（後のMTC配石2）。なお、この配石からは、石棒片、直径約5cmの平らな丸石が2点出土している。この配石の間隔を考慮しB地区を再度観察してみると敷石らしき配石の間隔はやや狭い感があるが、C地区の延長のものと考えてよさそうであった。

これらの配石遺構を観察しているうちに、自然に割れることは考えにくい立石、石棒がごとごと割られている点、大小様々な丸石が近くにある点が気になった。割られている点については縄文人が自ら破壊したのではないかと、また、丸石については立石だけでなく併せて何かの意味を持っているのではないかと考えた。そして、当時はもっとたくさん丸石が立石や石棒と並んでいたのではないかと思われてならなかった。そこで発掘途中ではあったが、配石遺構として知られる山梨県の金生遺跡に行ってみることにした。

まず、現地へ行き復元された遺跡をつぶさに観察したが石棒はあるが丸石は見当たらなかった。敷石は4箇所あり、その間隔は約2mであった。しかし、丸石は見当たらない。肩を落とし近くにある「大泉村歴史民俗資料館」を訪ねた。館内には金生遺跡の一部を復元したコーナーがあり、そこには石棒と並んで丸石があった。また、壁に飾ってある発掘時の拡大写真からも確認できた。石棒と丸石の関連についてようやく自信を深めることができた。

大泉村から戻り、その後他谷遺跡の丸石の下部が凹んでいる事がわかり、当初自分自身が思い描いていた立石、石棒は男性神を、丸石は女性神を意味しているという考えに自信を深めた。

丸いものにこだわった縄文人。この遺跡からは土製円盤も多数出土している。（総数107点 内 配石出土97点 土坑出土4点 住居址内出土6点）生活に必要なものであればそれなりに製造するであろうが土器の破片を再利用して作る程度の丸いものとは何であろう。きっと丸いものは立石と同じくらいに縄文人には大切なものであったろうと考える。大切な立石、石棒、そして敷石を法則的に並べた祭祀場をなぜ自らの手で破壊したのであろうか。

D地区はC地区に隣接しているが、全体に西に寄っている。そして他の地区とは異なり石混じりの土塗で

あった。このD地区の西側からは縄文時代の土坑群の一部が検出された（この土坑群はまだ西側の調査区域外へ続く可能性がある）。C地区の配石遺構からは南南西の方角である。配石遺構からは冬至に夕日が沈む方向である。魂の再生を願ったのであろうか。または、縄文時代風水の考えがあったのであろうか。

最後に、B・C地区の間で配石の中心部と思われる所が道路敷で調査できることは非常に残念でならない。これが調査でき、B・C地区の西側隣接地が調査できれば、金生遺跡の配石規模（長さ40m、幅8～10m）以上の大きなものになっていたかもしれない。しかし、これは今後の研究課題であり今後の発掘機会を待つしかない。余談であるが、大泉の周辺の地域では丸い自然石を道祖神として祀っている。原始からの風習が今も残っているのであろうか。また、他谷遺跡調査区西40mにある牧E-3号古墳の上に祀られている祠にも丸い自然石が大小無数にある。やはり丸石は現代人にとっても特別な意味を持つものなのかな。

## 他谷遺跡発掘雑感

竹内 崇

他谷遺跡の発掘では、縄文時代中期から後期にかけての遺構・遺物が大量に出土しました。

「丸石の発掘」の中で私は、安曇平で二例目といわれる「丸石の発見」に立ち会うことができました。C地区の発掘が始まってまもなく、点在していた巨石を掘り進み、その下層の検出を行っていたとき、長さ80cm直径30cm程の花崗岩の巨石が二つ、八の字形に並んで現れました。そして八の字形が狭まった所に、ちょうど亀の甲の様に白っぽい石の上面が顔を出しました。「磨石か？」と思って掘り進めると当初5cm位であった亀の甲が次第に広がっていきました。「これはおかしい」と思いながらさらに掘り進めると、直徑約30cm近くなつてようやく球形にすさまじ始めました。「これは大変な石球だ」と思い、早速報告しました。これが、後日各新聞で報道され話題となった「丸石を伴う配石遺構」発見の経緯です。また、八の字形の巨石は、丸石の両側に立てられていたと推測され、八の字形の内側には、祭壇を思わせる直径50cm程の扁平な石が置かれ、この遺構は明らかに祭祀的なものと推定されました。（その後、実測図面上で扁平な石と丸石とを結ぶ延長線方向が美ヶ原山頂に向いていることがわかり偶然ではない不思議な感じを受けました。）

「他谷遺跡最古期の縄文土器」一方住居址の発掘では、今回の発掘調査で最も古い時期となった、新道～藤内期の土器の発見が印象に残っています。

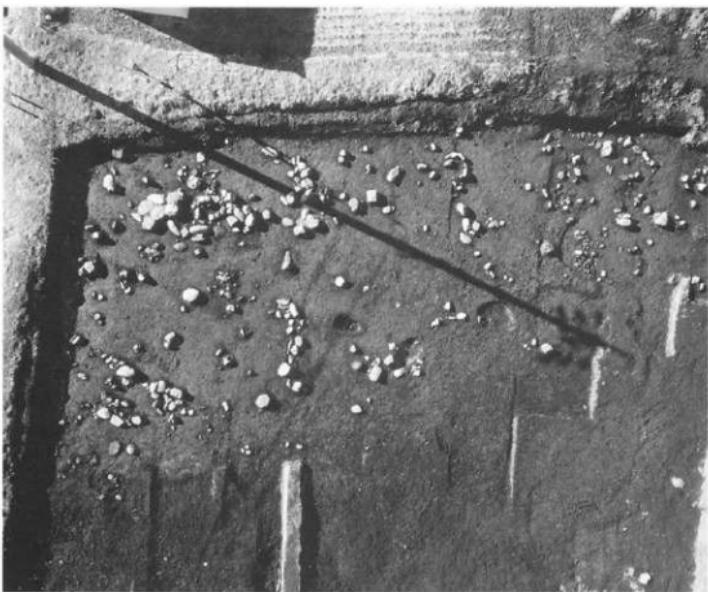
B地区的縄文中期後葉の地層を掘り終り、さらに下層へと掘り進んでいたある日の午後、私が住居址の周辺部を掘り下げていた時、2m程離れた二ヶ所から、これまでの唐草文とは全く異なる、楕円の区画文や縱方向の沈線が施された土器片が姿を現しました。「いつ頃の土器であろう」と考えていると、たまたま視察に来られていた先生が、新道～藤内期の土器であると教えてくださり、その特徴も解説してくださいました。私はこの五千年近く昔の縄文土器にふれ大変感激し、はるか昔この地に生きた縄文人の姿に、しばし思いをはせておりました。

「他谷遺跡の役割」縄文期の他谷は、中期中葉から後期中葉に至るまで、断続的に千数百年あまり続いていたと考えられ、予想を上回る大量の遺物と、祭祀の中心地を推測させる多くの配石遺構が発掘されました。殊に土偶は大小11点が出土し、焼土を敷き固めた特殊な敷石住居や、その住居址内から発見された広耳付壺形土器とあいまって、他谷遺跡の祭祀的性格が一層強く確信されました。

「安曇平の唐草文系土器」土器類の中では、縄文中期後葉の唐草文系土器（熊久保式土器）の出土が最も多く、貴重な遺物や遺構は、ほとんどこの時期に集中していました。とは言うものの今まで、唐草文系土器の主たる分布地は、松本平南部から諏訪盆地、伊那谷北部にかけてといわれ、安曇平では発掘調査の件数がいまだ少ないこともあって、分布そのものも比較的少ないと思われてきました。しかしながら、各期の唐草文系土器が大量に出土した今回の他谷遺跡発掘調査の成果から見ると、唐草文系土器の分布は、この地に

も確実に及んでいたと考えられます。

「他谷は縄文中期後葉の拠点集落」今回の発掘調査作業を通じて、感じたことは次のようなことです。即ち、いくつもの祭祀的配石遺構や、県下でもほとんど出土例のない広耳付壺形土器、多くの土偶等を伴出した他谷遺跡は、北アルプス山麓、安曇平の中央部に位置する縄文中期後葉の唐草文系土器期の重要な拠点集落であり、極論すれば唐草文土器を擁する文化圏は、北アルプス山麓中央部（現南安曇郡）にも確実に広がっており、他谷はその中心を成す拠点のひとつだったと言えると思います。



B 地区上层全景(配石檢出狀態)



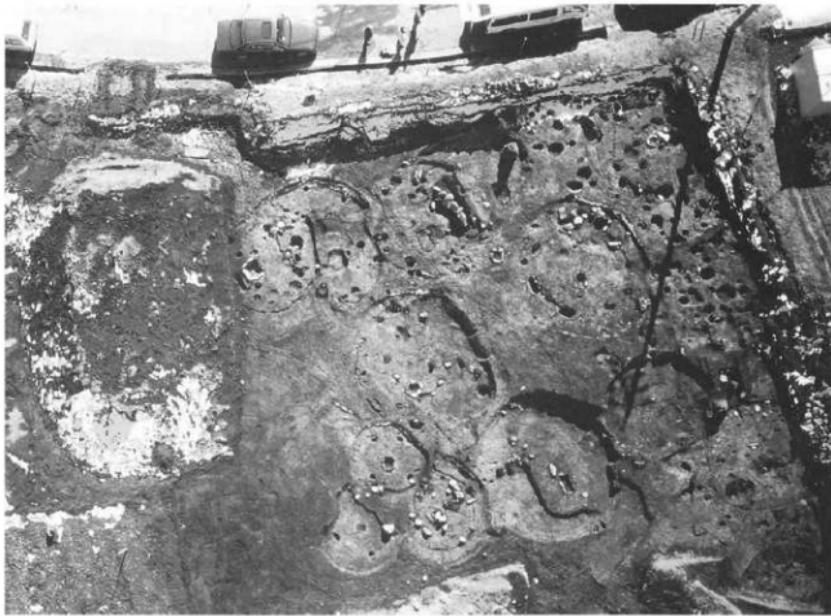
C 地区全景(配石檢出狀態)



A地区全景

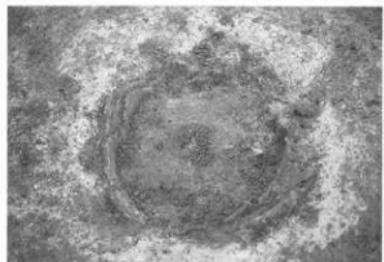


C地区全景(掘立柱建物址他)



B地区下层全景

MTB下  
SB 1  
右 同埋甕炉



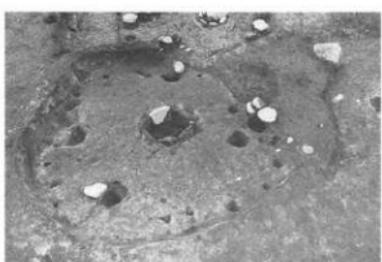
MTB下  
SB 2  
右 同石圈炉

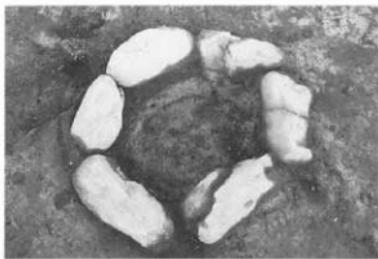


MTB下  
SB 2  
土器出土状况



MTB下  
SB 3  
右 同石圈炉





MTB下  
SB4  
左 同石圓炉



MTB下  
SB5, 14,  
13の切り合い状況  
左 SB5  
石圓炉



MTB下  
SB6  
石圓炉  
左 SB10  
石圓炉



MTB下  
SB9  
左上 同土器出土状況  
左下 同埋甕



MTB下  
SB13  
土器出土状况  
右 同埋甕炉



MTB下  
SB17  
右上 同石圆炉  
右下 同土器出土状况

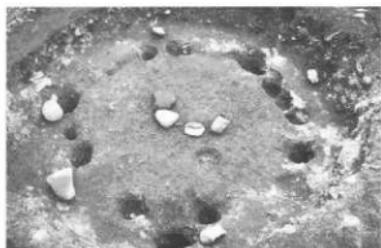


MTB下  
SB20  
右 同石圆炉



MTB下  
SB19  
右 同石圆炉





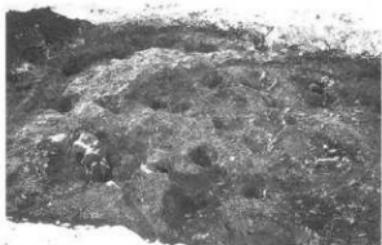
MTD  
SB26  
左上 同石圈炉  
左下 同罐壳  
右下 同広耳付壺形土器出土状况

MTD  
SB28  
左上 同土器出土状况

左下 同土器出土状况  
右下 同土器出土状况

MTD  
SB30  
左 同石圈炉

MTD  
SB32・34の  
切り合い状況  
右 MTD  
SB34  
土偶出土状況



MTC  
(SB37上面)  
配石3  
右 MTC  
SB37



MTC  
(SB38上面)  
配石4  
右上 MTC  
SB38  
東側石棒  
右中 MTC  
SB38  
石圓炉内  
石棒出土状況

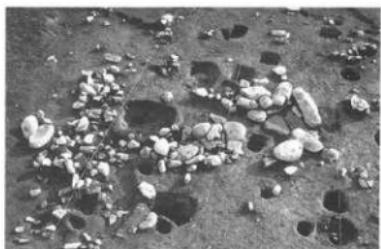


MTC  
SB38  
右下 同石棒復元





MTC  
SB40  
石圓埋甕炉  
左 同土器出土状況



MTC  
(SB42, 43上面)  
配石 1・2  
左 配石 1  
手前丸石



MTC  
SK1と配石 2  
左 SK1  
こね鉢出土状況



MTC  
SK13  
(弥生再葬墓) 出土甕  
左 同甕内出土小型甕

MTB上  
配石  
右 MTB上  
配石  
(SB46)



MTB上  
配石  
右 同配石



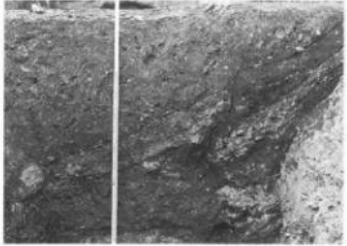
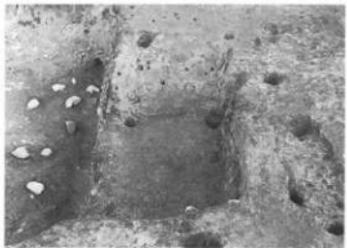
MTB上  
配石  
右 MTB上  
配石下  
土器出土状况



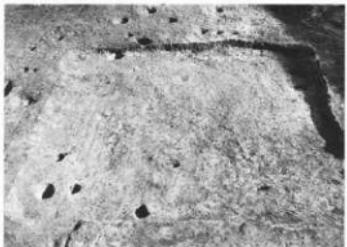
MTB上  
土器廢棄狀況  
右 同土器廢棄狀況



PL10



MTA  
SB47 (地下式遺構)  
左上 同入口部階段状  
施設  
左下 同覆土堆積状況



MTA  
SK 4, 6, 7  
左上 MTA  
SK26, 27, 53,  
28, 29  
左下 MTA  
SK8, 9

MTA  
SK 4, 6, 7  
左上 MTA  
SK26, 27, 53,  
28, 29  
左下 MTA  
SK8, 9

左 石鏃

左より

上 1~8

中 9~15

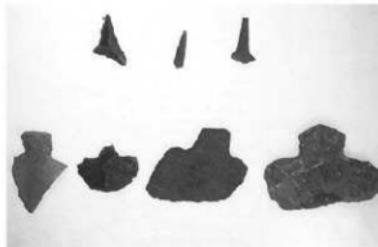
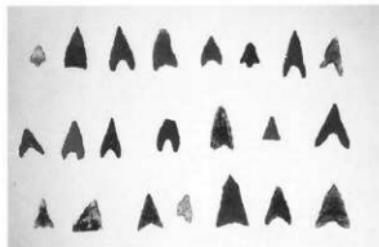
下 16~22

右 石椎・石匙

左より

上 1~3

下 1~4



左 石匙

左より

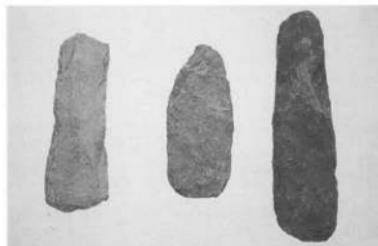
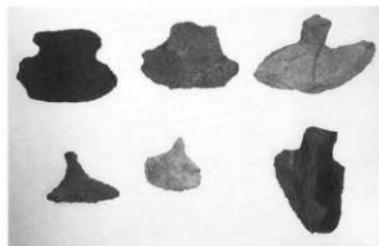
上 5~7

下 8~10

右 打製石斧

左より

1~3



左 打製石斧

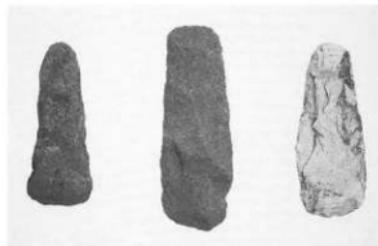
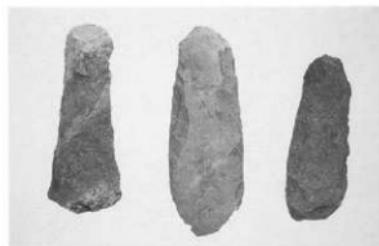
左より

4~6

右 打製石斧

左より

7~9



左 打製石斧

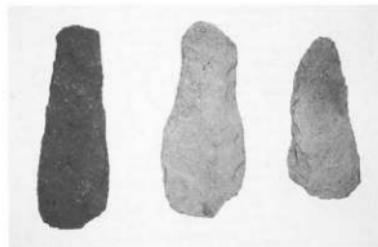
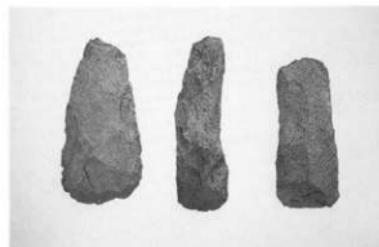
左より

10~12

右 打製石斧

左より

13~15



左 スクレイパー

横刃石器等

左より

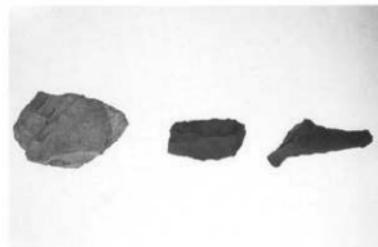
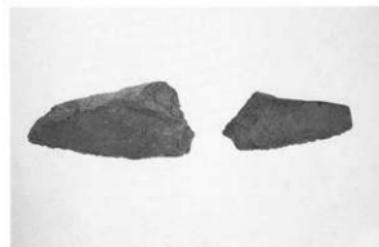
1~2

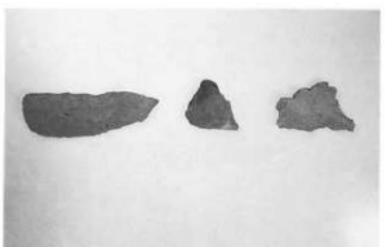
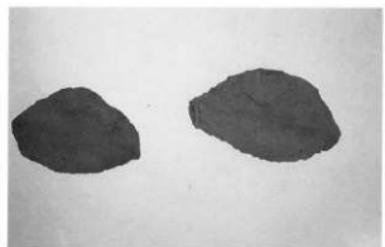
右 スクレイパー

横刃石器等

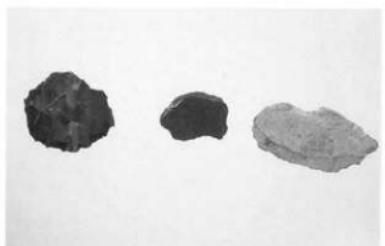
左より

3~5

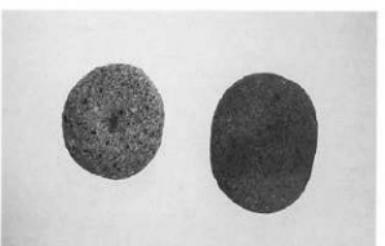
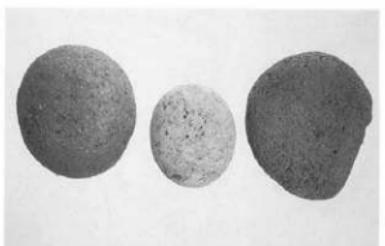




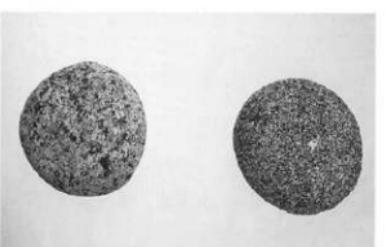
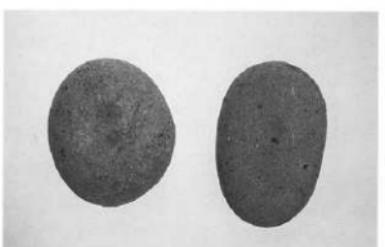
左 スクレイパー  
横刃石器等  
左より  
6～7  
右 スクレイパー  
横刃石斧等  
左より  
8～10



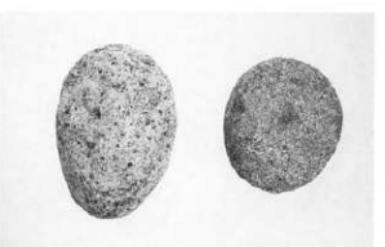
左 スクレイパー  
横刃石器等  
左より  
11～13  
右 スクレイパー  
横刃石斧等  
左より  
14～17



左 凹石・敲石  
磨石  
左より  
1～3  
右 凹石・敲石  
磨石  
左より  
4～5

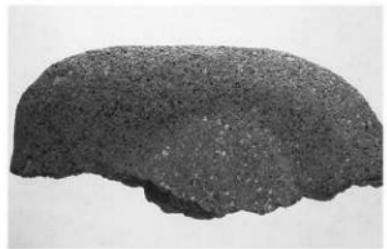
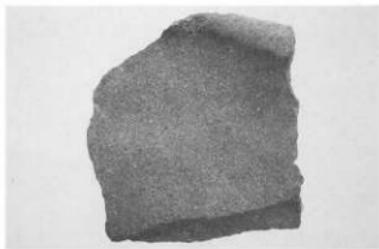


左 凹石・敲石  
磨石  
左より  
6～7  
右 凹石・敲石  
磨石  
左より  
8～9

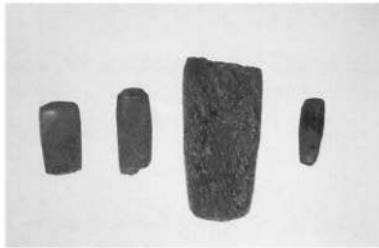


左 凹石・敲石  
磨石  
左より  
10～11  
右 凹石・敲石  
磨石  
左より  
12～13

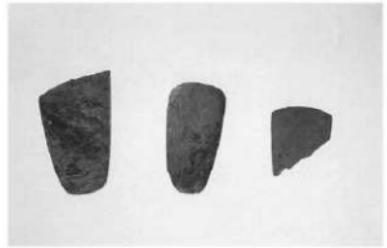
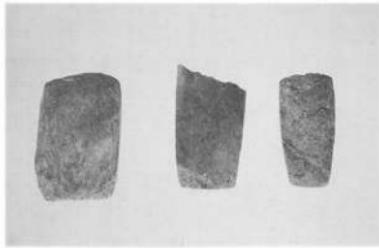
左 砥石  
1  
右 石皿  
1



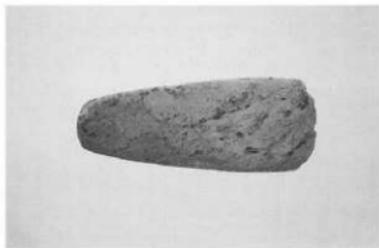
左 磨製石斧  
左より  
1~4  
右 磨製石斧  
左より  
5~7



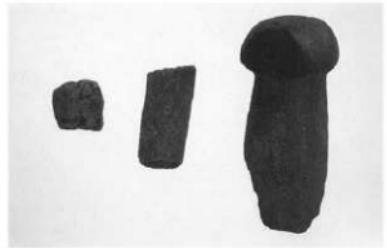
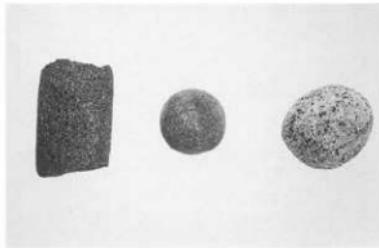
左 磨製石斧  
左より  
8~10  
右 磨製石斧  
左より  
11~13



左 磨製石斧  
14  
右 磨製石斧  
左より  
15~17

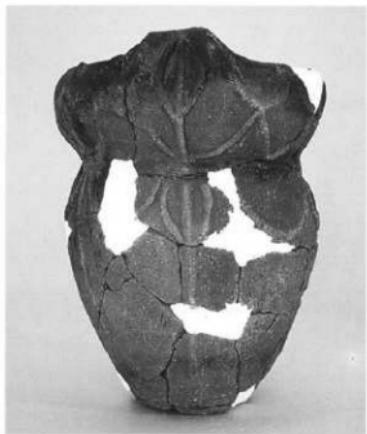


左 石棒  
装飾品・その他  
左より  
1~3  
右 石棒  
左より  
4~6





左 SB1  
右 SB2



左 SB2  
右 SB2



左 SB2  
右 SB2

左 SB2  
右 SB3



左 SB3  
右 SB3



左 SB4  
右 SB4





左 SB 4  
右 SB 4

左 SB 4  
右 SB 5

左 SB 7  
右 SB 9

左 SB9  
右 SB9 (埋甕)



左 SB9  
右 SB9



左 SB13  
右 SB13





左 SB13  
右 SB13



左 SB13  
右 SB13



左 SB13  
右 SB17

左 SB17  
右 SB17



左 SB17  
右 SB17



左 SB17  
右 SB17





左 SB19  
右 SB20



左 SB24  
右 SB25



左 SB26 (裸壳)  
右 SB27 (裸壳)

左 SB28  
右 SB28



左 SB28  
右 SB29



左 SB31  
右 SB31





MTC  
SB38西侧  
单独埋甕  
左 (北側出土)  
右 (南側出土)



右 SB40  
左 SB38



左 ST1  
ピット内出土  
土器  
右 MTB上  
G6 A甕

SB34出土  
土偶左から  
正面・頭部側面拡大・  
背面



MTD検出面出土  
土偶  
左 正面  
右 背面



MTC SK 1 出土青磁碗



MTC SK 1 出土こね鉢

## 他谷遺跡調査報告書

発行日 平成13年3月26日

発 行 稚高町教育委員会

〒399-8303

長野県安曇郡稚高町稚高5047

電話 (0263) 82-5970

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田470

電話 (026) 243-2105

